文部科学省

セキュアな環境における生成 AI の校務利用の実証研究事業

成果報告書

令和 8 年 3 月

目次

第 1 章　はじめに 1

1.1 事業の背景・概要 1

第 2 章　事業（II）の実施体制 2

2.1 事業（II）の目的と位置づけ 2
2.2 実施体制 3
2.4 実証環境 5
2.5 実証環境で実現されること 7
2.6 各種会議の運営 10
2.7 実証スケジュール 11

第 3 章　事業(I) 事業(III)との連携支援 12

3.1 研修・サポートの実施 12
3.2 ユースケース・プロンプトの収集・整理 13

第 4 章　事業(II)における効果検証と分析結果 14

4.1 ユースケースの定義および効果検証方法 14
4.2 アンケート分析結果 19
4.3 システムログ分析結果 31
4.3 まとめ 45

第 5 章　まとめ 52

5.1　実証目的に対する成果の総括 52
5.2 まとめ 53

[付録：アンケート] 55

第 1 章　はじめに

1.1 事業の背景・概要

近年、生成 AI の技術革新は目覚ましく、社会の様々な分野での活用が進んでいます。学校現場においても、教職員の働き方改革や教育の質の向上に寄与するツールとして期待が高まっている一方で、個人情報や機密情報を含むデータの取り扱いに関するセキュリティ上の懸念から、その利活用は限定的な範囲に留まっている現状です。

文部科学省は、令和 6 年 12 月に「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）」を公表し、学校現場における適切な利活用を推進しています。同ガイドラインにおいては、生成 AI の活用が教育活動の高度化等に寄与する可能性が示されている一方で、一般に提供されている汎用的な生成 AI サービスは入力データが AI の学習に利用される可能性や情報漏洩のリスクがあるため、児童生徒の氏名、成績、指導記録といった機微な個人情報を含む校務での利用には慎重な対応が求められています。

本事業「セキュアな環境における生成 AI の校務利用の実証研究事業」は、これらの背景を受け、ガイドラインを遵守しつつ、適切なセキュリティ対策の下で成績情報、出欠記録、指導要録等の個人情報等の重要性の高い情報を取り扱える生成 AI 利用環境（セキュアな環境）を構築し、実際の校務における活用実証を行うものです。具体的には、実証地域において、校務支援システムやファイルサーバー等のデータを安全に連携させ、チャットボットやダッシュボード等のツールとの連携も含めた実証を行います。これにより、繁忙期を含む年間を通じた教職員の業務効率化および教育活動の高度化に資する知見を蓄積し、セキュアな環境で活用できるユースケースを見出し、全国への普及モデルを構築することを目的としています。

本報告書は、本事業での取組の成果をとりまとめたものです。

第 2 章　事業（Ⅱ）の実施体制

2.1 事業（Ⅱ）の目的と位置づけ

事業（Ⅱ）は、実証環境の構築・運用を行う事業（Ⅰ）および事業（Ⅲ）の事業者、ならびに実証地域（自治体・学校）に伴走し、円滑な実証を支援するとともに、得られた定量的・定性的なデータを客観的に検証する役割を担います。また実証地域が意見交換を行う会議や有識者による会議の運営を実施します。最終的には、本成果報告書およびガイドブックを作成し、セキュアな環境で活用できる校務事例・ユースケースを全国の教育関係者に展開します。

本事業における事業（Ⅱ）の主な実施内容は以下の通りです。

●**実証支援と連携：**実証地域における研修会や連絡協議会の運営、サポート体制の構築を支援し、円滑な実証推進を支えます。併せて、教育委員会や教職員への研修・サポートを実施し、現場のニーズに即した活用事例（ユースケース）の創出を支援します。

●**データに基づく効果検証：**システム利用ログ（チャット数、利用内容等）の解析および教職員へのアンケート・ヒアリング調査を行い、業務時間の削減効果や業務品質の向上について多角的に検証します。

●**成果物の作成：**検証結果に基づき、導入効果や課題、解決策を整理した本「成果報告書」および現場での活用事例を体系化した「ガイドブック」を作成します。

本報告書は、これらの支援・分析を通じて得られた知見、特に「セキュアな環境」ならではの活用実績や、導入に際しての制度設計・運用上の課題を整理し、今後、全国の教育委員会や学校が生成 AI を導入・活用する際に資する情報を提供することを目的としています。

2.2 実施体制

本事業は、事業主体である文部科学省の統括の下、実証環境の構築を担う各事業者、実証フィールドとなる各自治体、および支援・分析を担う事業者が緊密に連携する体制で推進しました。

佐賀県嬉野市、埼玉県新座市、兵庫県宝塚市を実証地域として、各自治体の全ての小・中学校の教職員および教育委員会職員が実証システムを利用できるように実証環境の整備を行いました。嬉野市についてはアクセンチュア株式会社が、新座市・宝塚市については Sky 株式会社が実証環境を構築し、実証校や教育委員会に対する研修等のサポートを実施しました。また嬉野市は実証初年度、新座市・宝塚市は昨年度から継続した 2 年目の実証になります。

またこれらの取組のとりまとめや実証地域のサポート等を株式会社教育測定研究所が実施しました。

●事業（Ⅰ）実証フィールド：

- ◦ 実証地域：佐賀県嬉野市
- ◦ 事業（Ⅰ）事業者：アクセンチュア株式会社
- ◦ 事業（Ⅰ）の役割：生成 AI チャットボット実証環境の構築・運用、教職員への研修・サポート。

●事業（Ⅲ）実証フィールド：

- ◦ 実証地域：埼玉県新座市、兵庫県宝塚市
- ◦ 事業（Ⅲ）事業者：Sky 株式会社
- ◦ 事業（Ⅲ）の役割：生成 AI チャットボットおよびダッシュボード実証環境の構築・運用、教職員への研修・サポート。

●事業（Ⅱ）：

- ◦ 事業（Ⅱ）事業者：株式会社教育測定研究所
- ◦ 事業（Ⅱ）の役割：事業（Ⅰ）と事業（Ⅲ）と連携した実証支援、システムログおよびアンケート等のデータ分析、成果取りまとめ、各種会議等の運営。

●文部科学省：

- ◦ 事業全体の統括および指導・助言。

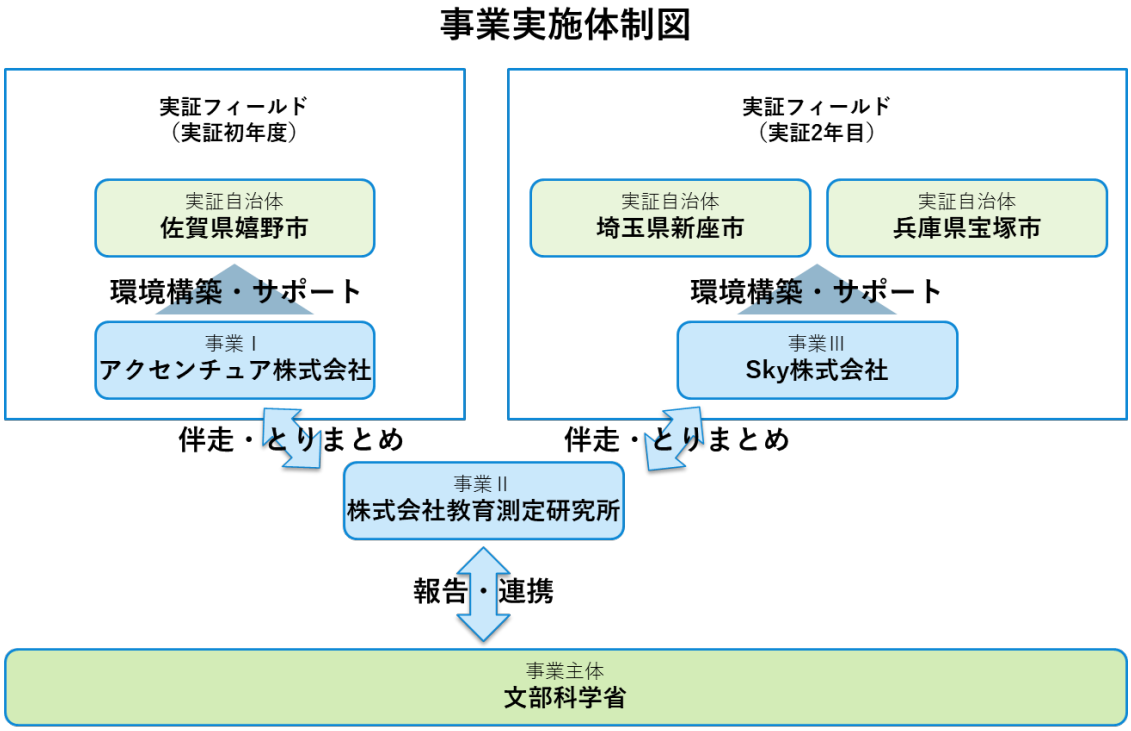


図 1 事業実施体制図

2.3 実証地域

佐賀県嬉野市

基礎情報 ●学校数：小学校 8 校、中学校 4 校 児童生徒数：約 1,900 人

埼玉県新座市

基礎情報 ●学校数：小学校 17 校、中学校 6 校 児童生徒数：約 12,500 人

兵庫県宝塚市

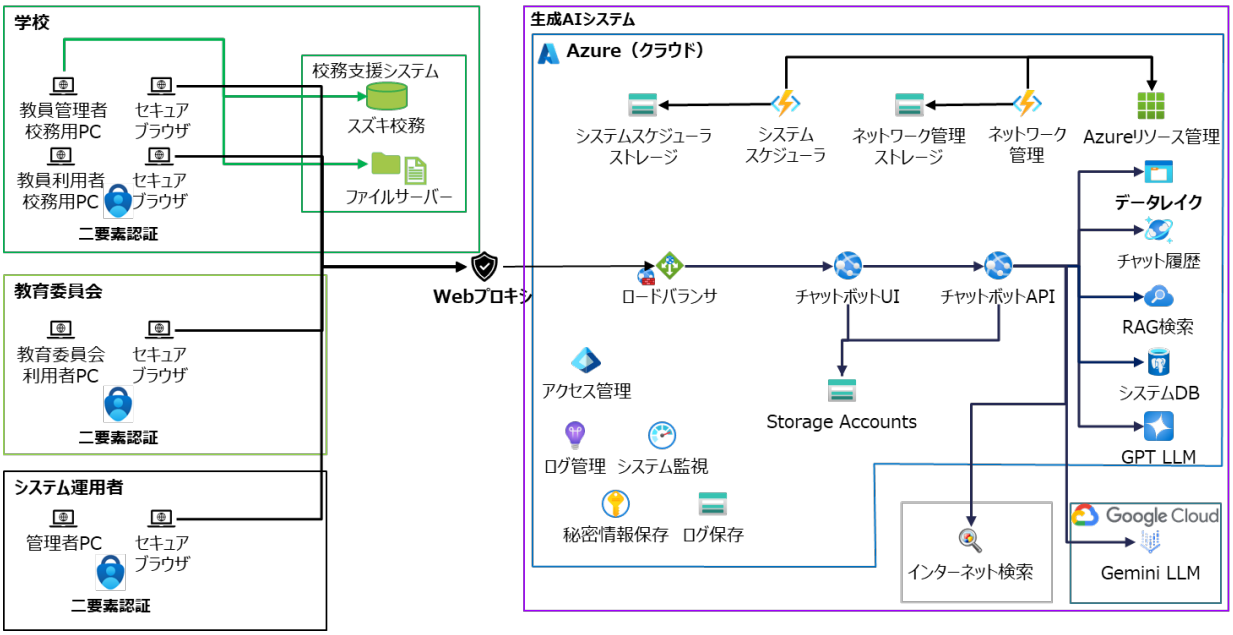
基礎情報 ●学校数：小学校 23 校、中学校 12 校、特別支援学校 1 校 児童生徒数：約 16,500 人

2.4 実証環境

本実証では、セキュアな環境の下で個人情報等の重要性の高い情報を入力できる生成 AI システムを開発・運用しました。

アクセンチュア株式会社は生成 AI チャットボット、Sky 株式会社は生成 AI チャットボットと生成 AI ダッシュボードを構築しました。

■アクセンチュア実証システム概要
- システム構成: Microsoft Azure 上の OpenAI Service を活用した、自治体ごとに独立したクラウド基盤
- セキュリティ: 閉域網接続（LGWAN-ASP 等）および多要素認証（Entra ID 連携）を実装し、庁内・校内ネットワークからの安全なアクセスを担保
- 主な機能: 「プロンプト・ライブラリ」による標準的な活用例の提示、および入力情報のフィルタリング機能（マスキング等）を備えた対話機能

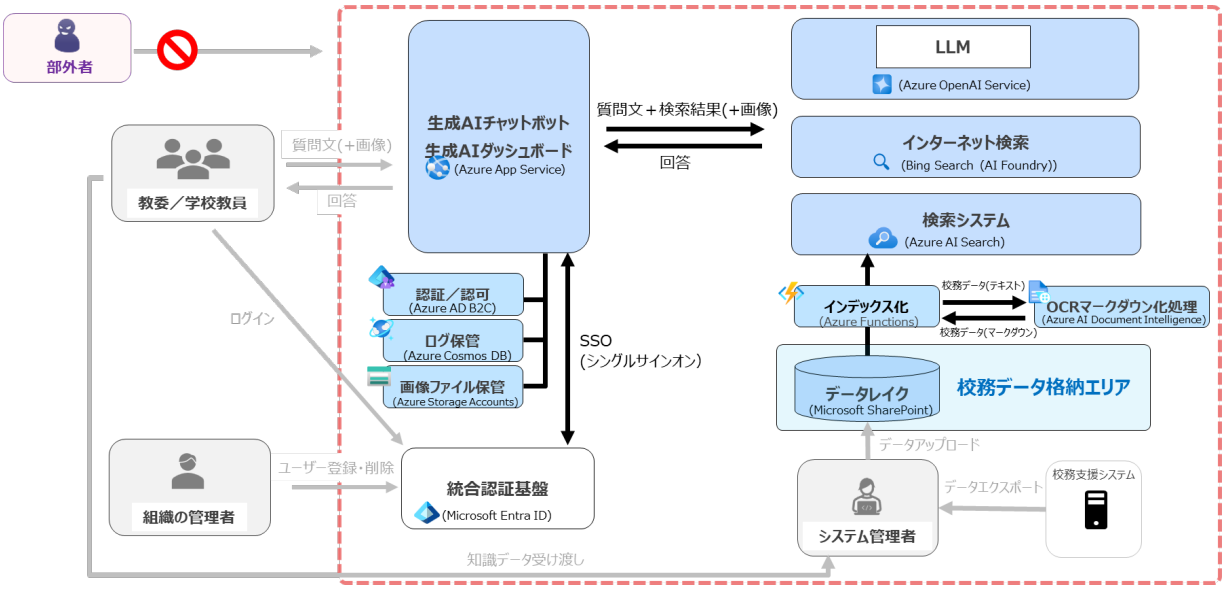


■Sky 実証システム概要

・システム構成: 生成 AI と既存の校務支援システムやダッシュボードを中継・連携させる拡張型基盤

・セキュリティ: 既存の校務用端末・ネットワーク環境を活かしつつ、個人情報等を含む校務固有データ（名簿等）を安全に読み込めるセキュアなデータ連携構造

・主な機能: 指定したファイル（PDF/CSV 等）に基づき回答を生成する機能や、校務支援システムのデータと連動した「通知表所見案」等の高度な生成・分析機能



2.5 実証環境で実現されること

実証で整備した生成 AI システムでは児童生徒の出欠情報や成績情報、学習ログ等の重要性の高い情報や個人情報を引用・入力することが可能です。そのため、例えば、これまで教職員の勘や経験に基づいて実施してきた校務について、複数のデータや児童生徒の様子の記録等を基に効率的且つ客観的な実施が可能になると考えられます。

また、約款サービスによる汎用的な生成 AI を利用する場合には、質問できる内容や回答が一般的なものに留まりますが、実証環境における生成 AI の回答は一人ひとりの児童生徒に特化した内容になることが期待されます。

本実証において実現が期待される事例

チャットボットで期待される事例

■授業準備

※定期テストを生成 AI に解かせ、解答を確認することで出題問題自体の質の確認を行う

多くの場合は…

これまではテスト作成者本人が解き直すか、同学年の副担任や教科担当が解くことでテストの内容を確認している。

生成 AI を利用すると…

生成 AI を「解答者」として活用することで、テストの作成プロセスに客観的な検証の工程を加えることができる。

プロンプト例

あなたは公立中学校の 3 年生です。今から提示する数学の定期テスト問題を、あなたの知識の範囲で解いてください。

#具体的な指示

・全ての問題に解答してください。
・問題文の中で「意味が分かりにくい箇所」や「複数の答えが考えられる不自然な箇所」があれば具体的に指摘してください。
・このテスト全体の難易度（5 段階）を評価してください。

■特定児童生徒の支援策案作成

汎用的な生成 AI を用いる場合は…

プロンプト例：

小学校 4 年生。計算は得意だが、運動会の練習など予定にない活動が入るとパニックになりやすい児童がいます。担任として、登校直後にどのような視覚的支援（スケジュール提示など）を行うのが効果的か、3 つ提案してください。

生成 AI の回答：

・1 日の流れをマグネット式カードで掲示し、変更箇所を色付けする。

・見通しを持たせるためのタイマー活用。

・パニック時のクールダウン場所の事前設定。



個人情報を参照可能な生成 AI を利用する場合…

プロンプト例：

[B さんの過去 3 年分の指導記録]と[保護者面談メモ]を参照してください。B さんは行事期間中に体調を崩す傾向がありますが、過去に最も効果的だった声掛けや配慮は何ですか。それに基づき、今年の運動会練習の個別計画を作成してください。

生成 AI の回答：

（過去の成功体験に基づいた具体的な計画が提示されます）

・2 年前の記録では、大きな音を避けるためにイヤーマフを使用した際に参加意欲が高まっています。

・昨年は連絡帳での事前共有が安心感に繋がったようです。

ダッシュボードで期待される事例

■特定児童生徒の学習指導案作成

多くの場合は…

「なぜこの単元でつまずいたのか」「以前のどの学習が抜けているのか」という原因まで深く探るには、教科ごとのテスト結果や過去の記録を掘り起こす膨大な時間が必要。



生成 AI を利用すると…

蓄積されたデータを AI が読み解くため、教職員は分析に費やしていた時間を「その子のための教材準備」や「個別の声掛け」に充てられるようになる。

2.6 各種会議の運営

事業の円滑な推進と成果の共有に向け、以下の会議体を設置・運営しました。

(1) 事業推進委員会

学識経験者や教育工学の専門家等、有識者からなる委員会を設置し、各事業者（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)、文部科学省の担当者から実証の進捗状況や課題について報告を行い、専門的な見地から指導・助言を得ました。

- **開催実績：**計 4 回（7 月 15 日、9 月 18 日、12 月 4 日、1 月 20 日）
- **主な内容：**実証計画の確認、研修に対する助言、中間報告、ガイドブック骨子の検討、分析結果へのフィードバック等。

(2) 連絡協議会

実証地域（嬉野市、新座市、宝塚市)、各事業者（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)、文部科学省の担当者が参加し、進捗状況の確認および地域間の情報共有を図りました。

- **開催実績：** 計 4 回（7 月 14 日、9 月 17 日、11 月 13 日、1 月 19 日）
- **主な内容：** 各実証地域における利用状況の報告、好事例（ユースケース）の共有、課題の検討、各事業者の進捗報告（機能追加、研修実施状況等)。

(3) 成果報告会

本事業の最終的な成果を広く普及・展開するため、「成果報告会」を開催した。報告会では、生成 AI 活用の効果検証結果、具体的なユースケース等を発表し、全国の教育委員会や学校関係者への知見提供を行いました。

- **開催実績：** 計 1 回（3 月 17 日）
- **主な内容：** 実証結果の報告、有識者による講演。

2.7 実証スケジュール

本実証事業は以下のスケジュールに基づき実施しました。

■令和 7 年 4 月～令和 8 年 3 月　事業全体管理・進捗調整
・文部科学省への報告実施（週 1 回を基本に随時）
・推進委員会、連絡協議会の企画及び運営（各 4 回）
・実証地域および事業者（Ⅰ・Ⅲ）間の調整

■令和 7 年 5～12 月　実証支援・導入促進
・実証自治体への研修支援
・教員向け夏季研修の調整、支援
・活用促進チラシ作成・配布（11 月～12 月）

■令和 7 年 6 月～令和 8 年 2 月　調査分析・効果検証
・利用ログの継続的な収集および定量分析
・アンケート作成、収集（事前アンケート 8 月、事後アンケート 12 月）
・対面ヒアリング（2 月）
・アンケートおよびログ分析のクロス集計、中間報告等

第 3 章　事業(I) 事業(III)との連携支援

3.1 研修・サポートの実施

実証地域の教育委員会職員や教職員を対象に、生成 AI を校務で効果的かつ安全に活用するための多角的な支援を行いました。 具体的には、以下のスケジュールに基づき、時期に応じた適切なサポートを展開しました。

(1) 初期導入支援

実証地域における円滑な導入と継続的な活用を促進するため、実証開始時期に合わせて以下の通り初期研修を実施し、事業の周知と協力体制の構築を図りました。

実施日程・対象：

新座市：6 月 24 日（対象：教育委員会、教職員）

宝塚市：6 月 26 日（対象：教育委員会、教職員）

実施形態：

対面形式を主軸としつつ、オンライン配信を併用

(2) 活用促進サポート

活用の定着と高度化を図るため、具体的な活用術を紹介する「先生のための生成 AI 活用術」を合計 3 回にわたり作成・配布いたしました。

- 第 1 回（11 月中旬）
  「授業改善」および「児童生徒への対応」をテーマに、生徒役を演じさせた授業リハーサルや、セキュアな環境を活かした個別指導計画の作成例を提示しました。
- 第 2 回（11 月下旬）
  「所見作成」に特化し、通知表作成時期の負担軽減を目指した具体的なプロンプト例を紹介しました。
- 第 3 回（12 月中旬）
  「番外編」として、実証地域の先生から投稿された「授業活用」に関する生の声や、指導案に対する発問案の作成手法などを共有しました。

3.2 ユースケース・プロンプトの収集・整理

現場での具体的な活用シーンや有効と思われるプロンプトを収集フォームなどから集め、事業者Ⅰ、Ⅲにご協力いただきながら叩き台を作成しました。「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン」と照らし、内容が適切であることを確認した上で、他の教職員が容易に模倣・活用できるよう「生成 AI プロンプト集」として取りまとめました。

プロンプト集の構成: 活用レベルや目的に合わせ、「初級編」「中級編」「番外編」の 3 段階で整理しています。

- 初級編
  誤字脱字チェック、保護者宛の文書作成、Excel 関数のアドバイスなど、日常的な事務作業の時短に直結する事例を掲載しました。
  コピーアンドペーストで活用できるように表現を工夫しました。
- 中級編
  職員会議資料の分析、アンケート結果の解析、特定児童生徒の支援策の検討など、既存の校務データや資料を組み合わせた高度な活用例を提示しています。
- 番外編
  「1 問 1 答形式でのプロンプト生成」や「回答精度を上げるための問いかけ方」など、生成 AI をより使いこなすためのコツをまとめています。

第 4 章　事業(II)における効果検証と分析結果

4.1 ユースケースの定義および効果検証方法

本事業にて、校務で生成 AI を使用する項目をユースケースと定義します。このユースケースは、文部科学省が定める「統合型校務支援システム導入のための手引き」別紙「業務一覧」を基に、文部科学省と協議のもと合計 38 個のユースケースを選定しました。

表 1　ユースケース一覧

児童生徒の指導にかかわる業務	学校の運営にかかわる業務	外部対応
朝の授業	アンケート・データの要約・分析	保護者対応
授業準備	教務管理	PTA 対応
学習指導	教材管理	地域対応
日々の成績管理	進路・進学管理	国・教育委員会対応
所見作成	保険・衛生管理	関連機関・事業者調整
生活指導等	環境維持・整理	
全体指導等	安全・薬品管理	その他
児童生徒への対応	報告書等の素案作成	その他
部活動・クラブ活動	文書管理	
児童会・生徒会指導	予算・徴収管理	
学校行事	児童生徒に係る申請・届出	
方針・計画策定及び評価	教員に係る申請・届出	
学級編成	各種証明書発行	
教育環境維持・管理	校内研修	
外部機関実施テスト管理	情報セキュリティ対策	
	システム管理	
	学校日誌	

本事業における効果について考察するために、以下の 3 つの検証を実施しました。

(3) アンケート調査

学校現場における生成 AI の活用状況および教職員の意識の変化を把握し、導入による効果や課題を分析することを目的とし、2025 年の 8 月（事前）と 12 月（事後）の 2 回、Google フォームによるアンケート調査を実施しました。調査項目は、生成 AI の活用が見込まれるユースケース 11 項目を中心に、「当該業務にかかる時間」「現状の負担感」「生成 AI の活用状況」の 3 点を主軸としています。また、事後アンケートでは、事業推進委員会でのご助言に基づき、管理職向けの調査項目を新たに追加し、より多角的な検証をいました。

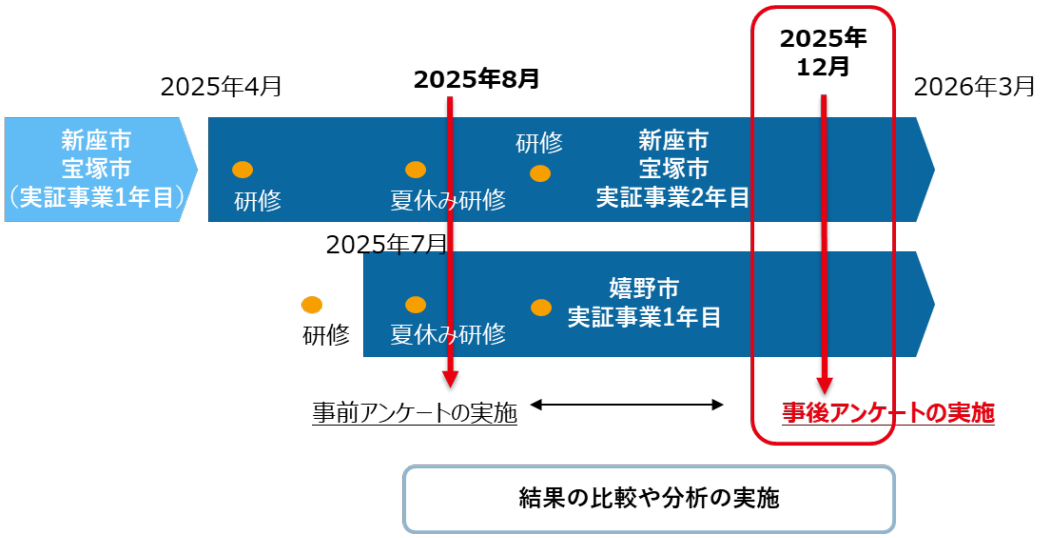


図 2 アンケート実施スケジュール

(4) システムログ解析

実際に生成 AI を使用した際の利用ログから、利用ログの量や質の集計を実施いたしました。各実証地域のシステムにおいて、主に以下の情報を取得しました。

- ユーザーID
- 所属
- 会話 ID
- 内容（質問側／回答側）
- 使用した AI モデル
- 使用感（Like・Dislike や True・False などで表記）

上記を基に、チャット数、会話数、ユーザー数、ユーザー率について集計を行いました。各自治体における生成 AI の具体的な活用傾向を把握するため、取得した利用ログに対して「どのような業務（ユースケース）で利用されたか」の分類作業を

行いました。本分析では、一連の文脈を持つ会話 ID（セッション）単位で内容を判定し、一つ以上のユースケースを付与しています。会話 ID 単位で付与を行う理由は、一回の発話（チャット単位）のみではユーザーの真の意図を判別しにくい場合でも、一連のやり取りを一つの「文脈」として捉えることで、より正確に業務上の目的を特定できるためです。

会話 ID 単位のユースケースの付与は以下の手順で行いました。

① 以下の図に示す、独立したセキュアな生成 AI を別途用意する。
② 会話 ID 単位でログを分割する。
③ 会話 ID 単位でユースケースを付与するためのプロンプトを作成する。
④ ②で分割したログに対して、最低 1 つ以上のユースケースを付与する。

ユースケースの付与を行う環境の概要を以下の図に示します。本検証で用意されているセキュアな環境と独立した、ユースケースを付与する生成 AI を動作させる独自の閉域網で構築しました。

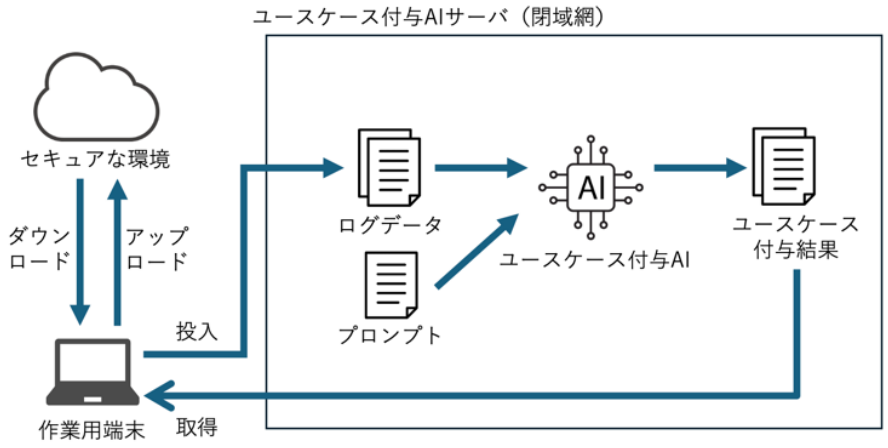


図 3 ユースケース付与 AI 概要図

ユースケースを付与する生成 AI は、オープンウェイトの大規模言語モデル（LLM）を基に作成しました。なお、プロンプトは下図の通り「システムプロンプト」および「ユーザープロンプト」を作成しました。なお、本 AI モデルの精度検証として、新座市と宝塚市のログデータから各 100 件程度の付与結果を無作為に抽出しました。付与されたユースケースと文科省の定義を照らし合わせ、整合性があると判断した割合を「通過率」と定義し人手で評価したところ、新座市は 95.3%、宝塚市は 85.3%となりました。

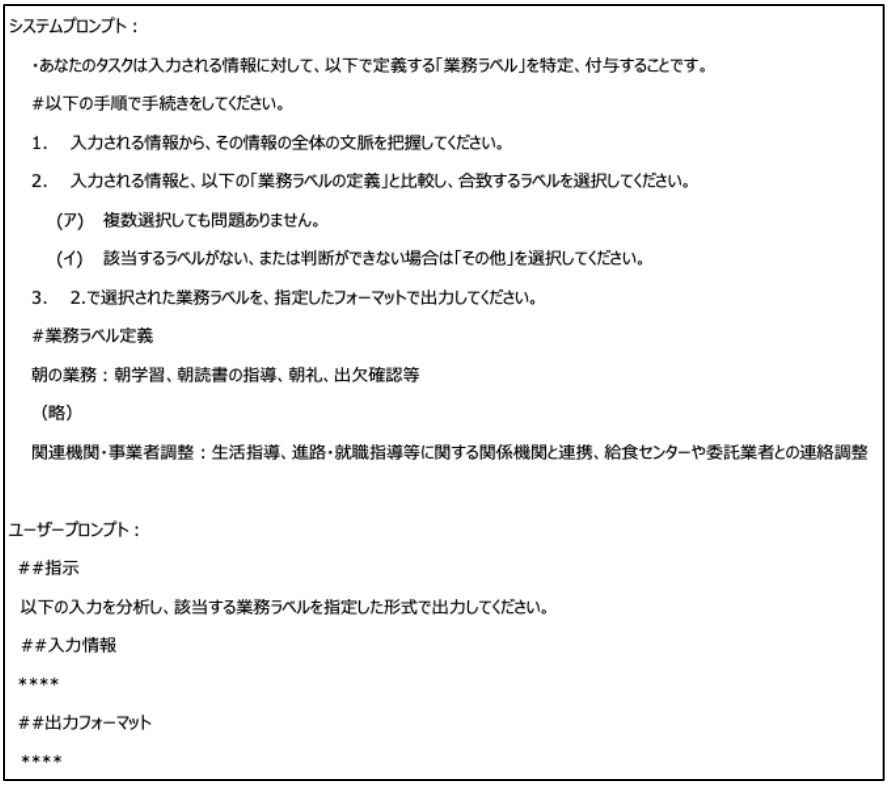


図 4 プロンプト概要

(5) ヒアリング

実証地域である 4 校に対して、セキュアな環境下での生成 AI 活用実態に関する聞き取り調査を実施しました。

・実施形式

オンライン対面形式

・実施日程

小学校：2 月 5 日、2 月 16 日

中学校：2 月 9 日、2 月 13 日

・調査対象

各校の管理職（校長・教頭）および教諭（推進担当等）を対象に、各校 2 ～ 3 名の職員に対して聞き取り調査を行いました。

・調査項目

以下の項目を中心に聞き取り調査を行いました

・学校組織としての推進体制、教職員間の情報共有の状況

・利用促進の契機

・端末の利用環境

・具体的な活用事例および効果

・利用継続における課題

4.2 アンケート分析結果

4.1 節で説明したアンケート調査の分析から得られた結果を説明します。2025 年の 8 月（事前）と 12 月（事後）の 2 回、Google フォームによるアンケート調査を実施し、それぞれを事前アンケート、事後アンケート呼びます。なお、質問別のアンケート結果については付録で記載します。

校務別生成 AI の活用（事前アンケート）

事前アンケート実施時点で、どのような校務において既に生成 AI を活用しているか、11 項目についてご回答いただきました。結果は下図の通りで、所見作成、授業活用、要約・分析については生成 AI を活用している割合が高い傾向にあることがわかりました。一方、学級編成、進路管理、児童対応についてはその割合が低い傾向にあることがわかりました。このことから、事前アンケート実施時点においては、生成 AI は「対人活動を代替するツール」ではなく、「個人作業を加速させるツール」として定着していることが示唆されます。

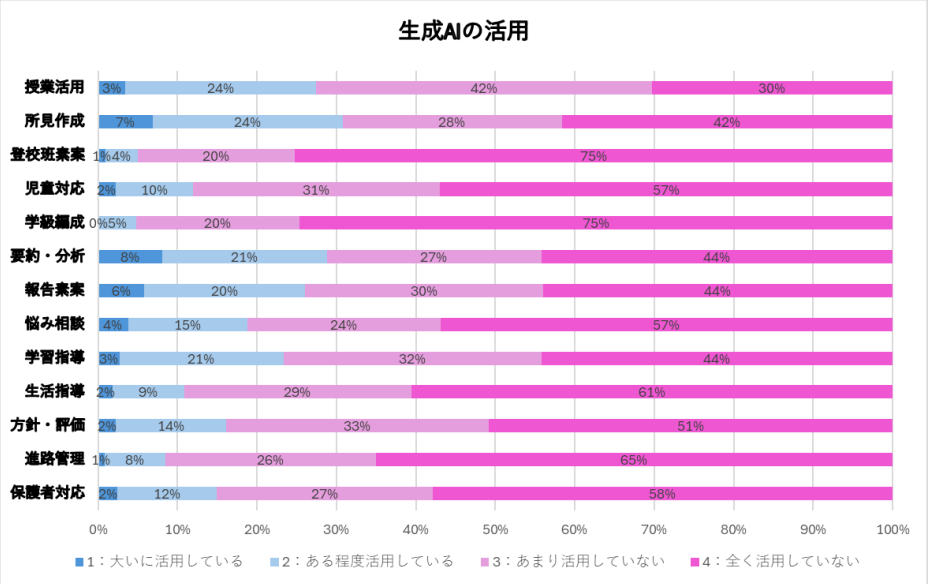


図 5　校務別生成 AI の活用実態について（事前アンケート）

生成 AI の活用と校務の負担感（事前アンケート）

生成 AI の活用割合と、負担感の大小の間にどのような傾向があるか調査しました。以下の図に負担の重さと生成 AI の活用度の関係を散布図で示します。横軸は負担の重さ、縦軸は生成 AI を活用しているかどうかをそれぞれスコア化しています。

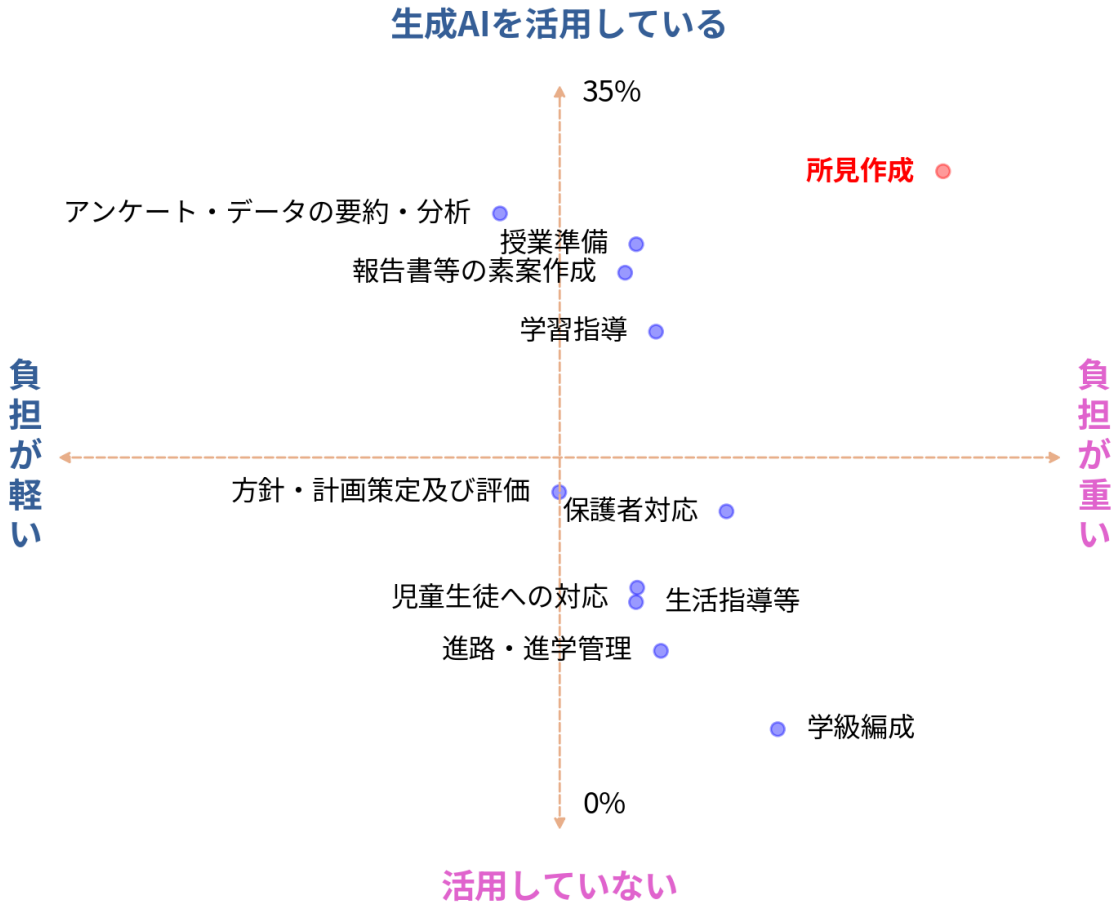


図 6 生成 AI の活用と校務の負担感

この結果から、所見作成は実際の負担が大きいと感じており、かつ事前アンケート時点で生成 AI の活用率も高いことが示されました。つまり、所見作成は、負担が大きくかつ AI の活用可能性が高い校務であり、セキュアな生成 AI を導入することによる効率化が特に期待される校務の 1 つであると推察されます。

自由記述（事前アンケート）

事前アンケートには、自由記述欄を設け、今後の事業改善に活用するための意見を募集しました。以下は回答内のコメント抜粋です。

表 2 生成 AI に期待等前向きなコメント抜粋

カテゴリ	コメント
業務の効率化	「導入していただいたおかげで、様々な場面で活用しております。明らかに業務が効率化しましたし、質も上がりました。」 「アンケート集計、諸論文作成、レポート作成にとても重宝しています。」
将来への期待	「時代に追いついていない自分が情けないですが、上手に活用ができたら教員の仕事改革ができると思います。」 「生成 AI にはいろんな可能性があると思います。積極的に活用しながら、校務の効率化につなげていきたいと思います。」 「時間割作成の回数が増えたり、クラス編成の友人関係についての要望が多くなってきている。見落としを少なくするための手助けに、AI がなってくれるといいと思います。」
意欲・学習	「研修を受けて少し理解ができたので、まずは校務と関係のないところで触ってみました。経験するごとに、使いこなせたらいいなと思いますので、これから活用していきたいと思いました。」 「日々の授業中の学習の状況等を記入しておくと、所見に活用できそうだということを夏休み中に近くの席の同僚とやってみました。しかし、やっぱり心のこもった所見を書きたいよねということにもなりました。教材研究や授業の盛り上がるアイディアなど聞くとたくさんの例が出てくるのでこれからたくさん活用していきたいです。」

表 3 要望、活用の難しさや不安などのコメント抜粋

カテゴリ	コメント
要望	「具体的な使用方法の研修（動画）を通して、教員を刺激してほしいと思っています。」 「指導要録の作成や、県学力学習状況調査の分析に活用できると、さらにうれしいです。」 「現場の意見を的確に抽出できるよう、実際に教員と話し合いの場を設け、今後の指針を検討していただきたい。」
使い方の不安	「どんな場面で活用するのに適しているのか分からないので、なかなか使い出せないでいます。」 「学校の各学級の時間割を作成しているが、以前情報を少しずつ読み込ませて作成しようとしたが、時間だけ消費した。そのため、使うことを断念したことがある。」
安全面の不安や抵抗感	「個人情報を入れるのはどうなのかと思ってしまう。」 「生成 AI は便利な面もあるが、人を相手にする上で使いにくいこともあると感じている。」 「AI を活用して業務改善を行いたいが、AI を活用することへの抵抗感がある先生もまだまだ多いと思われる。」

このことから、既に生成 AI を活用して効率化できており、今後も期待しているという声や、上手に活用できれば業務の効率化が見込める、といった期待の声をいただきました。一方、活用方法がわからず、利用開始へのハードルが高く不安を感じる、安全性の心配等の声もありました。このことから、これらの要望を満たし、不安を払拭するために、活用事例の例示、本事業の趣旨説明および生成 AI 活用の動機付けを目的とした研修や、活用促進施策を検討することにしました。

事前アンケート結果まとめ

事前アンケート実施時点で、11 種類のユースケースを中心に、「当該業務にかかる時間」「現状の負担感」「生成 AI の活用状況」について回答をいただくとともに、自由記述欄を設け、今後の事業改善に活用するための意見を収集しました。その結果、所見作成、授業活用、要約・分析は、生成 AI を活用している割合が高い傾向にあること、学級編成、進路管理、児童対応などについては、生成 AI を活用している割合が低い傾向にあることがわかりました。特に「所見作成」は、実際の負担が大きい一方で生成 AI の活用率も高く、生成 AI 導入による効率化効果が特に現れやすい領域の一つであることが示唆されました。また、自由記述欄においては、すでに効率化を達成したという声や今後への期待の声をいただいた一方、活用方法が分からず、利用開始のハードルが高い、不安を感じる、事例が不足している、といった声がありました。

生成 AI の活用の変化（事前・事後アンケート）

実際に生成 AI の活用促進を行った上で、生成 AI の活用率の変化を調査しました。調査の結果、11 項目中 5 項目について、「大いに活用している」または「ある程度活用している」と回答した割合が向上しました。以下は向上した項目別の結果です。

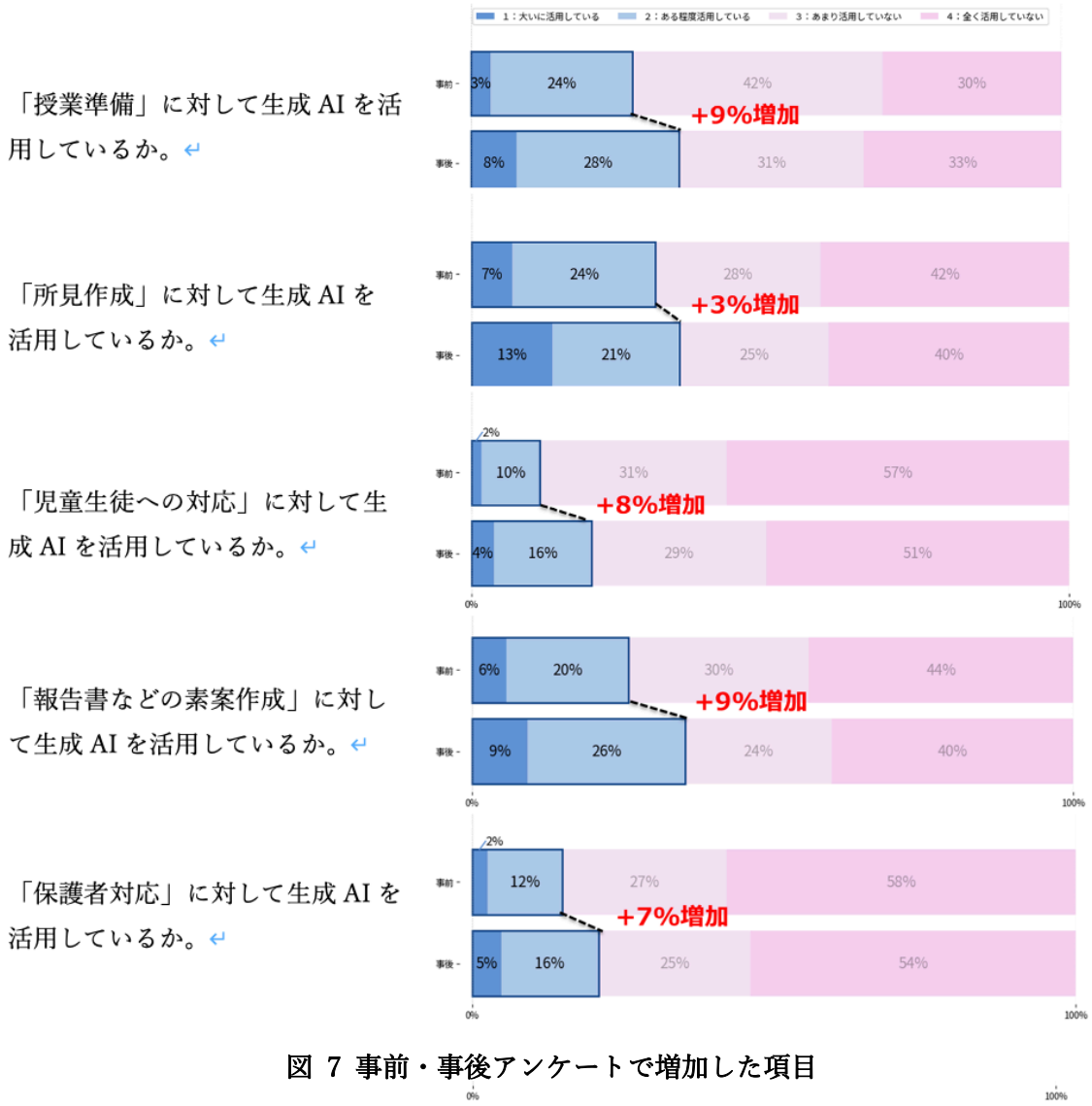


図 7 事前・事後アンケートで増加した項目

この結果から、所見作成や報告書素案作成など、文章作成に関する業務で活用が進みやすい傾向が見られました。さらに、児童対応や保護者対応といった対人業務においても、内容の整理に活用される可能性が確認されました。

生成 AI による校務別品質向上の実感（事後アンケート）

事後アンケートでは、セキュアな環境の生成 AI の活用を通じて業務の品質向上を感じられた校務の上位 3 件を選んでいただきました。その結果、「授業準備」「所見作成」においては効果の実感が他の校務に比べて相対的に高いことがわかりました。このことから、授業設計や所見作成といった思考・文章作成を伴う業務において、生成 AI は作業時間の短縮だけでなく、品質向上にも寄与する可能性が示唆されました。特に、教員の専門的判断を補助する思考支援ツールとしての価値が一定程度認識されていると考えられます。

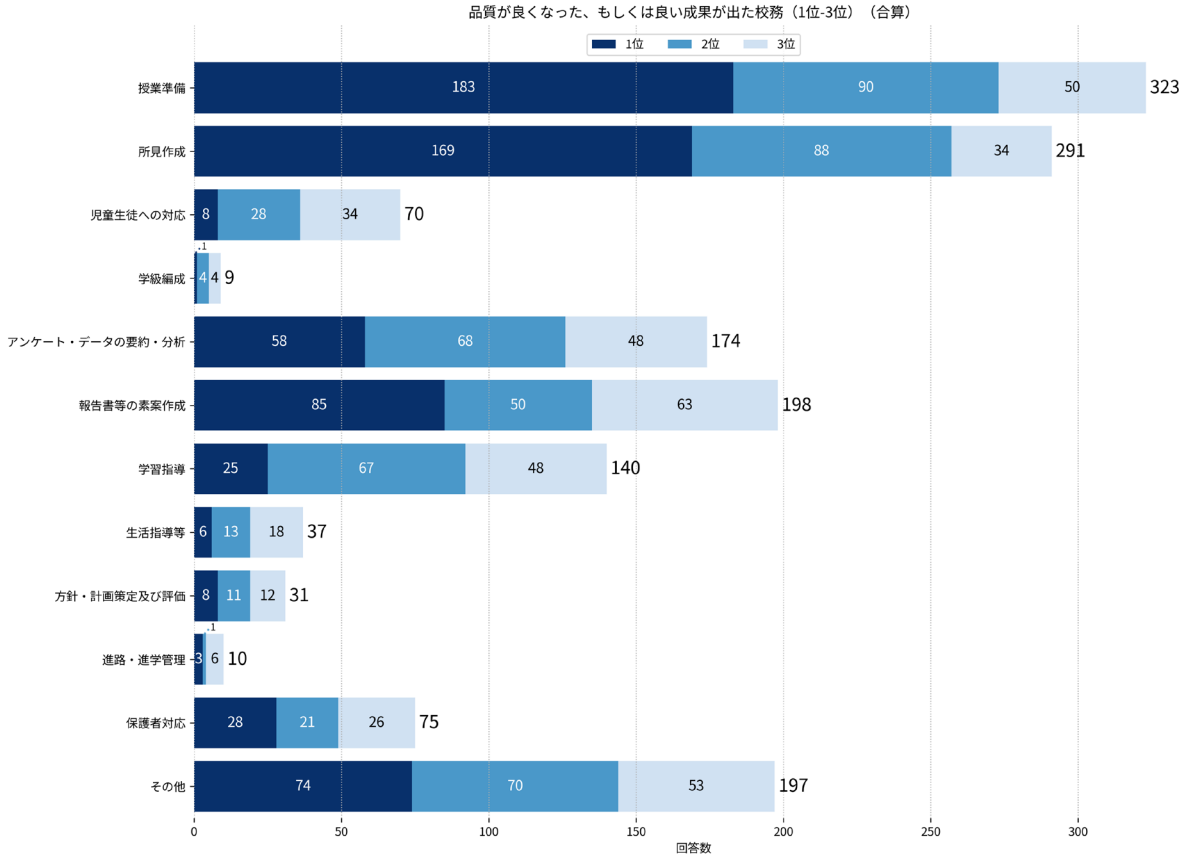


図 8 品質が良くなった、もしくは良い成果が出た校務（事後アンケート）

生成 AI による負担が軽減した校務（事後アンケート）

事後アンケート時点で、セキュアな環境の生成 AI の活用を通じ、負担の軽減を感じた校務について上位 3 件を選んでいただきました。この結果から、校務の品質向上のアンケートと同様に、「授業準備」「所見作成」においては効果の実感が他の校務に比べて相対的に高いことがわかりました。このことから、思考整理や文章作成を行う業務において、生成 AI が教員の思考を補助するツールとして機能することで、効率と品質の両面で効果が実感されやすいと示唆されました。

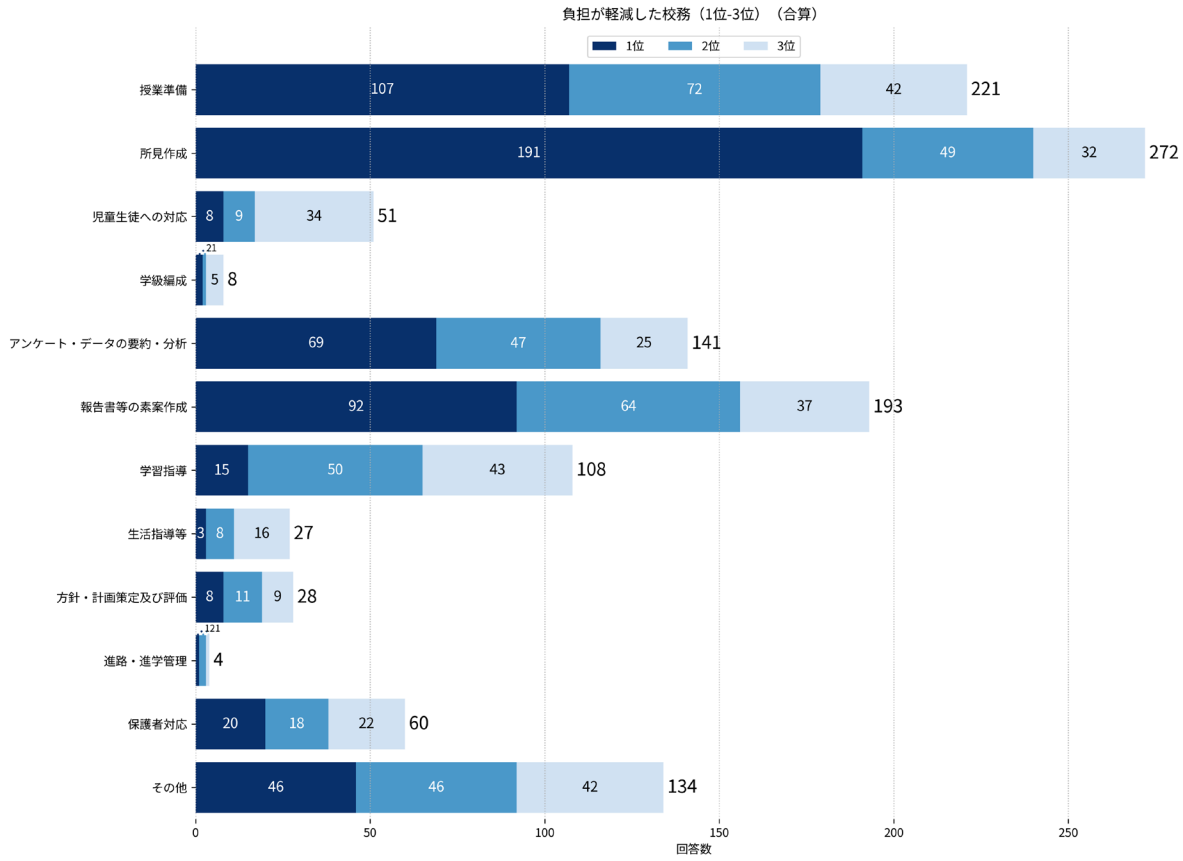


図 9 負担が軽減した校務（事後アンケート）

業務負担と品質の向上（事前・事後アンケート）

事前アンケートの回答で負担が重いと感じられている校務を横軸に、事後アンケートの回答で生成 AI の活用によって品質の向上が見られた、もしくは良い成果が出た校務を縦軸とし、それらを散布図で可視化しました。

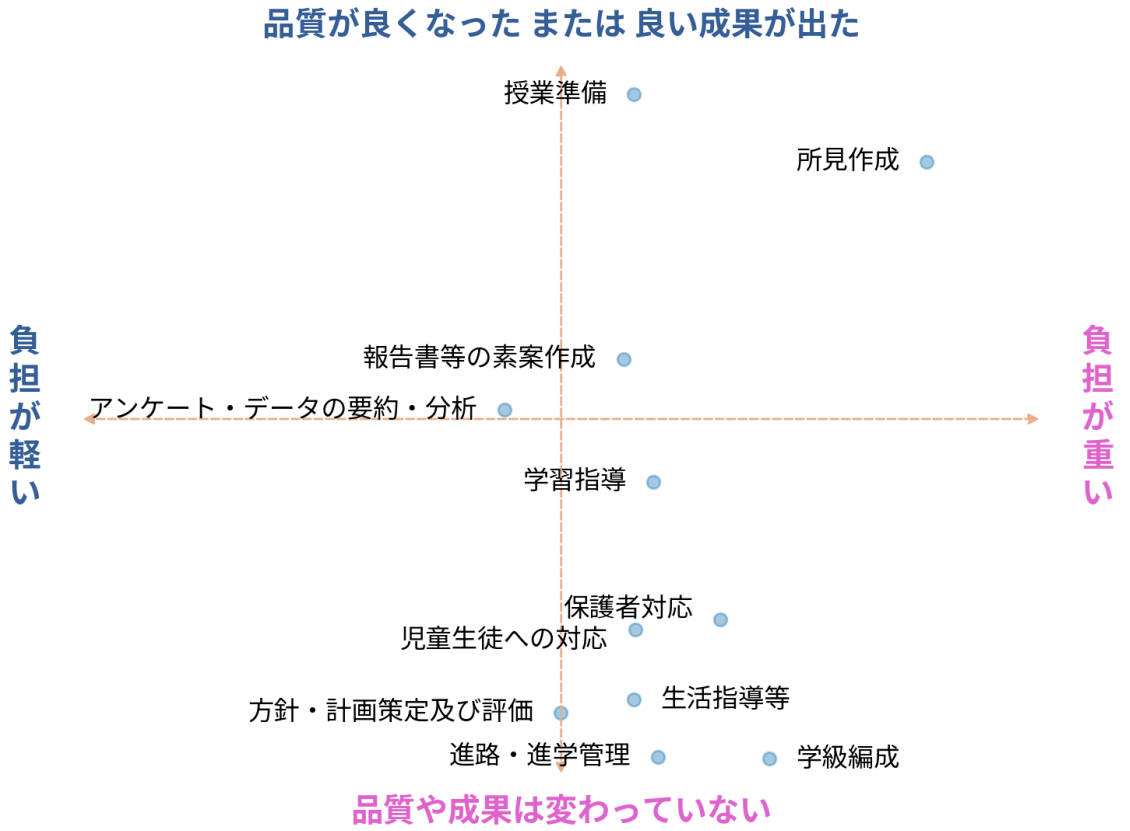


図 10 校務の負担感と、生成 AI による品質の変化

授業準備、所見作成、報告書等の素案作成においては一定の成果が得られたといえる結果となりました。一方で、対人業務である生活指導、児童生徒・保護者対応等においては、成果が見られませんでした。このことから、生活指導や児童生徒・保護者対応等の対人業務においては、生成 AI の活用による効果実感は相対的に限定的であることが示唆されました。

生成 AI による業務負担軽減度合い（事前・事後アンケート）

事前アンケートの回答で負担が重いと感じられている校務を横軸、事後アンケートの回答で生成 AI の活用によって負担が軽減した校務を縦軸とし、それらを散布図で可視化しました。

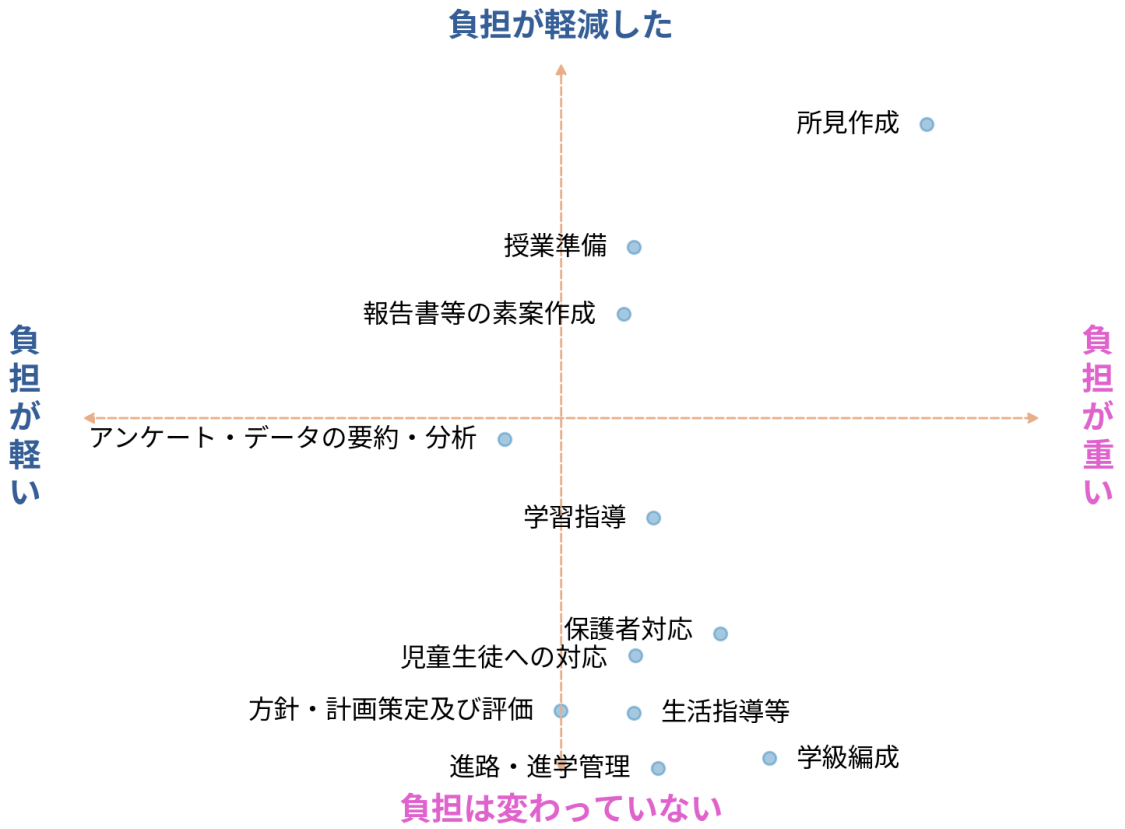


図 11 校務の負担感と、生成 AI による校務の負担具合の変化

この結果、「品質の向上した校務」と同様に、授業準備、所見作成、報告書等の素案作成においては、一定の成果が得られました。一方で、対人業務である生活指導、児童生徒・保護者対応においては、あまり成果が見られませんでした。これらの対人業務については、状況判断や感情への配慮など、人間同士のコミュニケーションが中心となるため、生成 AI で直接的な業務の置き換えを行うことは困難と考えられます。このことから、生成 AI は対応方針の整理や文章作成など、準備段階の補助ツールとしての活用に留まりやすい可能性が示唆されます。

生成 AI の活用が学校全体で良い変化をもたらしたか（事後アンケート（管理職））

12 月の事後アンケートにて、管理職の方向けに、学校全体で生成 AI の活用が良い変化をもたらしたかについてご回答いただきました。実証 1 年目の嬉野市は、良い変化があると回答が 3 割以上、実証 2 年目の新座市、宝塚市においてはいずれも 7 割以上が良い変化があると回答されました。この結果から、生成 AI の活用効果は導入直後よりも、一定期間の運用や改善を経た段階で実感されやすい可能性が示唆されました。また、機能改善や活用ノウハウの蓄積に加え、教育委員会による推進や研修、現場の前向きな教職員の存在など、組織的な取り組みが AI 活用の定着と効果実感に大きく影響する可能性があると考えられます。

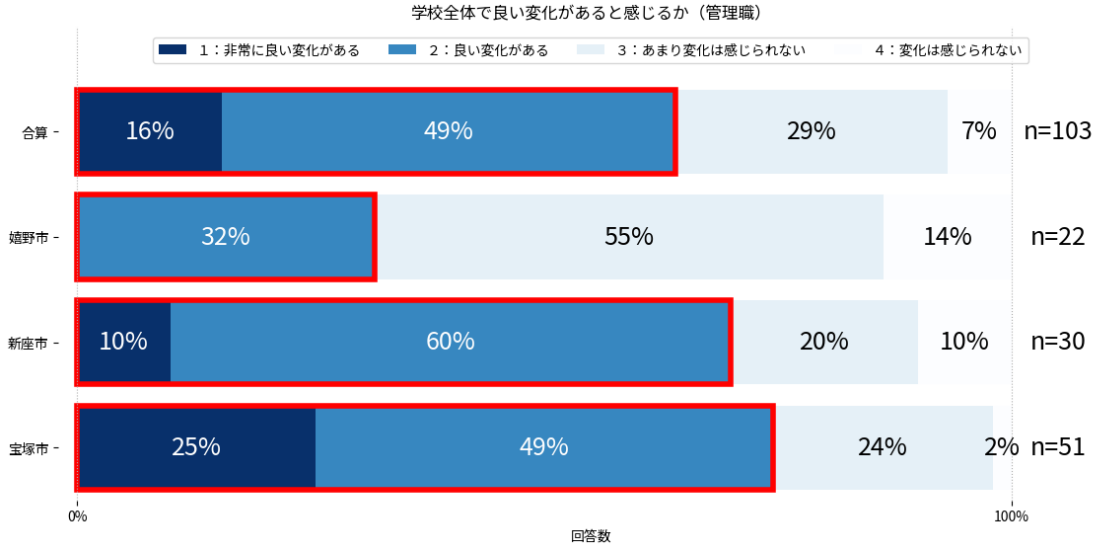


図 12 学校全体で良い変化があると感じたか（管理職）

自由記述（事後アンケート）

事前アンケートと同様に、事後アンケートにも自由記述欄を設け、今後の事業改善に活用するための意見を再度募集しました。以下は回答内のコメント抜粋です。

表 4 生成 AI に期待等前向きなコメント抜粋

カテゴリ	コメント
セキュリティ	「個人情報を入れても一定のセキュリティで守られる点が魅力。もっといろいろな場面で活用していきたい。」
業務の効率化	「データ分析、文書作成にとても役立っています。ありがとうございます。」「所見作成に非常に使い勝手がよく業務改善されたので継続して使いたい。」
将来への期待	「とても先進的かつ画期的な事業で、働き方のホワイト化の兆しが見えました。英断をしてくださった皆様に心より感謝しております。」
意欲・学習	「いざとなれば相談できるツールがあることは、心の支えです。」 「今後より効果的に AI を活用できるよう、長期休みに勉強しようと思っています。」

カテゴリ	コメント
業務削減の優先	「AI で効率化する前に、所見そのものをなくすべき。業務の効率化ではなく、業務の削減を強く望みます。」 「形式的に行う業務（研究授業や訪問）を削減しないで AI の力でどうにかしようとしている。」
時間的余裕の欠如	「新しいことを学びたいという意欲が持てる『時間の余裕』を作り出す工夫を先にお願いしたい。」 「研修動画を見ておいてください、では自分の仕事に追われてなかなか進まない。」
倫理・評価への抵抗感	「AI よりも、見ているのは自分たちという認識がまだ抜けない。子供個人の所見等をデータでつくることに抵抗があります。」

表 5 要望、活用の難しさや不安などのコメント抜粋

事前アンケートに比べ、前向きなコメントが多く含まれるようになった一方、生成 AI の利活用へ抵抗感や懸念などは未だに存在することが伺えます。このことから、生成 AI に対する課題は、技術的な側面だけではなく、業務量による多忙感からくる心理的余裕の欠如、あるいは生成 AI が出力する情報の真偽に対する不安といった、運用と心理面の両方にわたっていると考えられます。したがって、単に生成 AI の提供をするだけではなく、実運用に即した環境整備やサポート体制の構築といった取り組みが重要になると考えられます。

事後アンケート結果まとめ

生成 AI の活用状況および教職員の意識の変化を把握し、導入による効果や課題を分析することを目的として、令和 7 年 8 月と 12 月に実施したアンケートの結果を集計し、比較分析を実施しました。その結果、以下の傾向が見られました。

- 生成 AI の活用について増加が見られた

  授業活用：9pt アップ　所見作成：5pt アップ　児童生徒対応：9pt アップ　報告素案作成：10pt アップ　保護者対応：7pt アップ
- 特に、「授業活用」や「所見作成」といった校務においては、普段から校務の負担が大きい中で、
  負担の軽減と品質向上の双方に寄与する可能性が示唆された
- 一方、対人業務である生活指導、児童生徒・保護者対応においては、効果の実感が限定的であった。

この結果を受けて、生成 AI は直接的な業務代替ではなく、対応方針の整理や文章作成など準備段階の補助ツールとしての活用にとどまりやすい可能性があることが示唆されました。また、「管理職へ生成 AI の活用により良い変化が起きたか」についてアンケートをとると、導入 1 年目の嬉野市においても、良い変化を感じられており、実証 2 年目の地域においてはさらに前向きな回答が得られました。

4.3 システムログ分析結果

4.1 節で説明したシステムログの分析から得られた結果を説明します。

ログの集計：ログの量の推移（各自治体）

会話数、アクティブなユーザ数の推移を集計し、活用促進要因について考察するために自治体別に分析を行いました。

[嬉野市]

2 回の研修直後には大きく利用の伸びはありましたが、実証期間を通じて全体的に徐々に右肩下がりの傾向となりました。このことから、研修自体には一定の効果があるものの、特に実証 1 年目で生成 AI 導入直後の場合は、継続して使用してもらうために高頻度の研修やフォロー等、利用促進を活発に行わなければ定着を促進することが困難であると示唆されました

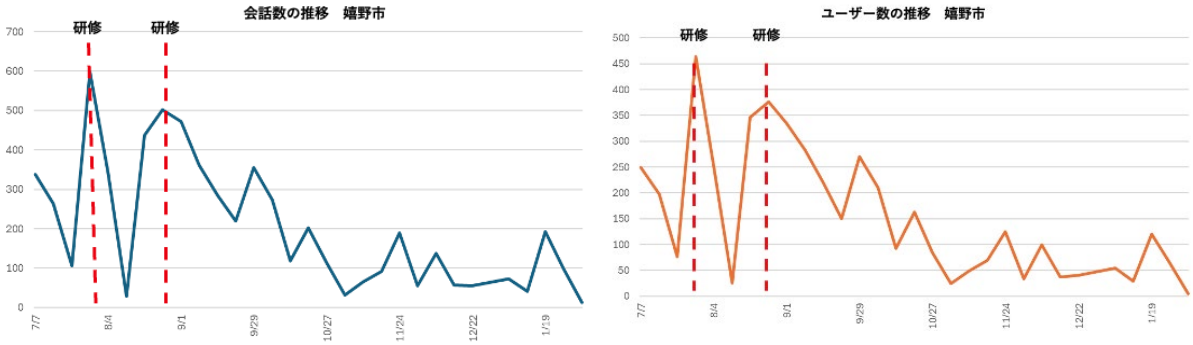


図 13 会話数およびユーザー数推移（嬉野市）

[新座市・宝塚市]

どちらの自治体でも 2 回の研修直後に大きく利用の伸びがありました。また、2 回の研修以前と比較し、全体的に利用量の伸びが観測されました。このことから、研修自体には一定の効果があると考えられます。また、一定期間の運用や改善を経た段階で組織的な AI 活用の定着がなされていることがこれらのログ分析結果からも示唆されました。

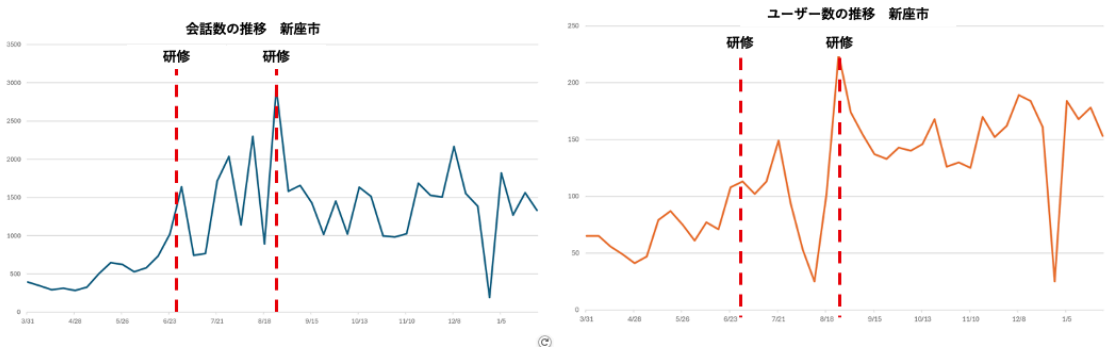


図 14　会話数およびユーザ数の推移（新座市）

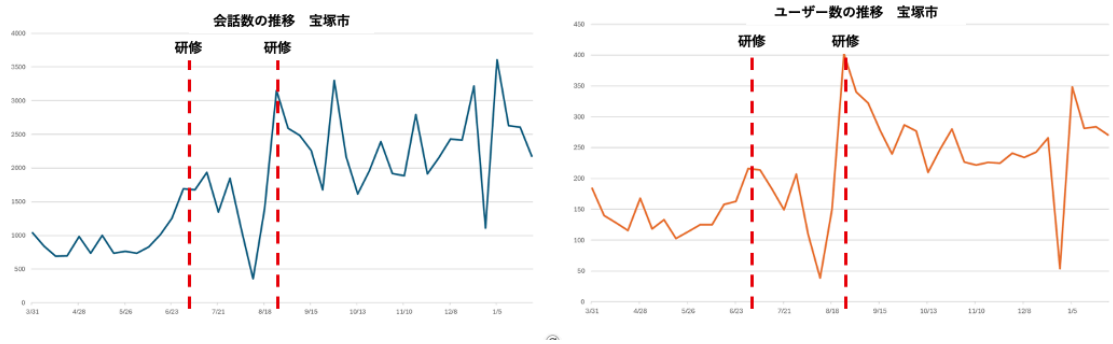


図 15 会話数およびユーザ数の推移（宝塚市）

ログの集計：ログの量推移まとめ

各自治体のログを横断的に分析した結果、研修の実施が利用促進に一定の効果をもたらしていることが確認できました。特に実証 2 年目の地域においては、一定期間の運用と改善を経て、組織的な活用が定着しつつあることがログデータからも示唆されています。一方で、研修から時間が経過すると利用量が減少する傾向も見られ、活用の定着度合いには学校間で差があることが浮き彫りとなりました。こうした定着状況の違いを生む要因を明らかにするため、後日インタビューによる詳細な調査を実施しました。

ログの集計：チャットの内容分析

生成 AI がどのように活用されたかを明らかにするため、具体的な校務内容に基づいた「ユースケース」を付与し、業務別の利用傾向を分析しました。ユースケースの付与方法としては 4.1 節で説明した通り、別途用意したセキュアな生成 AI 環境を用意し、各会話 ID のログに対して合計 38 種類のユースケースを付与しました。

再掲表 1 ユースケース一覧

児童生徒の指導にかかわる業務	学校の運営にかかわる業務	外部対応
朝の授業	アンケート・データの要約・分析	保護者対応
授業準備	教務管理	PTA 対応
学習指導	教材管理	地域対応
日々の成績管理	進路・進学管理	国・教育委員会対応
所見作成	保険・衛生管理	関連機関・事業者調整
生活指導等	環境維持・整理	
全体指導等	安全・薬品管理	その他
児童生徒への対応	報告書等の素案作成	その他
部活動・クラブ活動	文書管理	
児童会・生徒会指導	予算・徴収管理	
学校行事	児童生徒に係る申請・届出	
方針・計画策定及び評価	教員に係る申請・届出	
学級編成	各種証明書発行	
教育環境維持・管理	校内研修	
外部機関実施テスト管理	情報セキュリティ対策	
	システム管理	
	学校日誌	

[嬉野市]

実証期間中の月別の使われ方と、校務別全体の総数を可視化しました。特に、事前・事後アンケートで質問した 11 項目については色を付与しています。この結果、授業準備が全体の利用の約 4 分の 1 を占めており、特に多く利用されていることが分かりました。一方で、ログ量の推移から明らかになっていた通り、事業終盤に差し掛かり全体的に利用量は減少傾向にあることが示されています。

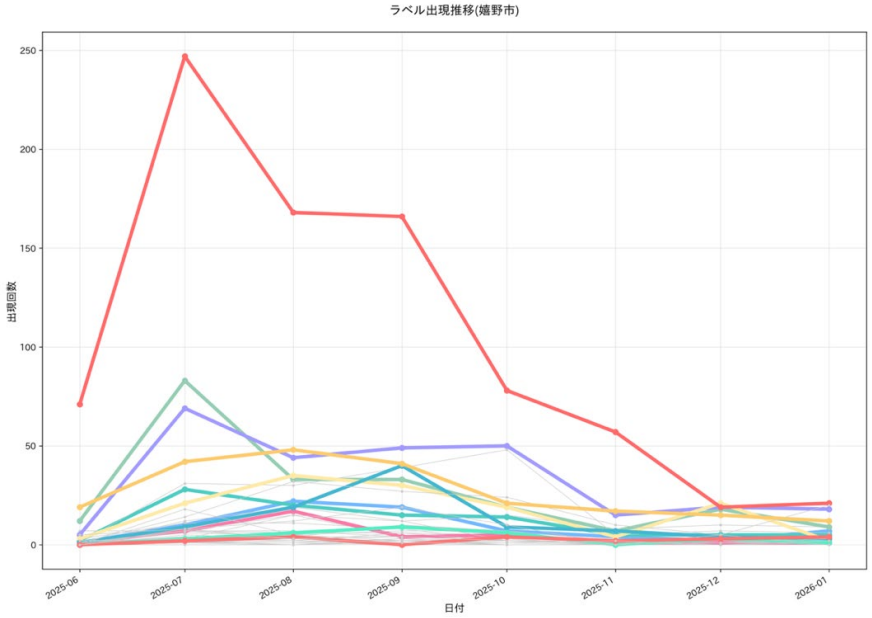


図 16 月別ラベル出現推移（嬉野市）

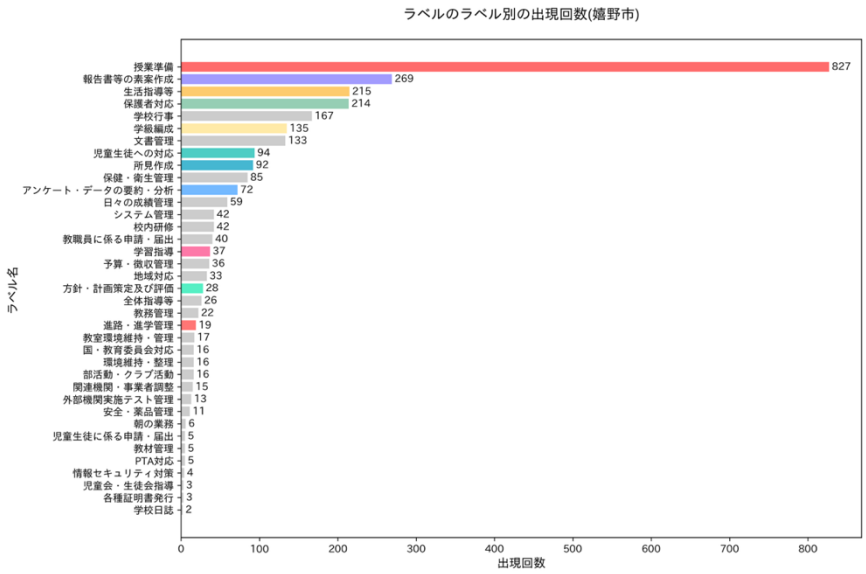


図 17 ラベル別出現頻度（嬉野市）

[新座市]

新座市においても、嬉野市と同様に授業準備に関するチャットが最多であり、2学期以降も継続して利用されていることがわかりました。さらに、保護者対応は授業準備に次ぐ2位であり、高い数値で推移していることがわかります。これらの結果から、日常的な教育業務の支援ツールとして組織的に定着しつつある可能性が示唆されました。

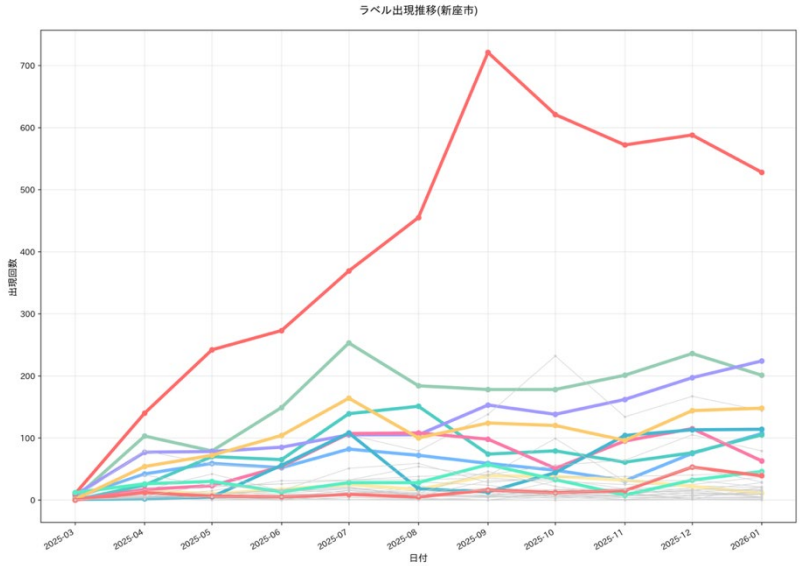


図 18 月別ラベル出現推移（新座市）

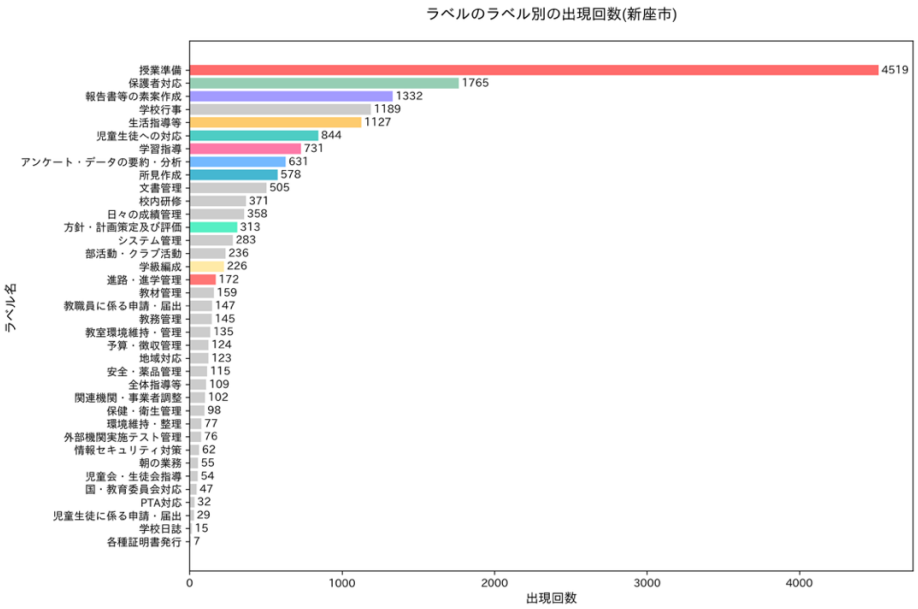


図 19 ラベル別出現頻度（新座市）

[宝塚市]

宝塚市に関しても、上位 3 項目は新座市・宝塚市と同様の傾向で、2 学期以降の利用状況においても新座市と同様の傾向にあることがわかりました。

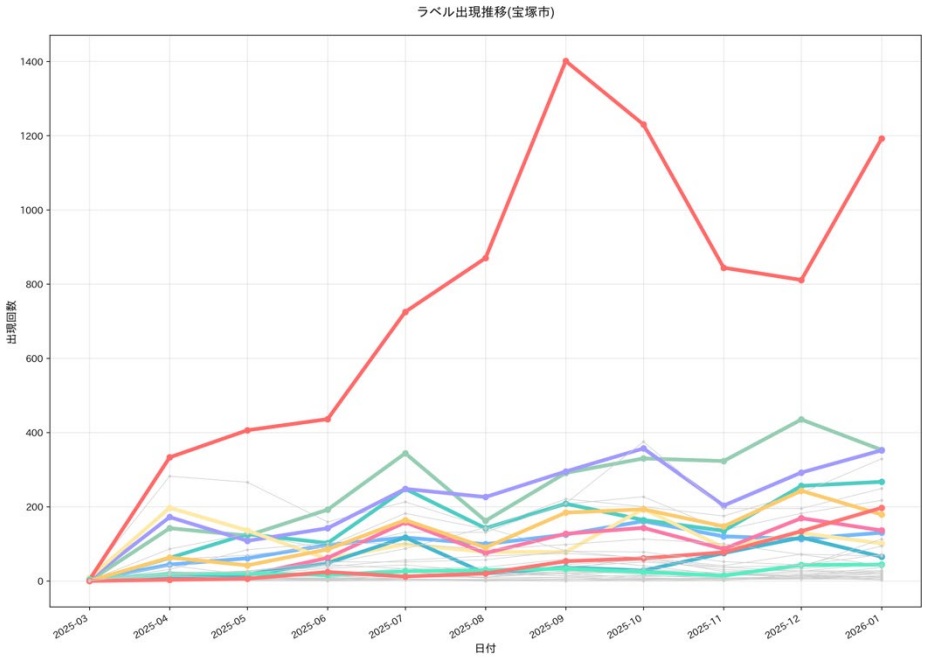


図 20 月別ラベル出現推移（宝塚市）

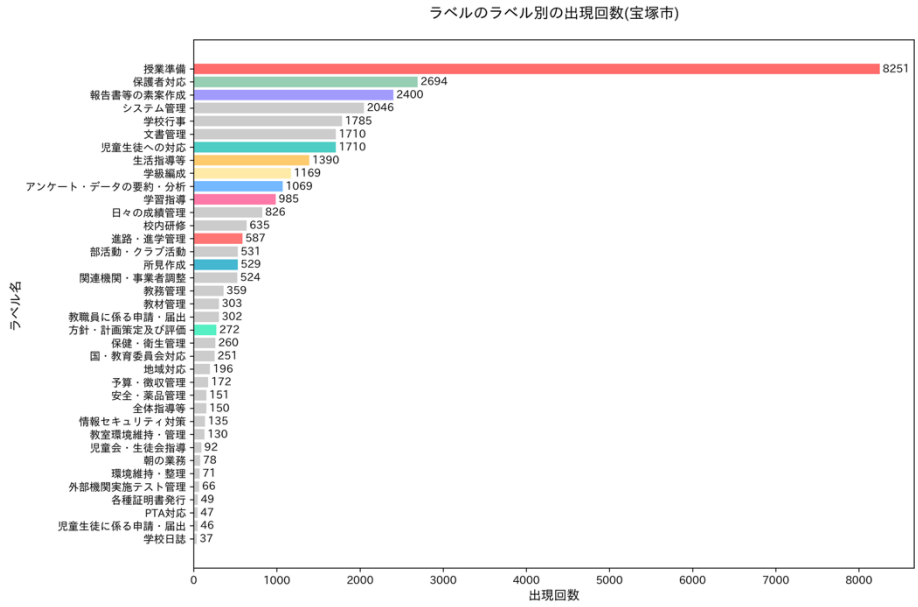


図 21 ラベル別出現頻度（宝塚市）

ログの集計：セキュアな環境ならではの利用

本事業において、特に個人情報等、重要性の高い情報を取り扱う「セキュア環境ならではの利用」が全体利用のうちどの程度含まれているのかを調査しました。

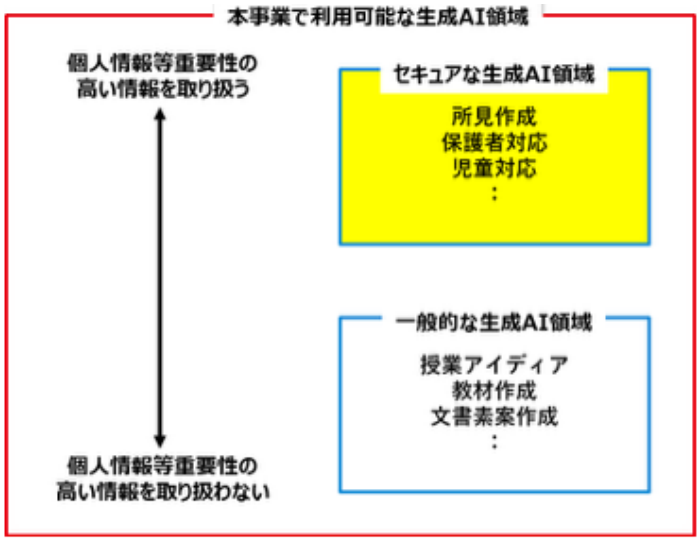


図 22 校務別セキュアな校務と、一般的な校務イメージ

調査方法としては、独立したセキュアな生成 AI を別途用意し、利用しました。具体的には、全体ログから無作為に抽出し、それらが個人情報や機密情報を扱うものかを判定しました。

セキュア環境ならではの利用の検証

データおよび方法

対象：生成 AI 利用ログ

期間：期間 A 令和 7 年 10 月までの約 14 万件の記録

期間 B 令和 8 年 1 月の約 14 万件の記録

方法：各期間から無作為抽出（各 400 件※）

※抽出件数 400 は、母集団規模（約 14 万件）に対し、95%信頼水準において割合推定の誤差がおおむね±5 ポイント程度に収まる水準として設定した

結果

期間 A：10.25%（41/400） 期間 B：14.75%（59/400）

セキュア環境ならではの利用は、確認期間において概ね 10～15%程度の水準で観察された

この結果、およそ 10~15%が「セキュアな環境ならではの利用」と判定されました。このことから、生成 AI の利用の多くは授業準備や文章作成など、個人情報を伴わない業務での活用が中心である可能性が示唆されました。また、所見作成などは、個人情報を活用しなければならない業務であるからこそセキュアな環境を完備させた本事業で活用されたことが推測されます。

ログの集計：学校別利用者の分散と推移

ログの結果から、全体の利用回数と、教職員間の利用のばらつきを学校単位でプロットしました。これにより、学校単位での利用量の違いや、教職員間での広まりを時系列ごとに調査しました。横軸は期間内での会話 ID の総数、縦軸は学校内利用者間の分散となります。学校単位で利用量が増え、かつ利用者が満遍なく利用される（利用者間の分散が小さい）事が本事業において最も理想と考えられます。このことから、時間経過とともに第 4 象限に移行するかの観察を行いました。

観測方法として、3 ヶ月単位でログを集計し、全体の傾向としてどのような散布図となるかを観測しました。

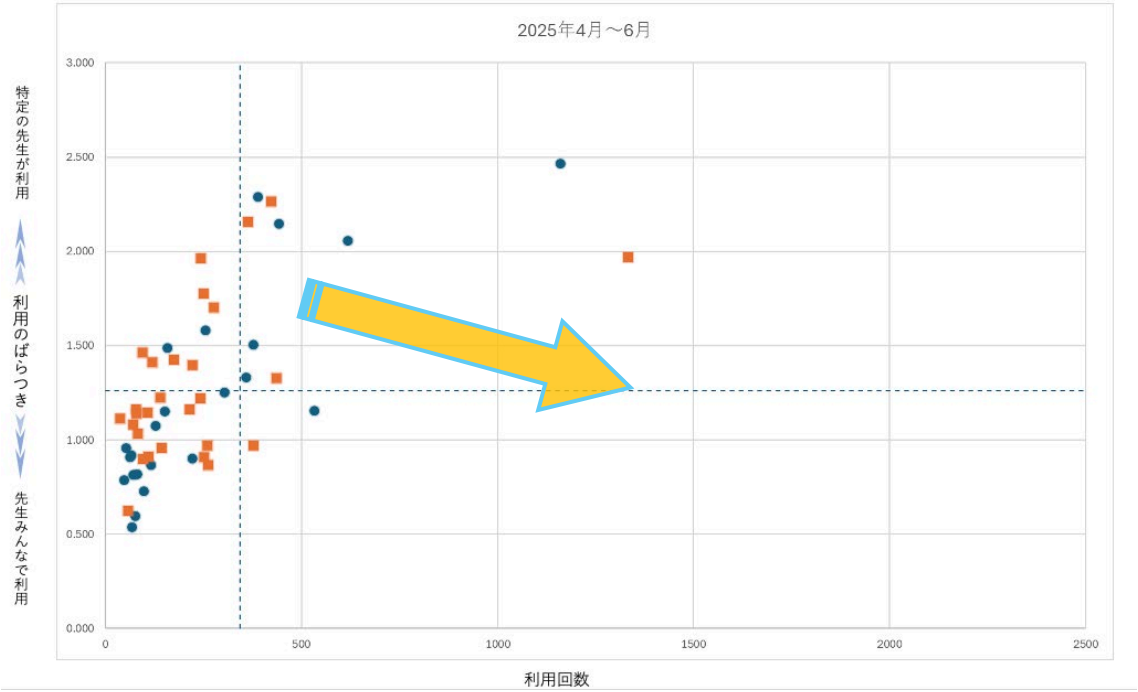


図 23 学校単位の利用者と利用回数の分布（2025 年 4-6 月）

次項にある通り、全体的な傾向として 4 月から 6 月の期間に比べて、7 月から 9 月の期間の方が学校単位での利用者が増えていることが示されています。さらに、10 月から 12 月の期間では、その他期間と比較し利用者間の分散が小さくなっていることが明らかになりました。このことから、学校全体に生成 AI が浸透していることが示唆されています。

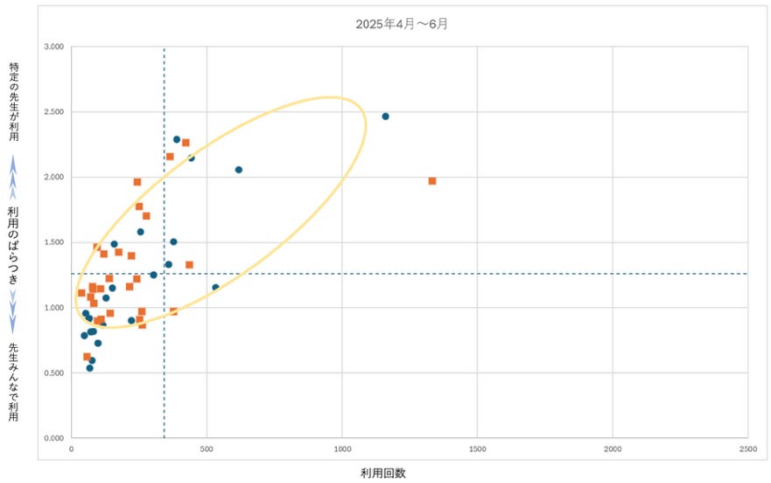


図 24 学校単位の利用者と利用回数の分布（2025 年 4-6 月）

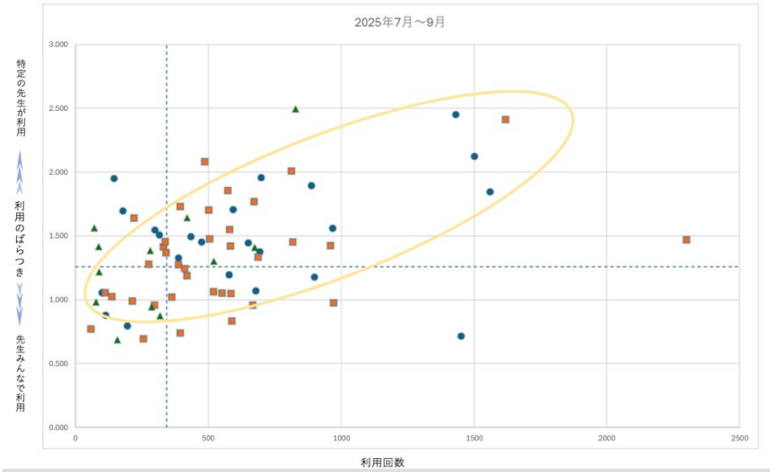


図 25 学校単位の利用者と利用回数の分布（2025 年 7-9 月）

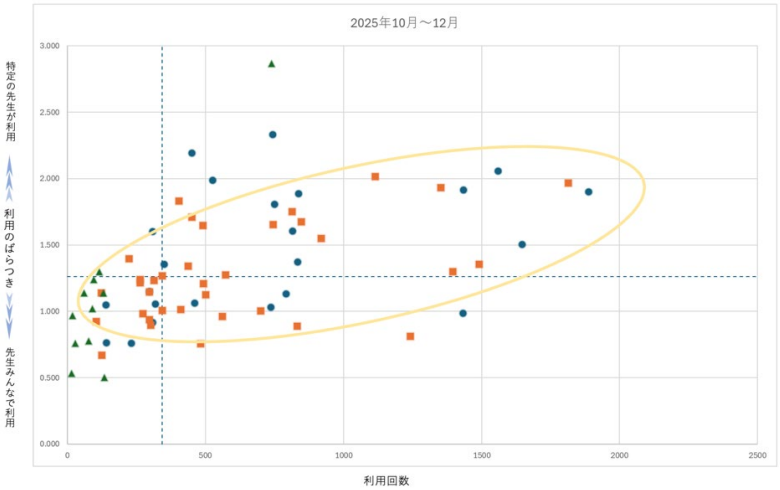


図 26 学校単位の利用者と利用回数の分布（2025 年 10-12 月）

ログの集計：利用が促進された学校の要因分析

学校単位での追跡調査を行い、利用が促進されたと考える学校に対してはインタビューを実施し、何故利用が促進されたのか、何が効果的かであったかを取りまとめました。

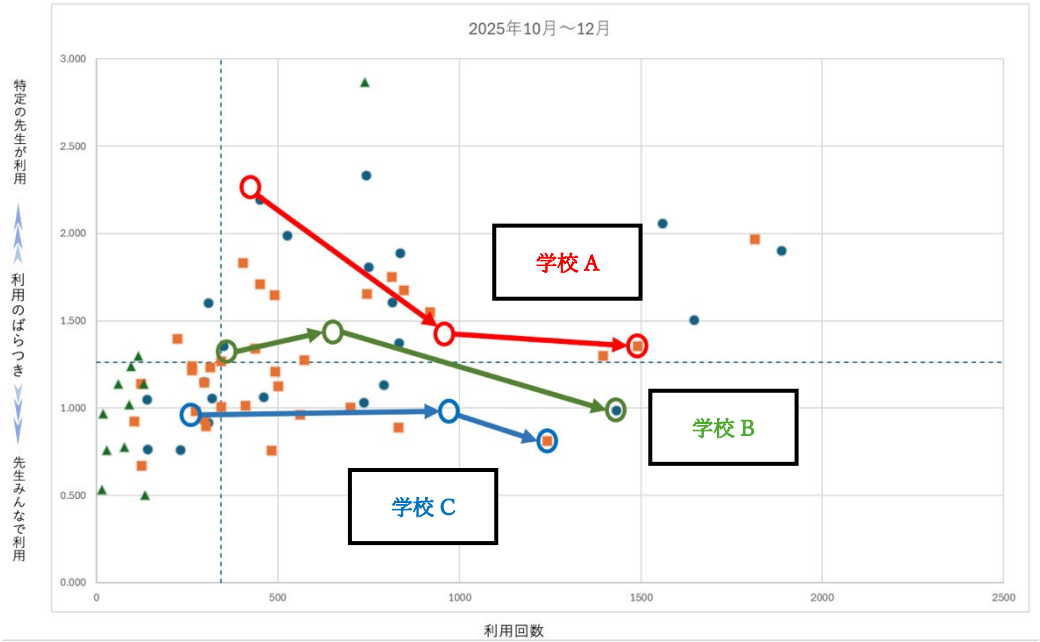


図 27 利用が促進されたと考える学校グラフ推移

[学校 A～C インタビュー結果]

組織的な利用促進のきっかけ

- 指導要録を登録することで、普段、情報担当の先生に集まる質問(生徒の出席状況など)については、生成 AI の利用を促した
- 研究発表会で生成 AI の利活用が促進された
- 育委員会による研修により体験の場を得られたことが重要だった
- 学校からの要請をうけ、本事業者Ⅲにより対面での特別研修が実施された
- その時点の生成 AI の利用状況を元に、必要と考えられる研修プログラム構成でのワークショップが開催された
- 翌日から職員室では、生成 AI についての会話が活発に行われた
- それまで校務に対しどのように利用すべきか迷っていた先生方が、利活用を始めるきっかけともなったと感じる

- 新しいツールを試す文化があり、具体的な成功事例を校内で、積極的に活用方法を発信していたことが利用の伸びに繋がったと感じる
- 夏休み中の 30 分程度のミニ研修が、利用促進に効果的であったと考えており、このような非公式でカジュアルな研修が効果的だった　等

好事例

- 児童のデータをまとめて所見の叩き台を作成することなどに AI を利用した
- AI を活用してソフトウェアの使い方を調べたり、タブレットのトラブルを解決することにも利用した
- 研究発表会の案内地図作成や卒業アルバムの写真選定などでも AI を利用した
- 既出資料を参照した
- 家庭訪問のルート検索や、壁新聞やレポートの講評作成、教材の写真からの授業準備への活用に役立った
- 外部とのやり取りにおける E メール本文の検討などにも利用された
- 教頭先生においては、自身の業務では保護者向けや地域向けの「文章の構成」に利用することが最も多く、ゼロからの作成よりも、作成した文章のチェックに AI を利用していた　等

ログの集計：利用が促進されなかった学校の要因分析と対策案

利用が促進された学校と同様に、利用が促進されなかったと見られる学校を散布図から特定し、その学校に対してインタビューを実施しました。その上で、何が課題であったか、今後どのように対策を講じたら良いのかを考察しました。

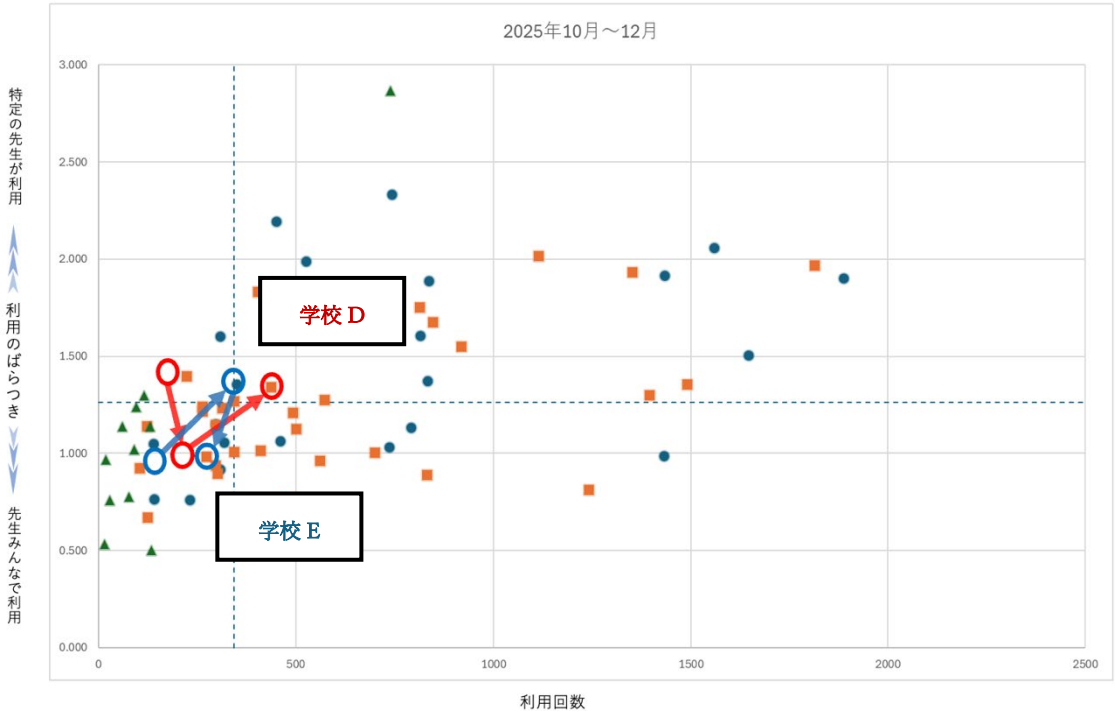


図 28 利用が促進されなかったと考えられる学校グラフ推移

[学校 D および学校 E インタビュー結果]

インタビュー結果

- 機能が多岐にわたり、「どれを使えばいいのか」「何から始めればいいのか」がわからなかった
- ベテラン先生は、AI を学ぶ・使いこなすことに時間をかけるより、従来の手法でやった方が早いと判断してしまう
- 理想の結果が得られなかったときに、数回試したのちに離脱してしまう

課題のまとめ

- 入口が広すぎて「最初の一歩」が分からない
- 既存業務より効率が良いと確信できない
- 試行錯誤コストが高く、早期離脱する

対策

- 先行自治体で生まれたセキュアな環境ならではの事例をインプットし教職員へ紹介することで、セキュアな環境ならでは活用を試してみる
- 先駆者の教職員をつくる
- 先駆者教職員の実践を地産事例として取り上げて各校に展開することで、次に続く教職員からさらなる地産事例を創出し展開する　等

4.3 まとめ

前節までに述べたアンケートとログの独立した分析に加え、アンケートとログを組み合わせた分析を行いました。また、 本事業を通してのニーズや課題、総括についても説明します。

4.3.1 アンケートとログの結果の考察

教職員の主観的な利用実感と、客観的なログから得られる利用実績にどのようなギャップがあるのか自治体ごとに調査しました。調査方法として、アンケートで質問した主要なユースケース 11 種類に対して、アンケート結果と、付与されたユースケースの頻度の比較を行いました。

[嬉野市]

授業準備については、アンケートでも利用実績でも非常に高い結果で、ギャップはありませんでした。一方、所見作成については利用実感に対して利用実績が低く、ギャップがあることが示唆されました。所見作成は児童生徒の評価や個人情報を扱う業務であることから、生成 AI 利用に対する慎重な姿勢が生じた可能性が考えられます。ただし、利用実感自体は高いことから、潜在的なニーズは高いと言えます。

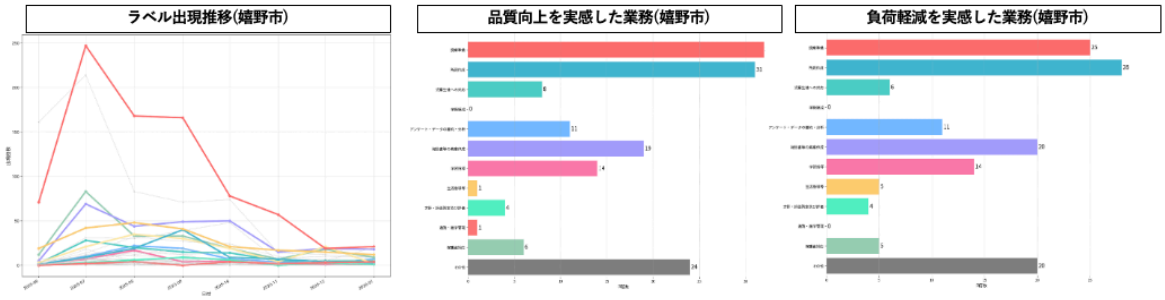


図 29 嬉野市のラベル出現推移とアンケート結果

[新座市]

授業準備に加え、報告書の素案作成や保護者対応は、利用実感と利用実績がともに高く、ギャップはありませんでした。一方、所見作成については嬉野市と同様に利用実感に対して利用実績が低い傾向にありました。嬉野市と比較し、生成 AI 活用が 2 年目であることから教職員の利用経験やノウハウが蓄積され、授業準備に留まらず、その他の校務においても活用領域が組織的に拡大したことが伺える結果となりました。

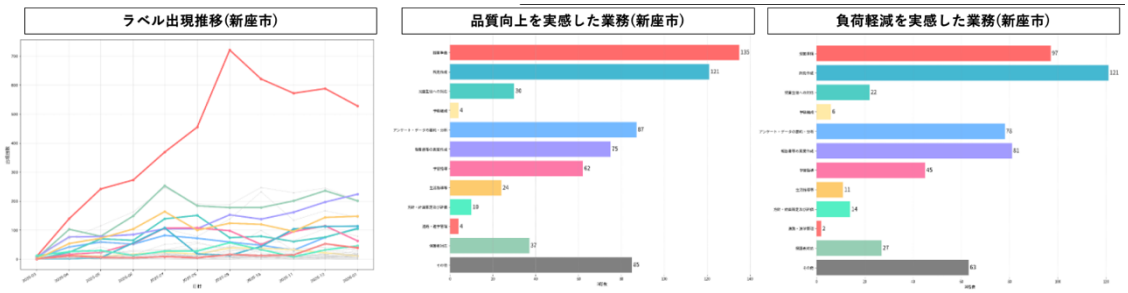


図 30 新座市のラベル出現推移とアンケート結果

[宝塚市]

全体的に新座市と同じ傾向となり、授業準備、報告書の素案作成や保護者対応いずれも。利用実感と利用実績が高い傾向であることが示されました。また、所見作成については、他の自治体と同様に、利用実感に比べ利用実績が低い傾向が示されました。

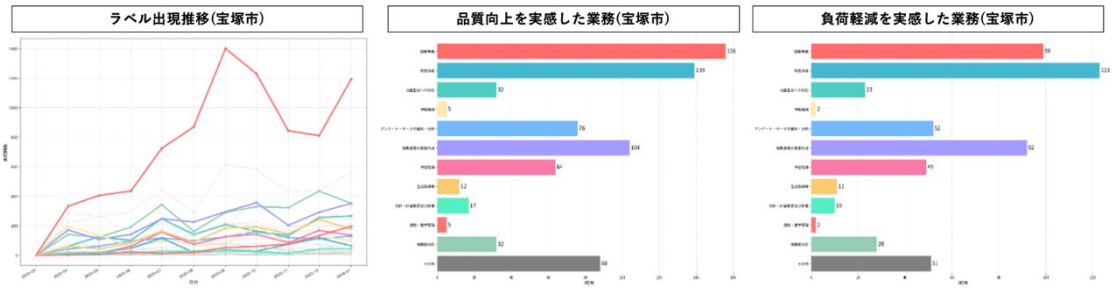


図 31 宝塚市のラベル出現推移とアンケート結果

[まとめ]

三自治体ともに所見作成をはじめとする特定の校務において、品質の向上や負担軽減の「実感」は得られているものの、実際の「利用実績」との間には依然としてギャップが存在することが分かりました。この要因の一つとして、所見作成が児童生徒の評価や個人情報に関わる業務であるため、生成 AI の活用に対して慎重な判断が働いていることが推察されます。

しかし、本事業のヒアリング調査や実証研究を通じて、こうした心理的障壁を払拭するための具体的なヒントが得られています。

まず、本事業で提供した「セキュアな環境」そのものが、教職員にとって「法的なリスクを回避し、安心して情報を扱える」という強力な安心材料（心理的安全性の担保）となっている点です。また、活用が定着している学校では、管理職が「AI の回答はあくまで下書きとして扱い、最後は人間が責任を持って精査する」という運用方針を明確に示しています。こうした「安全性への信頼」と「責任の所在の明確化」という二つの要素が、教職員の不安を解消し、有用感を実際の利用へと繋げる鍵となっています。

利用実感そのものは高い水準にあるため、今後はセキュリティ環境の周知や具体的な活用事例（地産事例）の提示を継続することで、さらに定着が広がる余地は大きいと考えられます。

4.3.2 研修による利用促進成果

利用ログの推移と研修の実施時期を照らし合わせて確認を行ったところ、いずれの自治体においても、研修直後に利用量が大幅に増加していることが分かりました。

ただし、その後の推移については、生成 AI の活用が日常的な校務の中に継続して定着した自治体と、一時的な利用に留まった自治体で傾向が分かれました。この結果から、実証 1 年目の自治体においては、研修が主に個人の利用意欲を高めることに寄与し、実証 2 年目の自治体においては、研修が組織全体での活用定着を後押しする役割を果たしているものと推察されます。

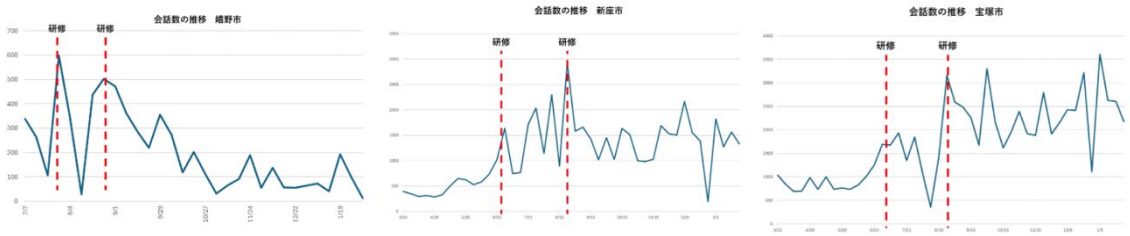


図 32 研修前後によるログ量の推移

さらに、定着している学校へのインタビューを行い、以下を独自に行っていたことが分かりました。

- 学校独自の 30 分程度のミニ研修の実施
- 情報担当の先生による生成 AI 利用の促進
- 教員同士の教え合う文化の醸成
- 特別研修の実施

このことから、生成 AI の活用定着には単発の研修ではなく、校内での継続的な学びの機会や推進役の存在、教員同士の知見共有などの組織的な取り組みが重要である可能性が示唆されました。

4.3.3 学校現場のニーズ

アンケートの結果やインタビューから、生成 AI を活用する上で学校現場にはどのようなニーズがあるのかを考察しました。その結果、代表的なものとして以下の 3 点がニーズとして確認されました。

- 保護者対応、児童対応、生活指導などの校務の負担が重い
- 所見作成、素案作成などの負担が重い
- 安全に、簡単に使える環境が欲しい

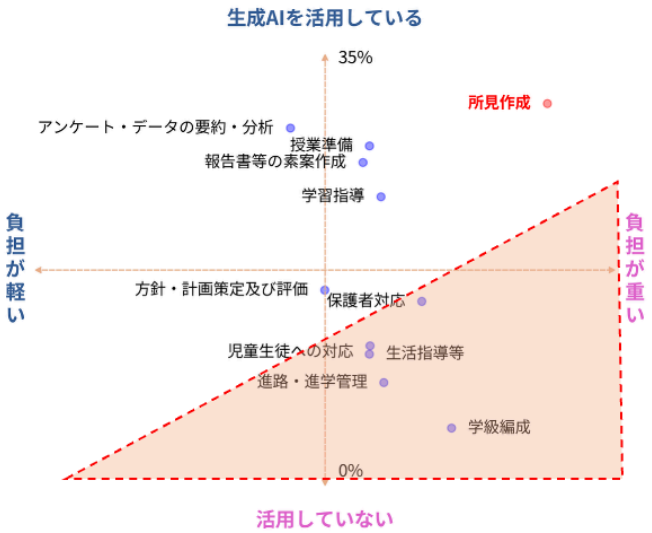


図 33 負担が重く、かつ生成 AI を活用していない校務

カテゴリ	コメント
使い方の不安	「どんな場面で活用するのに適しているのか分からないので、なかなか使い出せないでいます。」 「学校の各学級の時間割を作成しているが、以前情報を少しずつ読み込ませて作成しようとしたが、時間だけ消費した。そのため、使うことを断念したことがある。」
安全面の不安や抵抗感	「個人情報を入れるのはどうなのかと思ってしまう。」 「生成 AI は便利な面もあるが、人を相手にする上で使いにくいこともあると感じている。」 「AI を活用して業務改善を行いたいが、AI を活用することへの抵抗感がある先生もまだまだ多いと思われる。」

再掲表 3 事前アンケートのコメント抜粋

以上のことから、生成 AI の提供にあたっては、以下の 2 点を考慮した活用支援が必要と考えられます。

- 対人業務においては、精神的負担を軽減するための補助的な利用（対応のシミュレーション等）
- 文書作成業務においては、着手時の負担を軽減するための効率的な利用（下書き作成等）

また、本事業において極めて重要な知見として、生成 AI の利便性や価値を伝えるだけでなく、「環境がセキュアであること」を教職員へ丁寧に周知し、理解を得ることが挙げられます。

たとえ高度な機能が整備されていても、情報の取り扱いに対する安全性が十分に伝わっていなければ、教職員はリスクを懸念して利用を控える傾向にあります。「個人情報を含む校務固有のデータを取り扱っても安全である」という確証が教職員に伝わって初めて、生成 AI の活用が実際の業務改善（効果創出）へと繋がります。したがって、安全性の丁寧な情報提供と周知は、生成 AI の利活用を促進し、その価値を最大限に引き出すための不可欠な前提条件であると考えられます。

4.3.4 利用促進に関する課題と対策

本事業を通して、利用促進を進める上で、これまでのアンケート、インタビュー、ログ利用分析結果から以下の課題があると考えました。

- 各学校でのオフライン研修実施が困難である
- オンライン研修では、トラブルなどもあり全員に同じ質を届けることが困難
- 生成 AI の利用に踏み出せていない方々への研修参加への動機づけが困難
- 汎用 AI からセキュアな環境の生成 AI の活用への橋渡しが困難である

これらの対策として、まずは先行自治体で生まれた「セキュアな環境ならではの事例」を共有し、自ら活用を試みる「先駆者」となる教職員を育成することが重要です。

さらに、本報告書では、これら現場の教職員が自校の校務実態に合わせて考案・実践した活用事例を「地産事例」と定義します。この地産事例を各校に展開し、次に続く教職員からも新たな事例が生まれるという好循環を構築することが、利活用を定着させる上で極めて有効と考えられます。

地産事例が有効と考えられる理由は、主に以下の通りです。

・業務の実態に即している点
現場の教職員が実際に直面している校務に基づいた事例であるため、他の教職員にとっても導入後の効果を具体的に想像しやすく、活用への心理的な障壁が下がります。

・相互啓発による波及効果
身近な同僚による実践は、単なるマニュアル以上の説得力を持ちます。一人の実践が「地産事例」として共有されることで、組織全体で知見を出し合い、新たな活用法を模索する自発的な動きにつながります。

第５章　まとめ

5.1　実証目的に対する成果の総括

本事業では、生成 AI の校務利用におけるリスク対応と、教職員の負担軽減・教育の質の向上を両立させる実証研究を行ってきました。第 1 章で掲げた事業目的に対し、本年度の実証を通じて得られた成果を以下の通り総括します。

まず、**セキュアな生成 AI 環境における校務ユースケースの確立**については、個人情報や機密情報を取り扱える環境特性を活かし、校務の核心部分に迫る具体的な活用モデルを確立できました。具体的には、児童生徒の名簿や成績データを安全に読み込める環境を活用した通知表所見の案出や、個別の指導計画の作成、学籍情報を踏まえた事務連絡の起案など、高いセキュリティが求められる業務における有効性を確認できました。

また、**年間を通じた業務効率化および教育活動の高度化に資する知見の蓄積**については、各学期末の繁忙期において「所見作成」業務への利用が顕著に増加する傾向がシステムログ等から確認されました。これは、生成 AI を活用して「資料作成の着手（ゼロベースでの作成)」に伴う心理的・時間的なハードルを下げることが、多忙な教職員の負担軽減に寄与する可能性を示唆しています。実際にヒアリング調査においても、多くの教職員から「AI が作成した下書きを修正する手法により、事務作業の心理的な負担が軽くなった」という声が得られており、定量・定性両面からその有効性が確認されました。

さらに、今後の定着に向けた知見として、繁忙期の活用をより確実にするための支援策が重要であることも確認できました。教職員が極めて多忙となる学期末直前には、大規模な研修を実施するのではなく、時期に応じた「通知表所見用プロンプト例」の提示などの情報提供を行うことが有効です。こうした現場の業務サイクルに合致した柔軟なアプローチこそが、活用の最大化と定着を促す上で極めて重要であると考えています。

5.2 まとめ

一般的な生成 AI の活用には、情報管理やセキュリティに対する不安、個人情報などの重要性の高い情報が使えないといった限界があります。本実証研究では、セキュアな環境を整備することでこうした制約を低減し、教職員が安心し重要性の高い情報を生成 AI で活用できる環境を実現しました。その結果、図 34（まとめ概念図）に示した通り、利用機会の増加や活用範囲の拡大が見られ、校務の質の向上および効率化につながる一連の構造が確認されました。

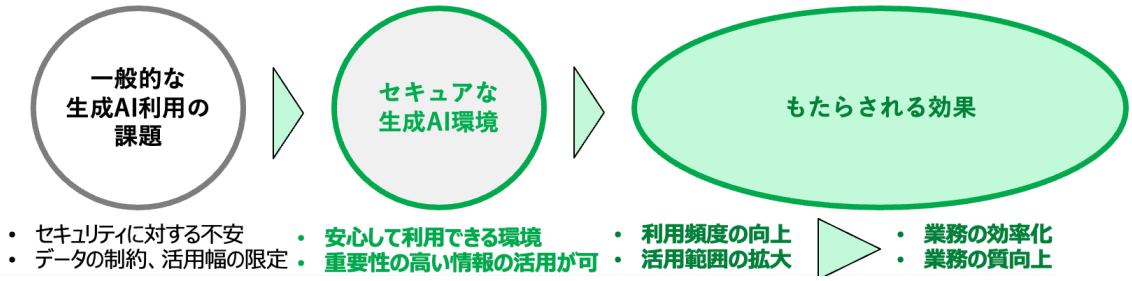


図 34 まとめ概要図

また、セキュアな環境を整備するだけでは利用が自動的に定着するわけではなく、その価値や具体的な活用方法を如何に現場に伝え、広げていくかが重要です。本事業で得られた知見を整理すると、図 35（利用促進への各ステップ）に示す通り、段階的なアプローチが有効であると言えます。

「STEP1：利用の大前提の整備」として、セキュリティ環境やルールの構築を行い、「STEP2：利用のきっかけづくり」として、教職員の理解度に応じた研修や伴走支援を実施します。そして、「STEP3：組織での利用」として、成功事例の共有や自律的に広がる仕組みを整備することで、生成 AI は真に学校現場を支えるツールとなります。

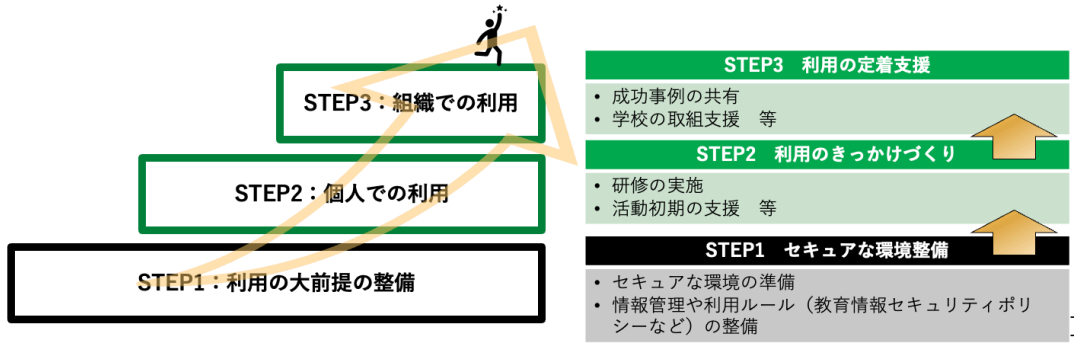


図 35 利用促進への各ステップ

本実証を通じて、セキュリティの確保と現場の業務サイクルに即した適切な支援が組み合わさることで、生成 AI は教職員にとって信頼できるパートナーとなり得ることが示されました。本事業で培われた、現場主導の知見共有（地産事例の創出）や、安全性を前提とした利活用のモデルが、今後の教育現場における生成 AI 活用の確かな一歩となることを期待し、本報告書の結びといたします。

[付録：アンケート]

生成 AI の活用状況及び教職員の意識の変化を把握し、導入による効果や課題を分析することを目的として、令和 7 年 8 月と 12 月にアンケートを実施しました。

表 6 事前・事後アンケート概要

目的	生成 AI の活用状況及び教職員の意識の変化を把握し、導入による効果や課題を分析する
実施時期	事前アンケート：令和 7 年　8 月 22 日～令和 7 年 9 月 5 日 事後アンケート：令和 7 年 12 月 19 日～令和 8 年 1 月 9 日
対象	事前アンケート：教職員（埼玉県新座市、兵庫県宝塚市、佐賀県嬉野市） 事後アンケート：同上
質問内容	以下 11 種類のユースケースを対象に「当該業務にかかる時間」「現状の負担感」「生成 AI の活用状況」等について回答を得た 授業活用、所見作成、登校班素案作成、児童対応、学級編成、要約・分析、報告素案作成、悩み相談、 学習指導、生活指導、授業方針・評価検討、進路管理、保護者対応
回答数	事前アンケート：合計 818、新座市 343、宝塚市 340、嬉野市 135 事後アンケート：合計 1,076、新座市 446、宝塚 466、嬉野市 164
留意事項	本アンケートは対象者への任意協力によるものであり、全数調査（悉皆調査）や無作為抽出法に基づいたものではない。得られた結果は概況把握に資する一方、地域間の統計的な優位性を比較できるものではなく、教育現場の全容を断定的に示すものではない点に鑑み、分析を実施している

[事前アンケート]

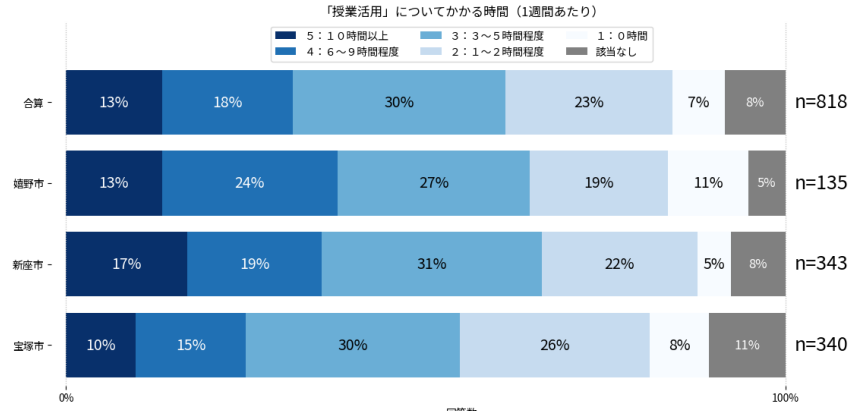


図 36 「授業活用」について、当該業務にかかる時間（1 週間あたり）

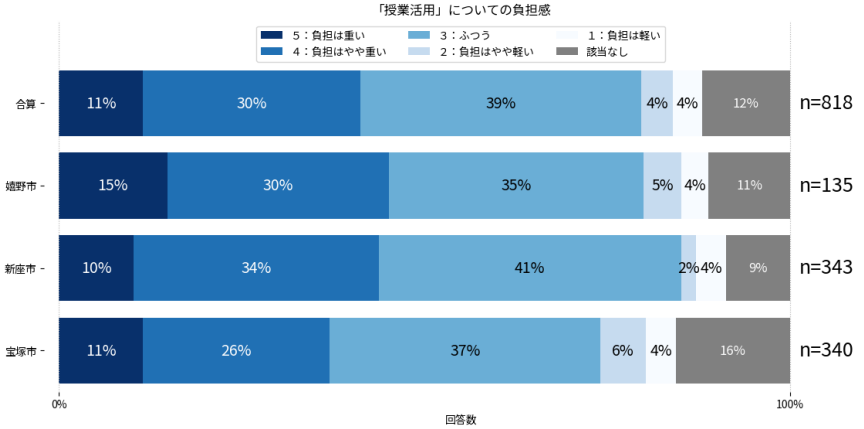


図 37 「授業活用」についての負担感

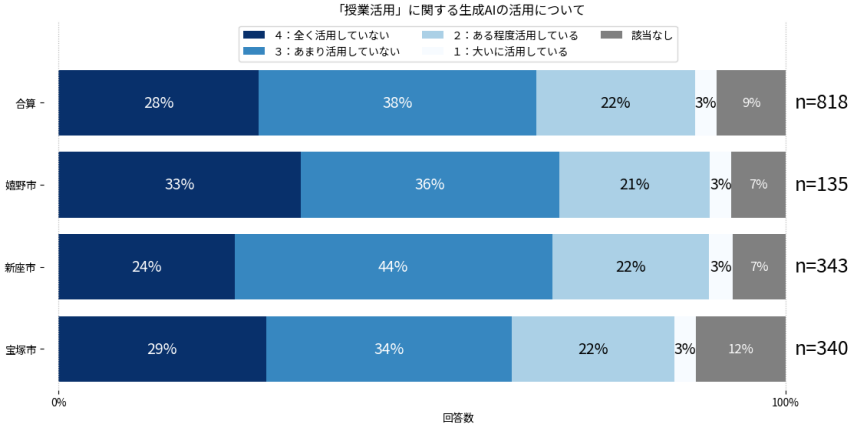


図 38 「授業活用」に関する生成 AI の活用について

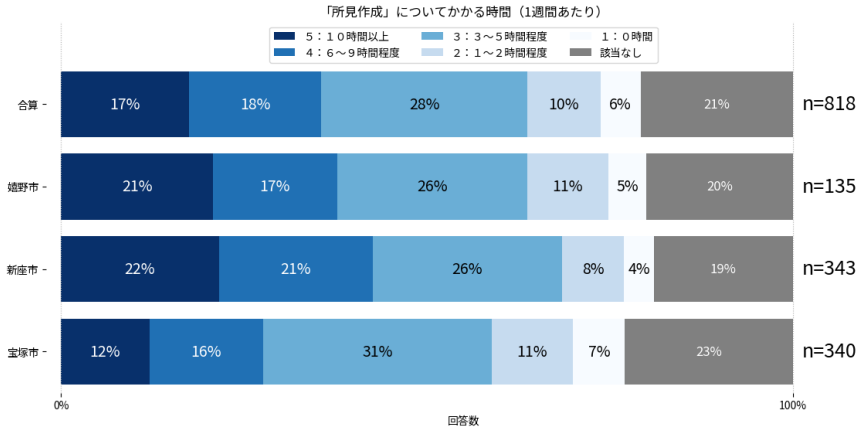


図 39 「所見作成」にかかる時間（1 週間あたり）

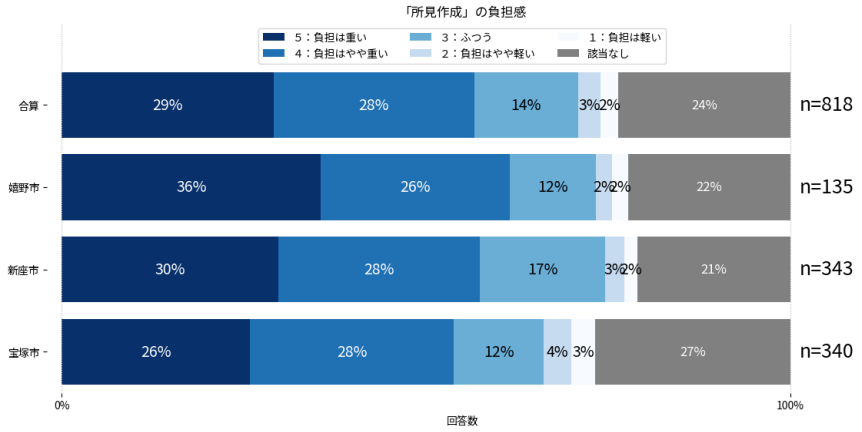


図 40 「所見作成」についての負担感

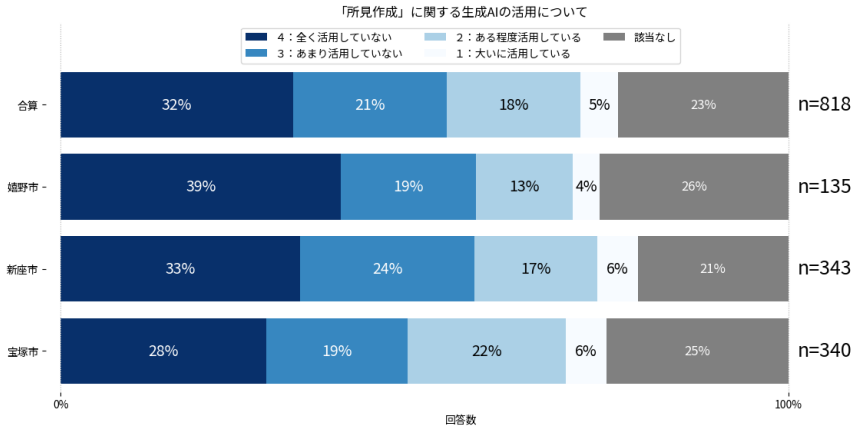


図 41 「所見作成」に関する生成 AI の活用について

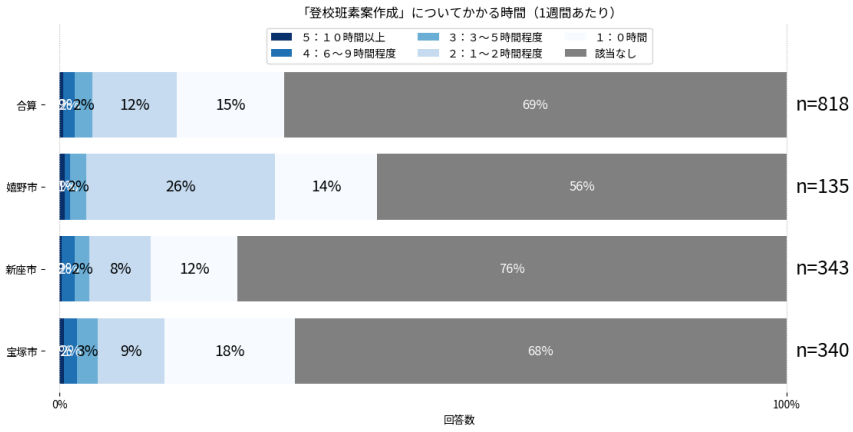


図 42 「登校班素案作成」についてかかる時間（1週間あたり）

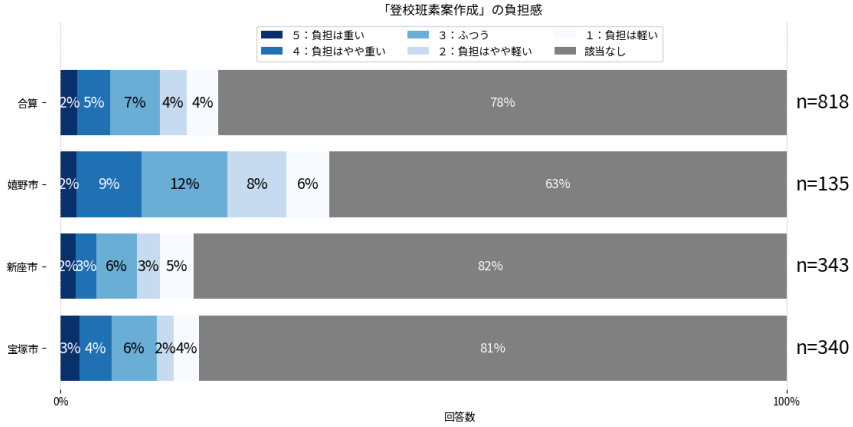


図 43 「登校班素案作成」についての負担感

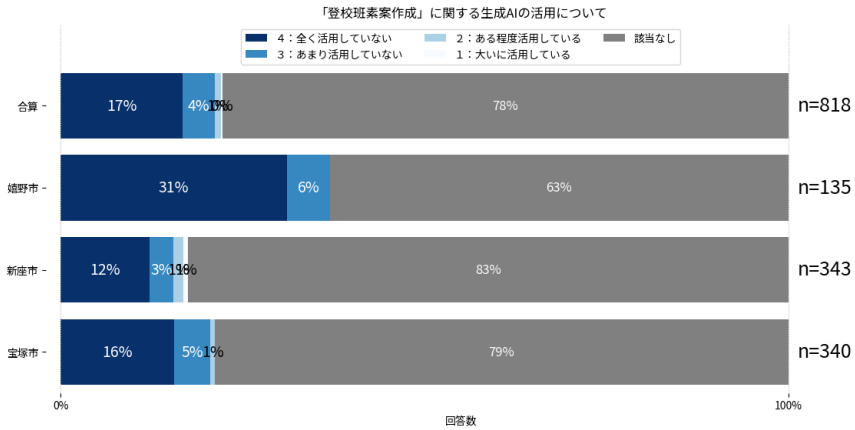


図 44「登校班素案作成」に関する生成 AI の活用について

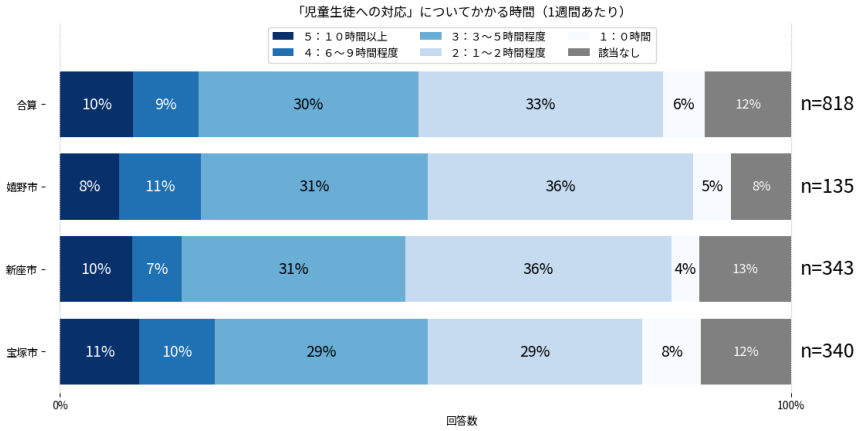


図 45 「児童生徒への対応」についてかかる時間（1週間あたり）

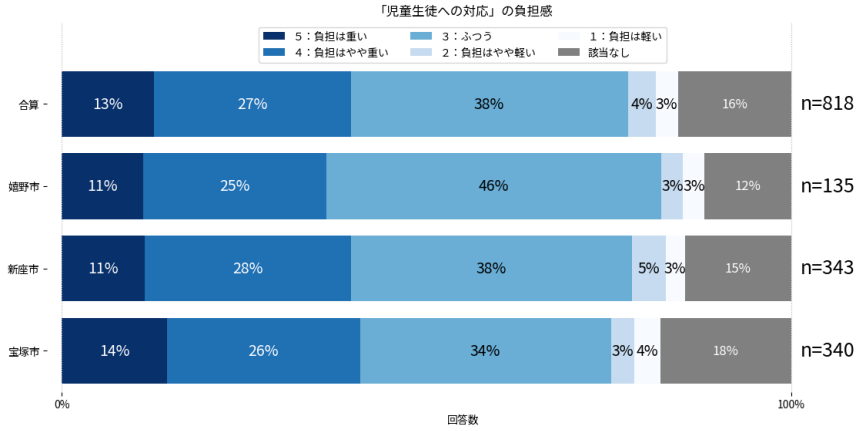


図 46 「児童生徒への対応」についての負担感

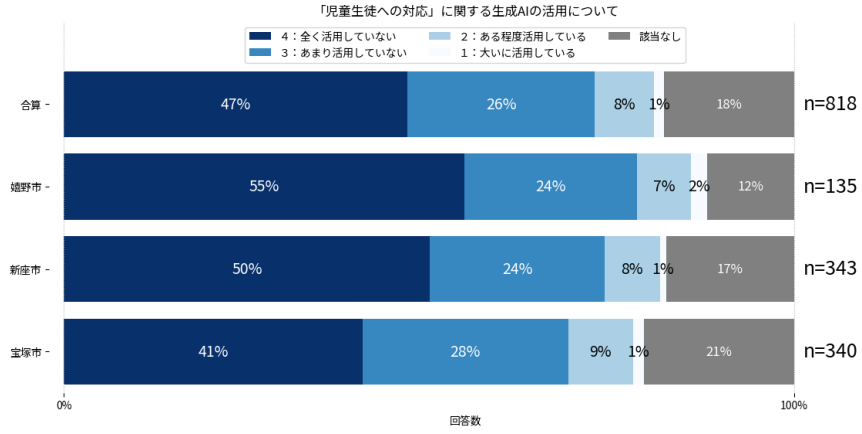


図 47 「児童生徒への対応」に関する生成 AI の活用について

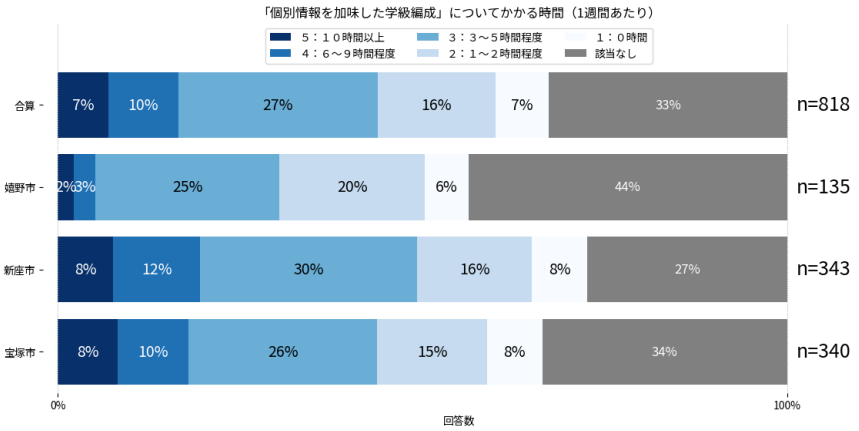


図 48 「個別情報を加味した学級編成」についてかかる時間（１週間あたり）

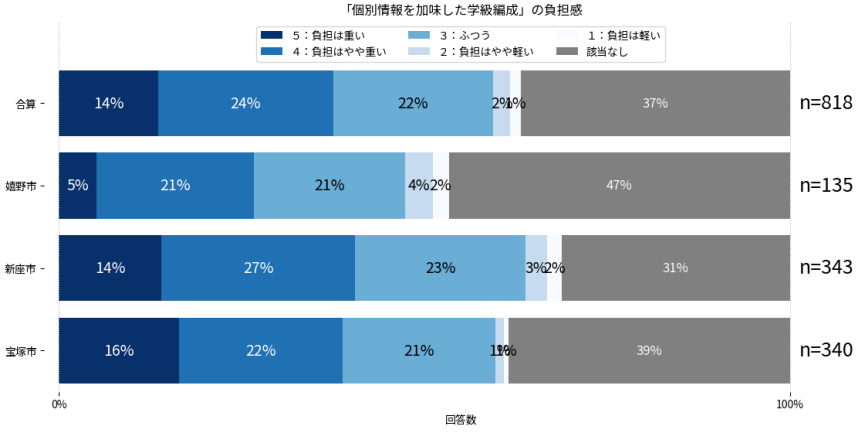


図 49 「個別情報を加味した学級編成」についての負担感

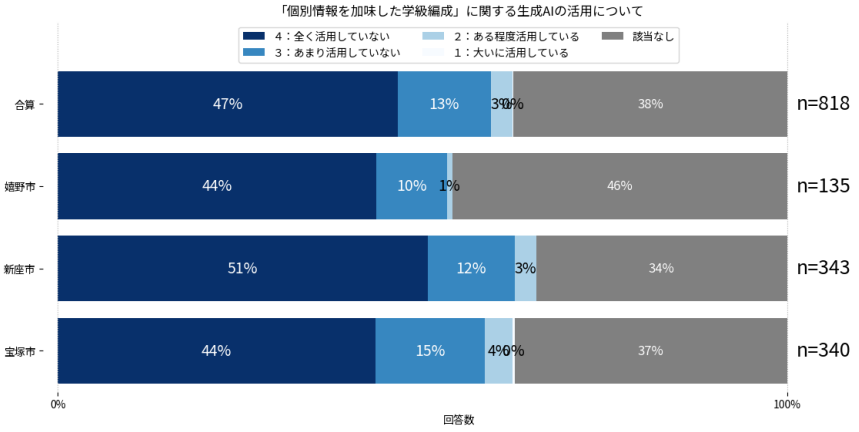


図 50 「個別情報を加味した学級編成」に関する生成 AI の活用について

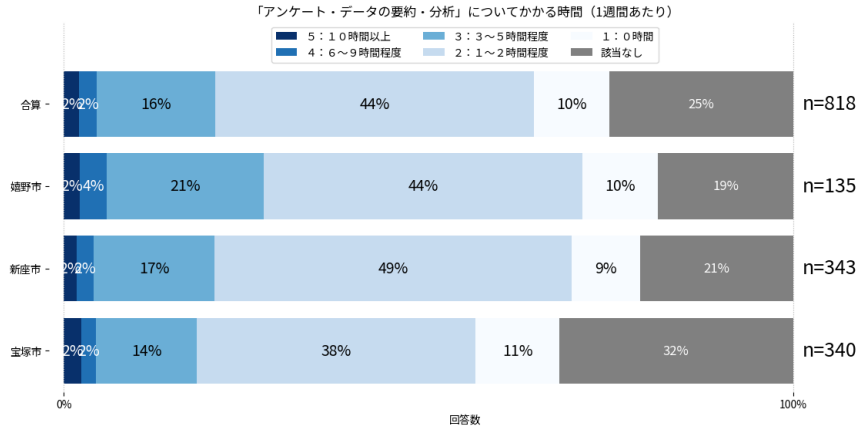


図 51「アンケート・データの要約・分析」についてかかる時間（1 週間あたり）

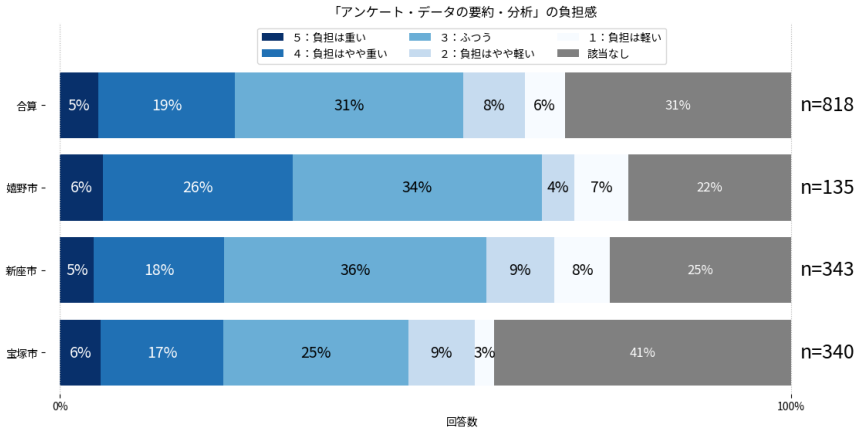


図 52 「アンケート・データの要約・分析」の負担感

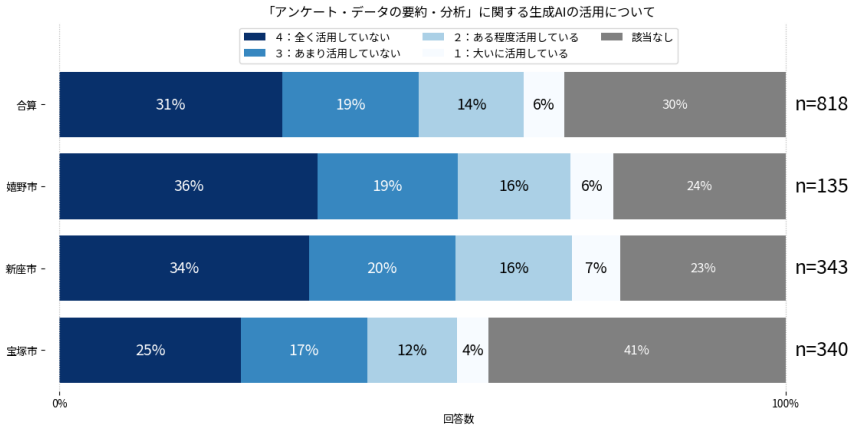


図 53 「アンケート・データの要約・分析」に関する生成 AI の活用について

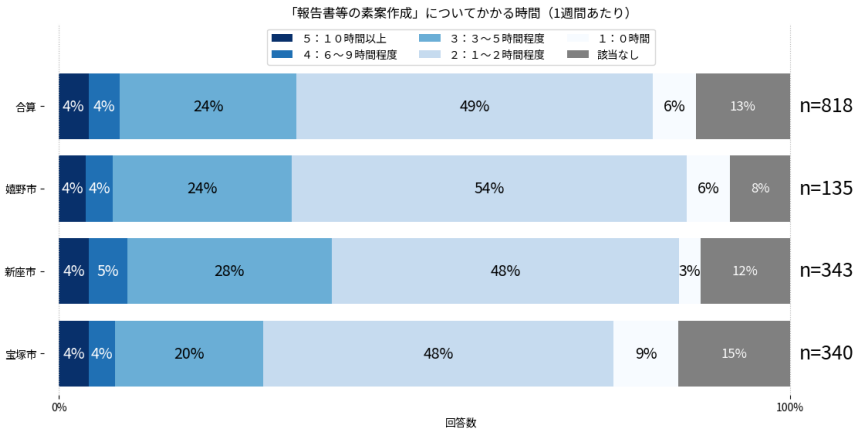


図 54 「報告書等の素案作成」についてかかる時間（1週間あたり）

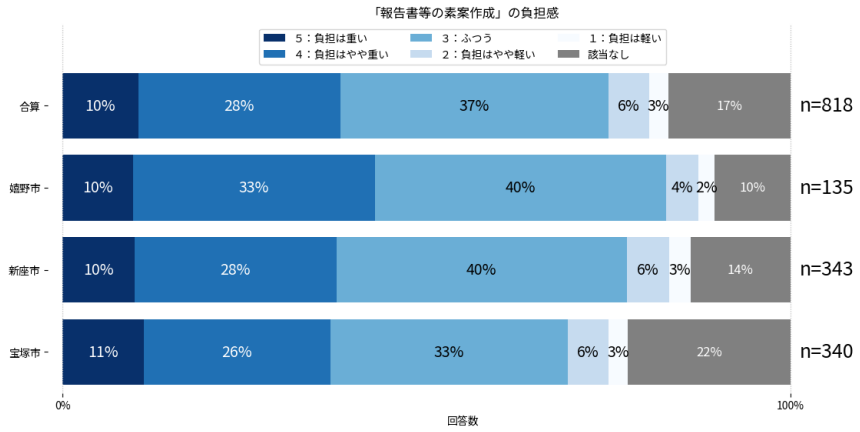


図 55 「報告書等の素案作成」についての負担感

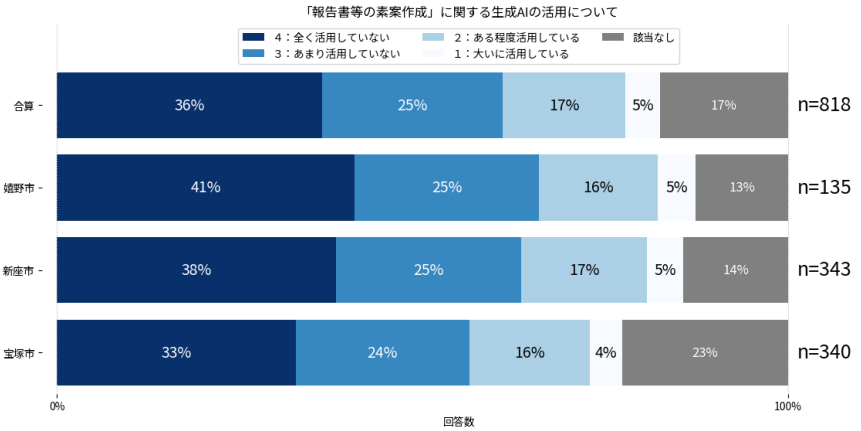


図 56 「報告書等の素案作成」に関する生成 AI の活用について

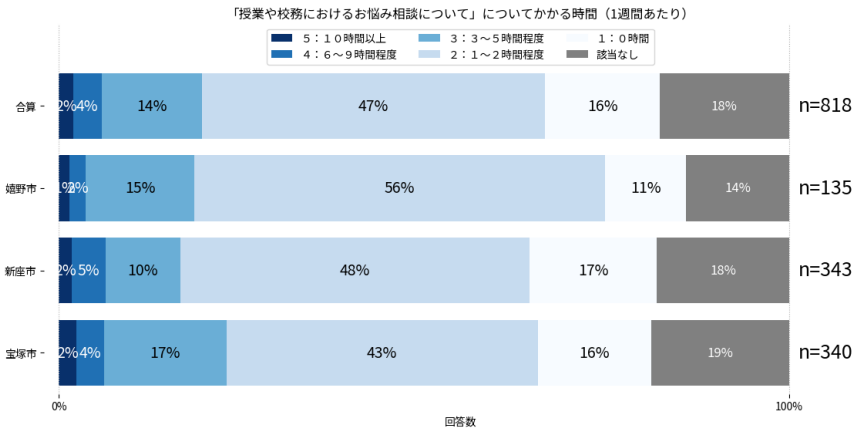


図 57「授業や校務におけるお悩み相談」についてかかる時間（１週間あたり）

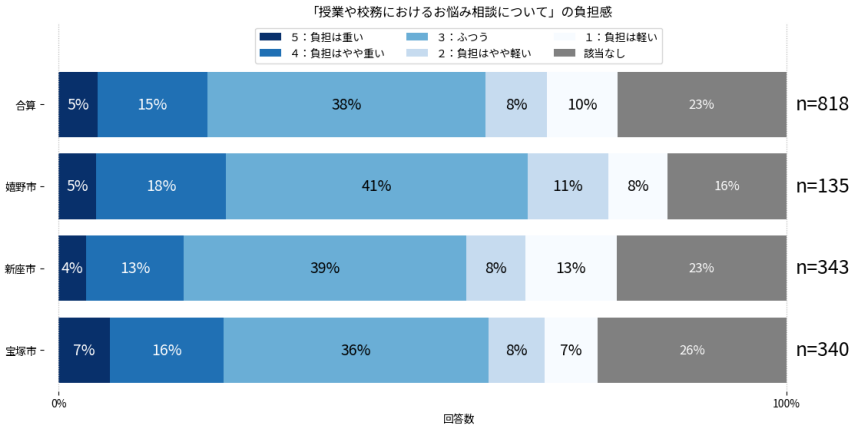


図 58 「授業や校務におけるお悩み相談」についての負担感

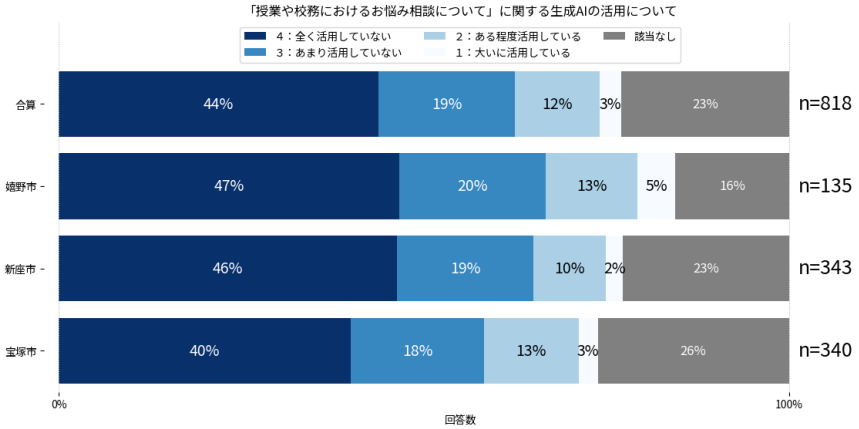


図 59 「授業や校務におけるお悩み相談」に関する生成 AI の活用について

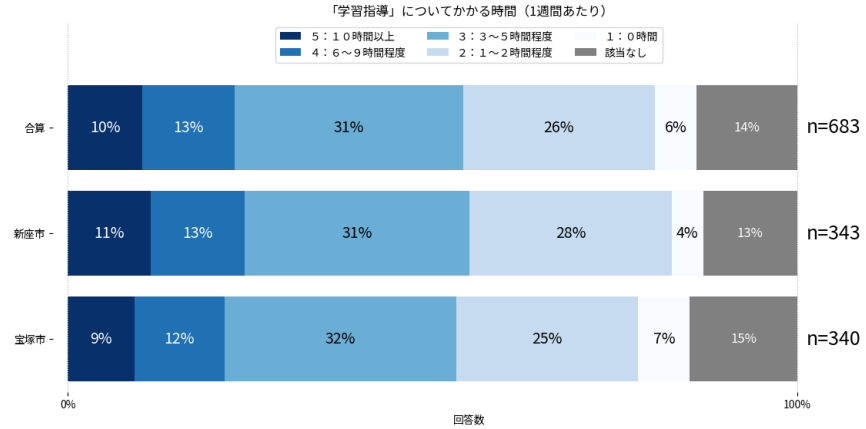


図 60 「学習指導」についてかかる時間（１週間あたり）

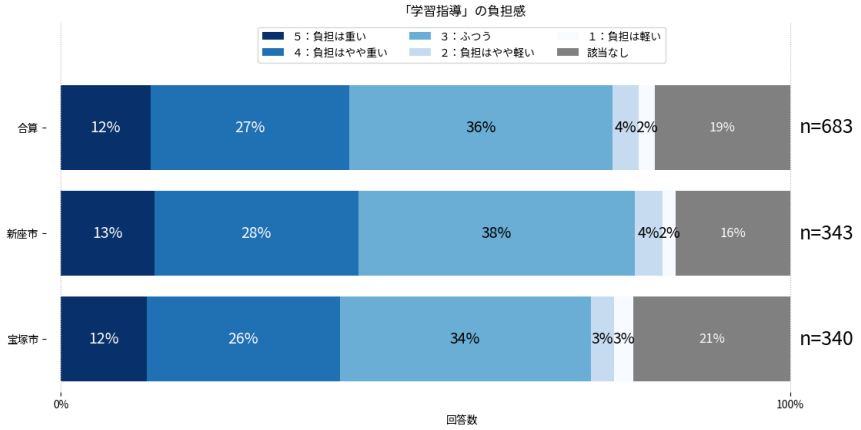


図 61 「学習指導」についての負担感

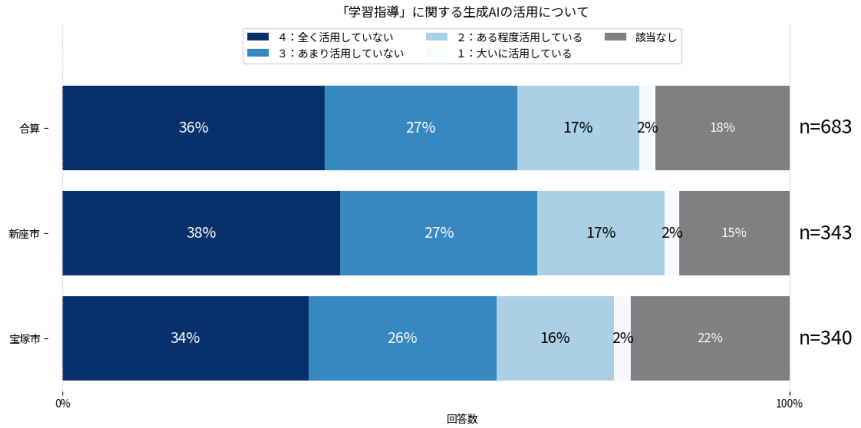


図 62 「学習指導」についての負担感

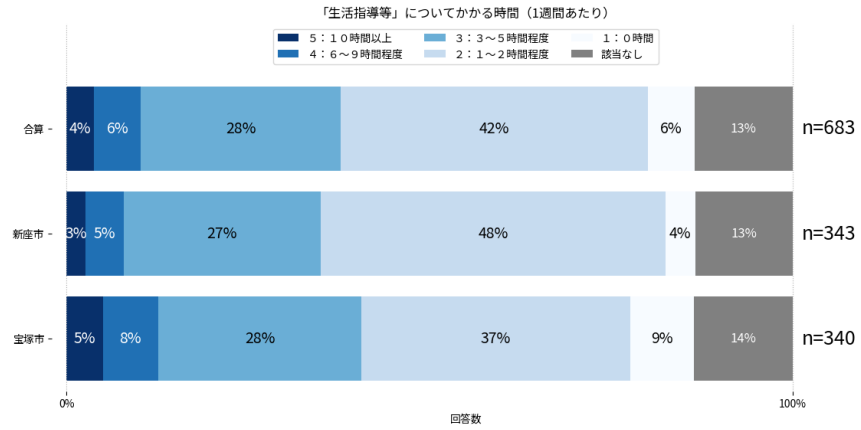


図 63 「生活指導等」に関する生成 AI の活用について

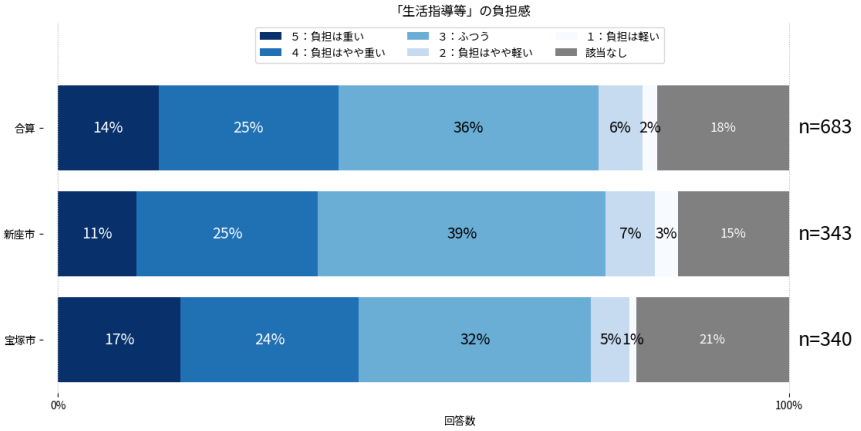


図 64 「生活指導等」についての負担感

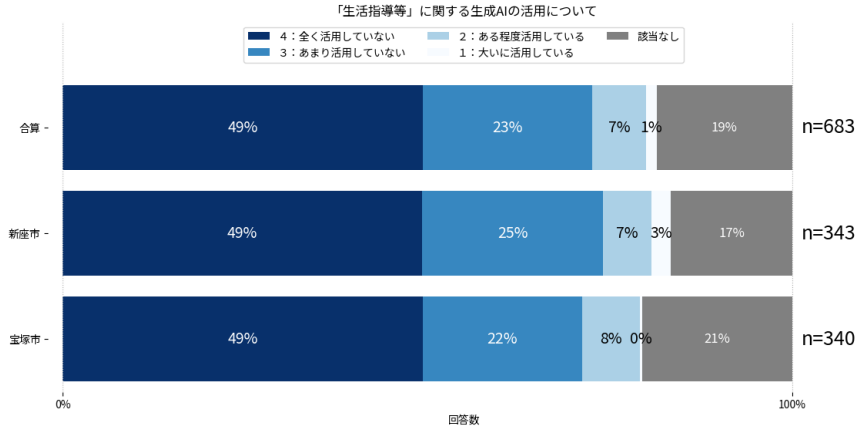


図 65 「生活指導等」に関する生成 AI の活用について

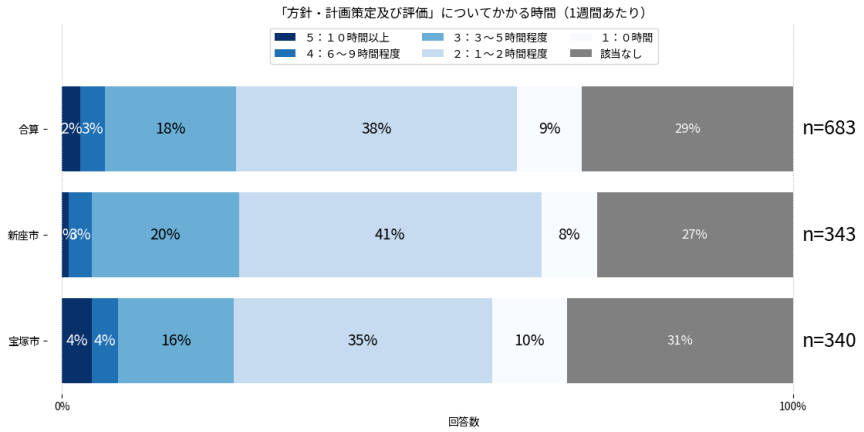


図 66 「方針・計画策定及び評価」についてかかる時間（1週間あたり）

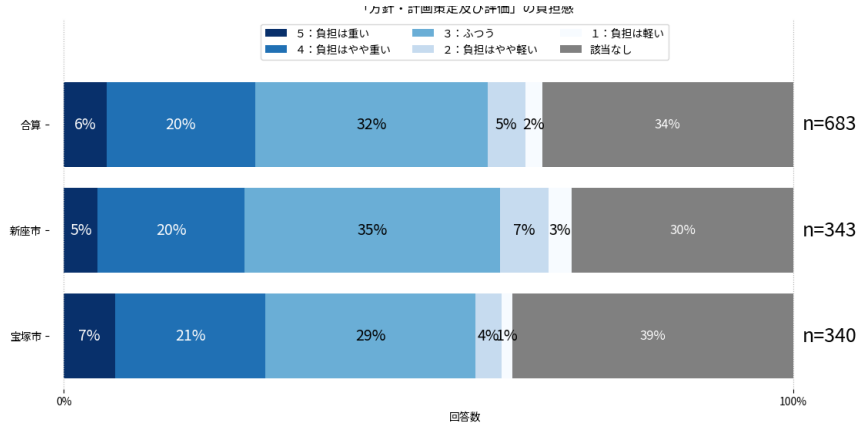


図 67 「方針・計画策定及び評価」についての負担感

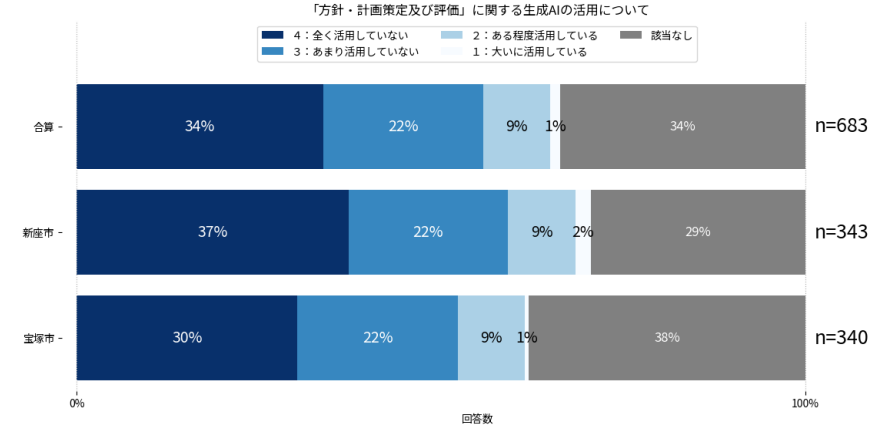


図 68 「方針・計画策定及び評価」に関する生成 AI の活用について

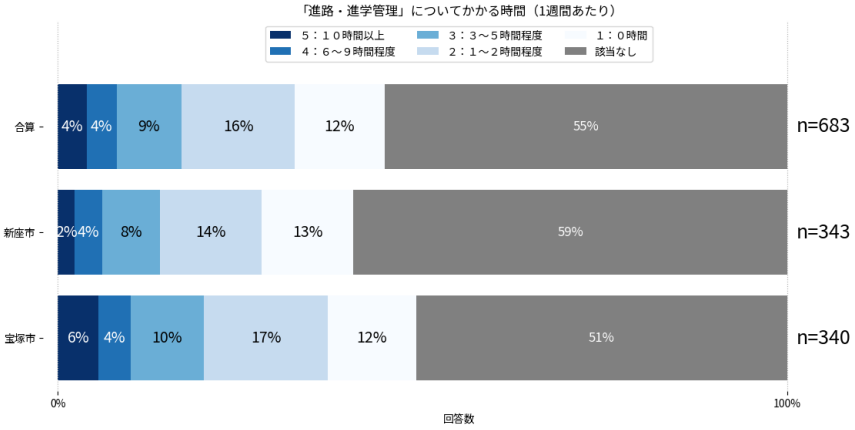


図 69 「進路・進学管理」についてかかる時間（1週間あたり）

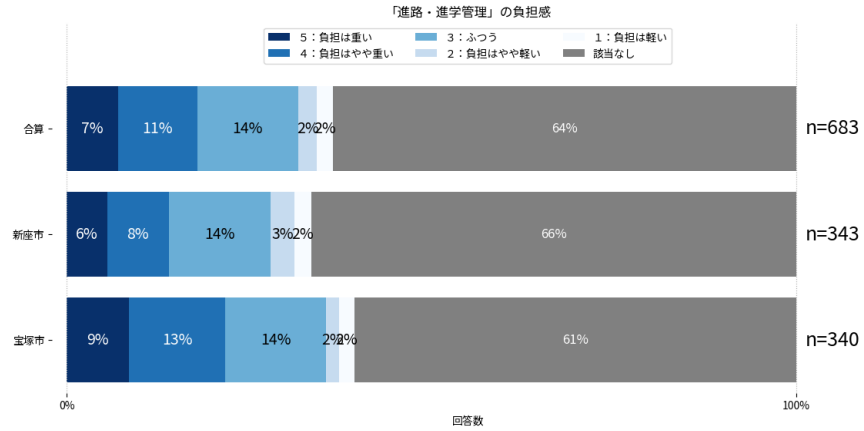


図 70 「進路・進学管理」についての負担感

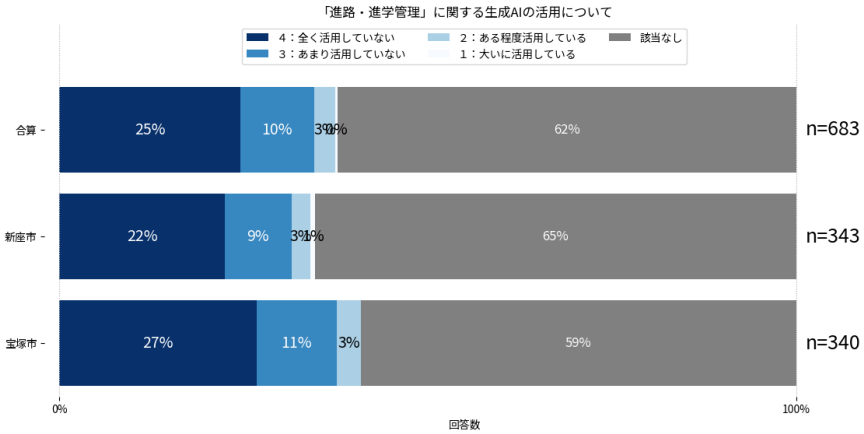


図 71 「進路・進学管理」に関する生成 AI の活用について

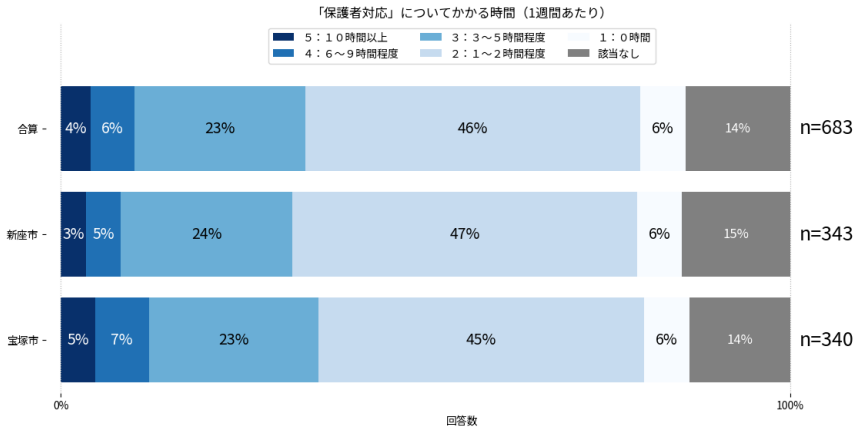


図 72 「保護者対応」についてかかる時間（１週間あたり）

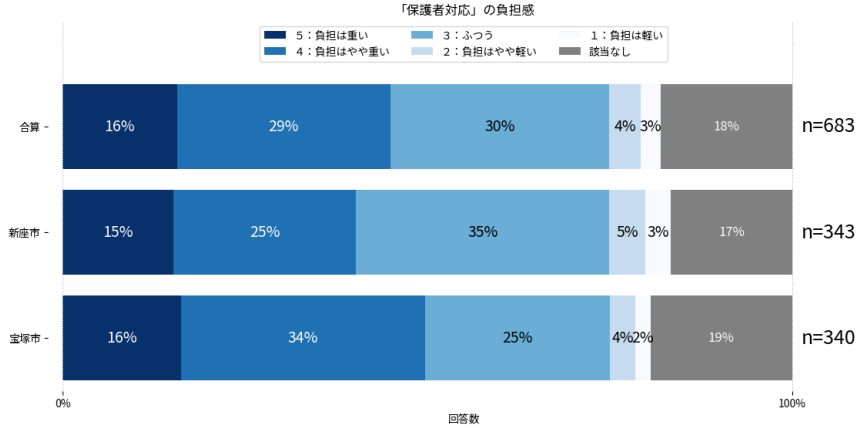


図 73 「保護者対応」についての負担感

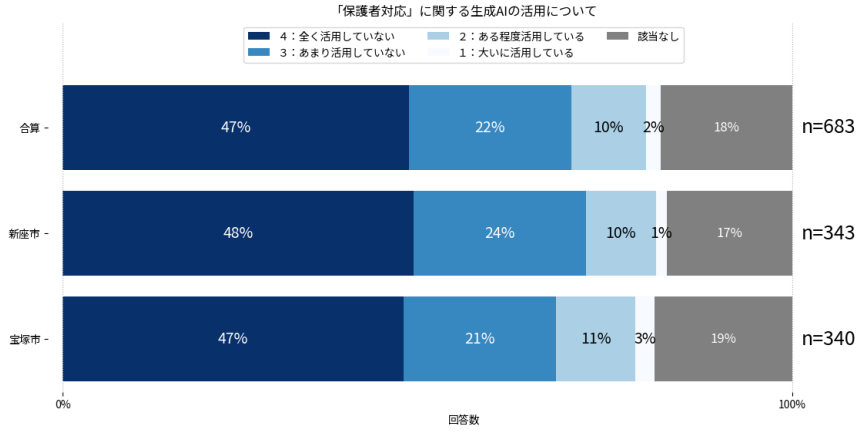


図 74 「保護者対応」に関する生成 AI の活用について

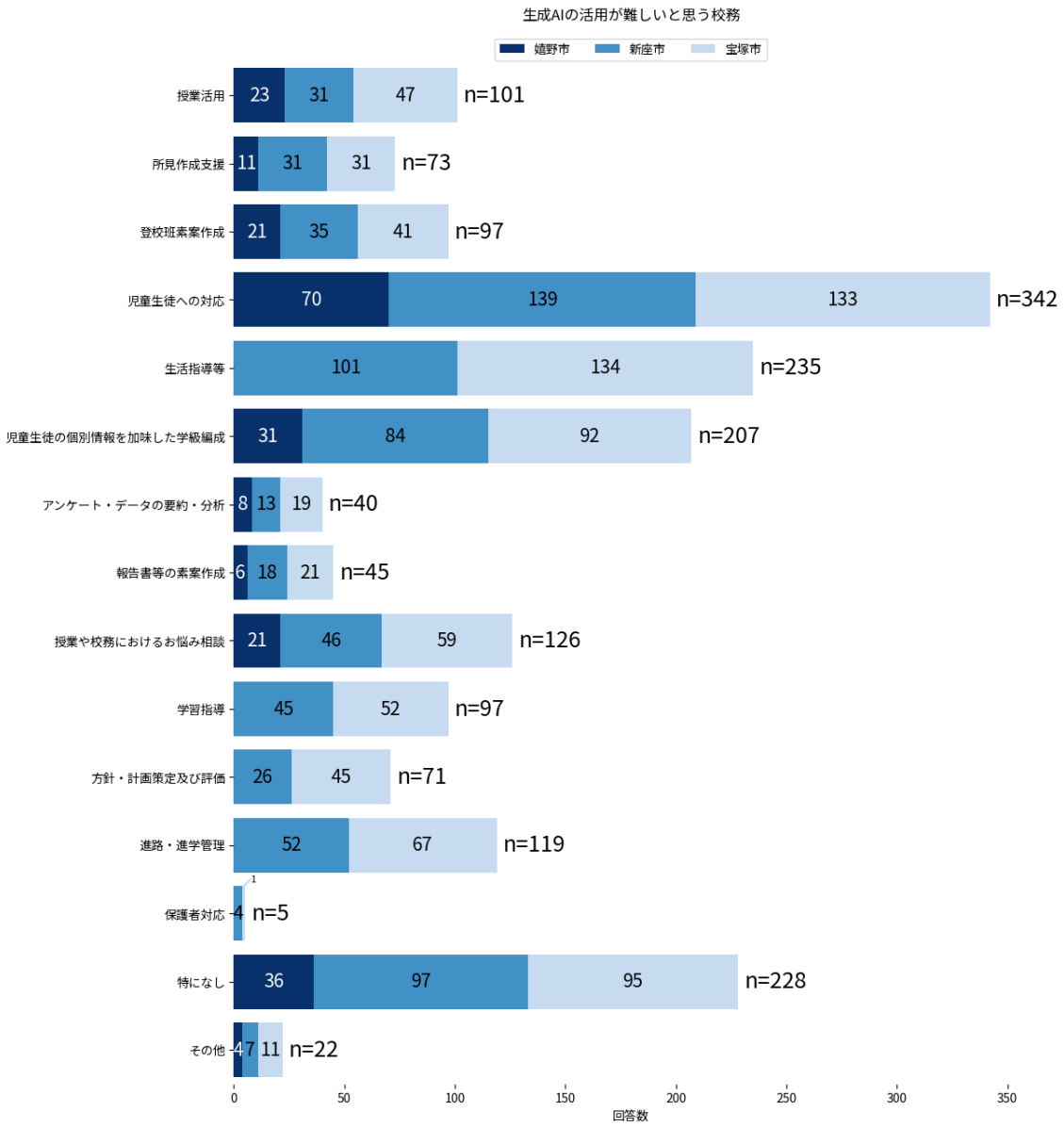


図 75 生成 AI の活用が難しいと思う校務

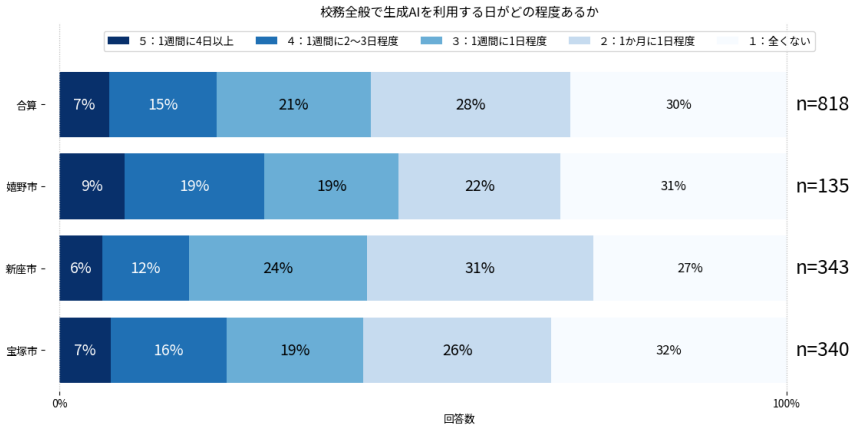


図 76 校務全般で生成 AI を利用する日がどの程度あるか

[事後アンケート]

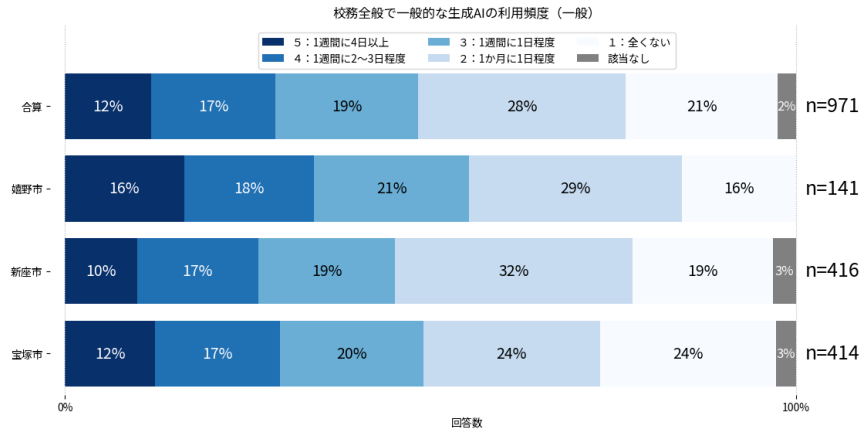


図 77 一般的な生成 AI も含めた生成 AI の利用頻度

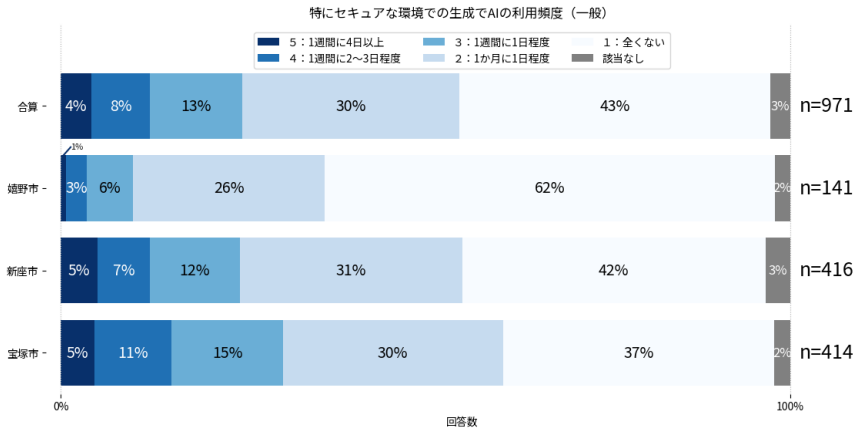


図 78 特にセキュアな環境での生成 AI の利用頻度

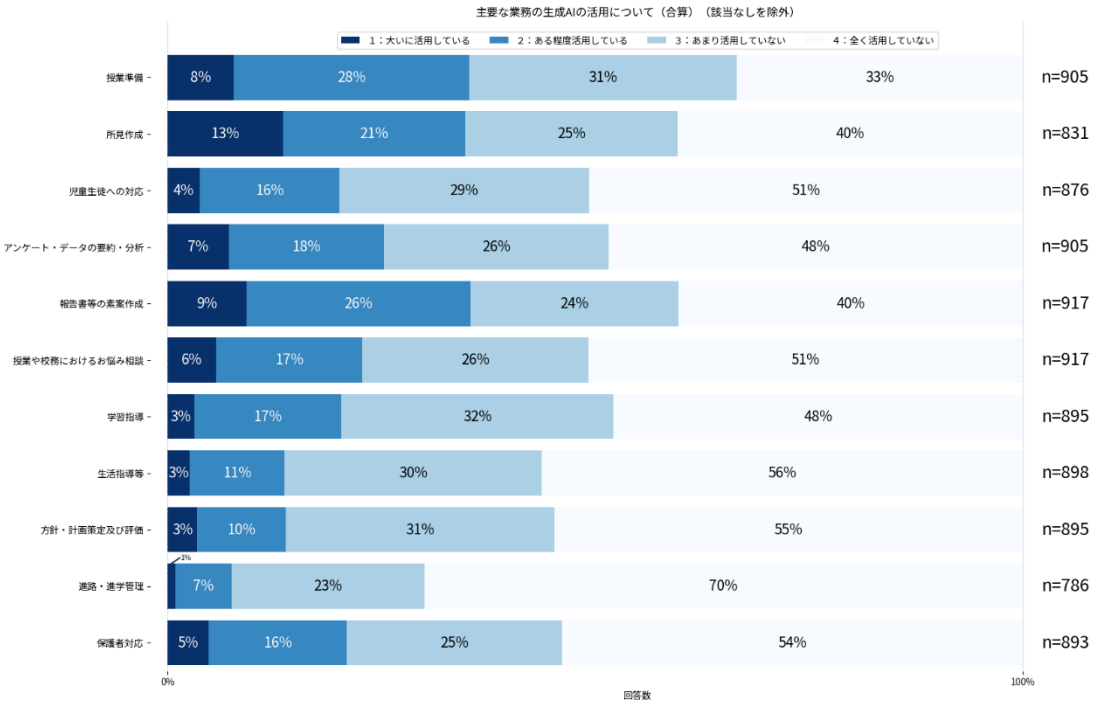


図 79 主要な業務別について生成 AI の活用度合い（全体）

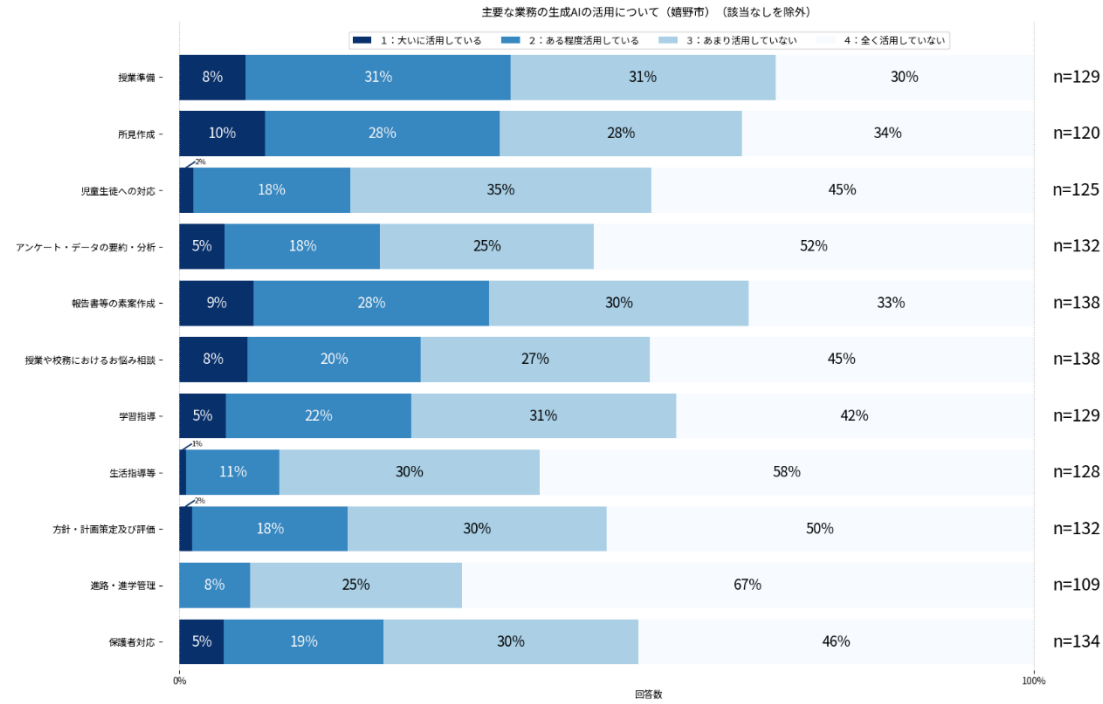


図 80 主要な業務別について生成 AI の活用度合い（嬉野市）

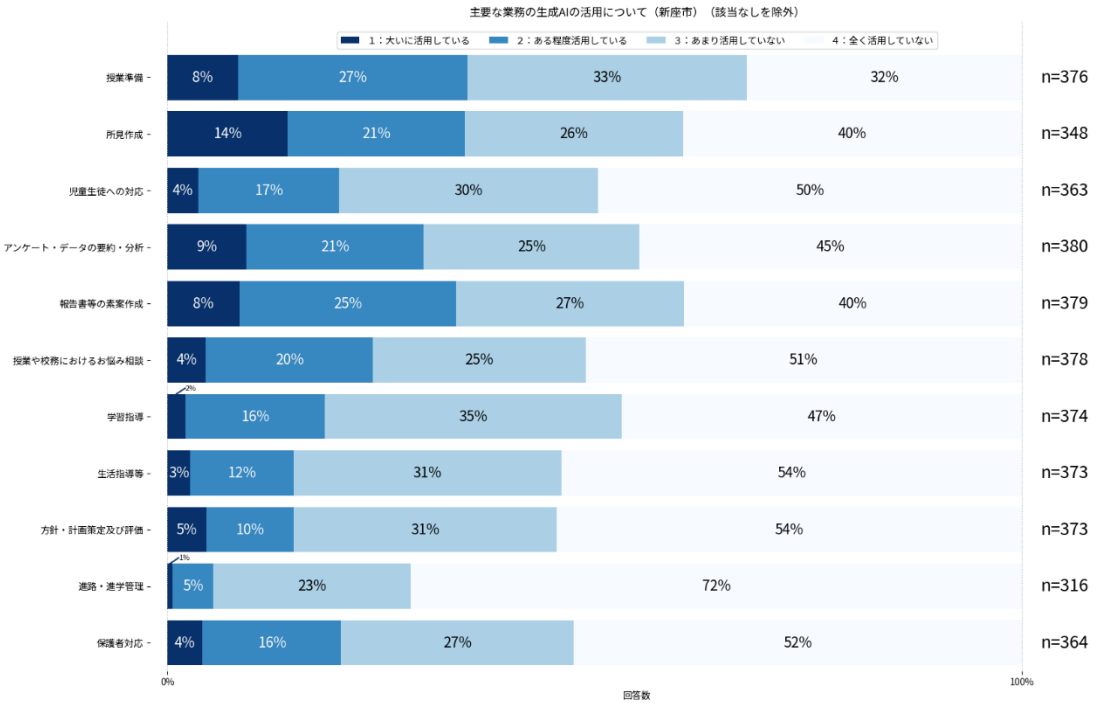


図 81 主要な業務別について生成 AI の活用度合い（新座市）

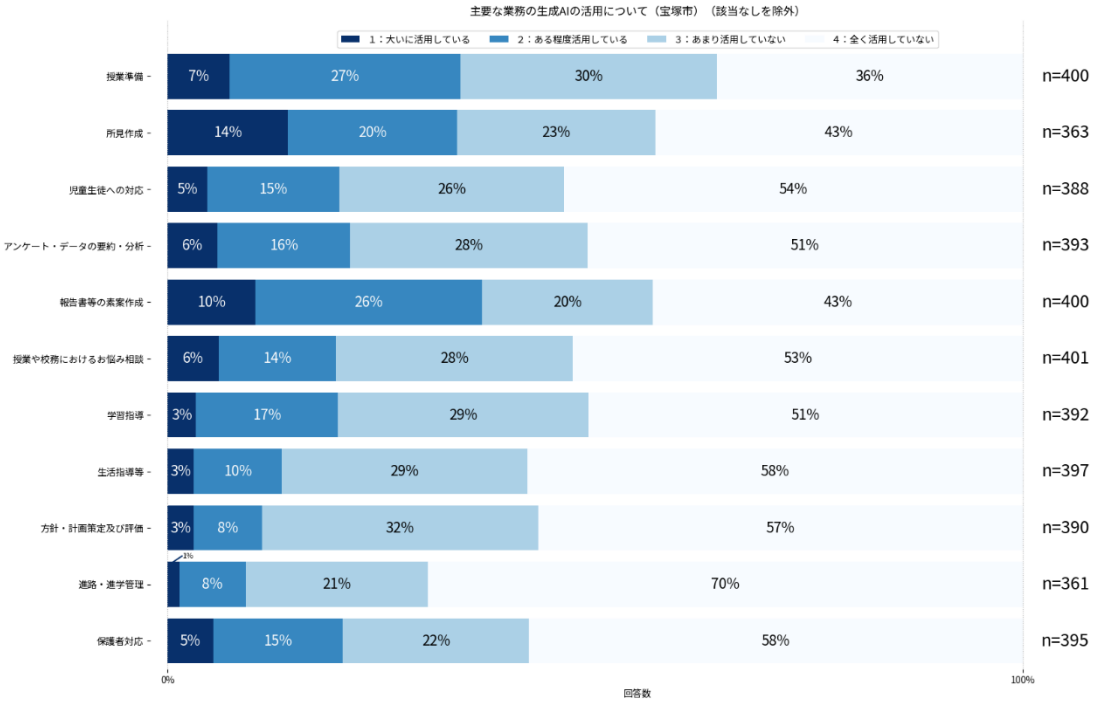


図 82 主要な業務別について生成 AI の活用度合い（宝塚市）

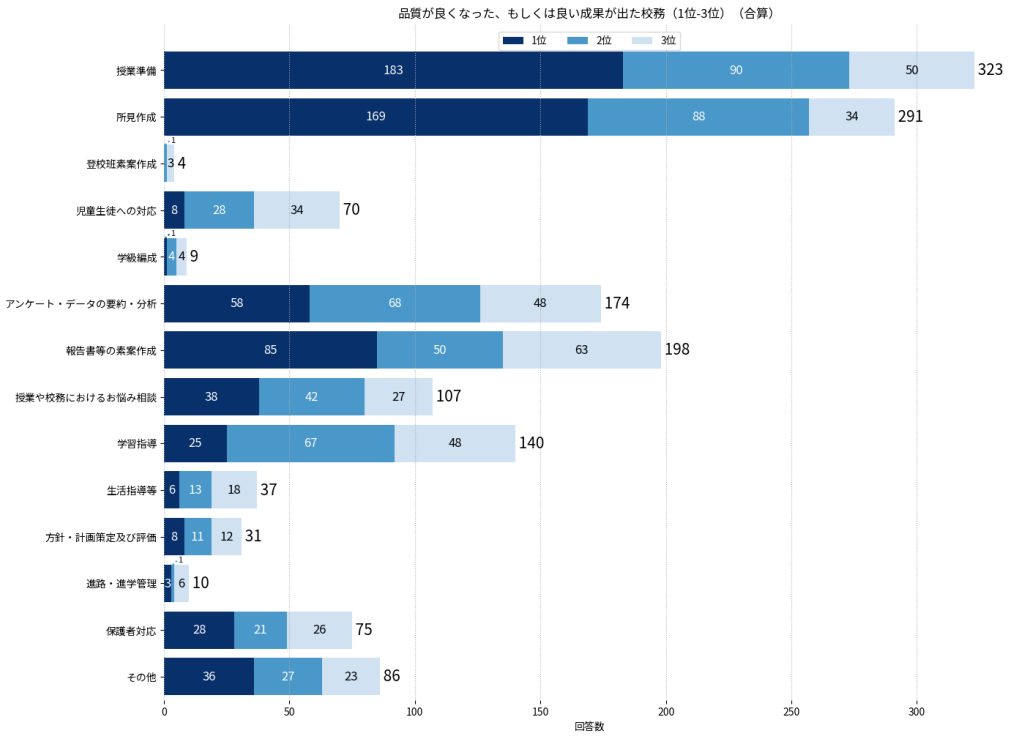


図 83 セキュアな生成 AI を利用したことによって、品質が良くなった、もしくは良い成果が出た校務上位 3 件（合算）

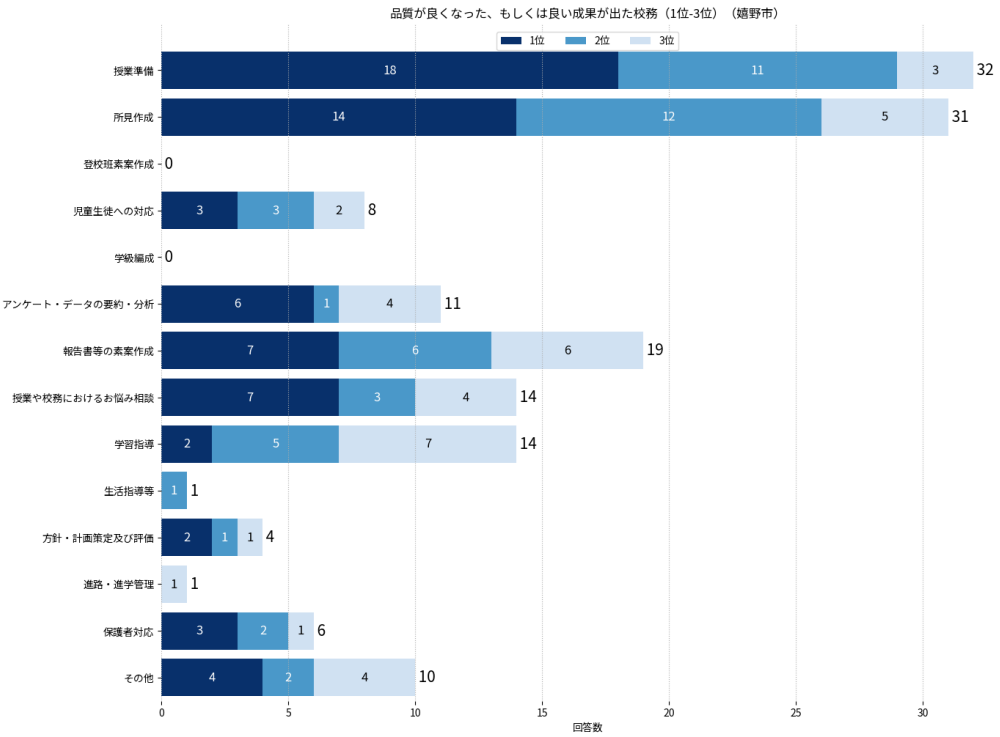


図 84 セキュアな生成 AI を利用したことによって、品質が良くなった、もしくは良い成果が出た校務上位 3 件（嬉野市）

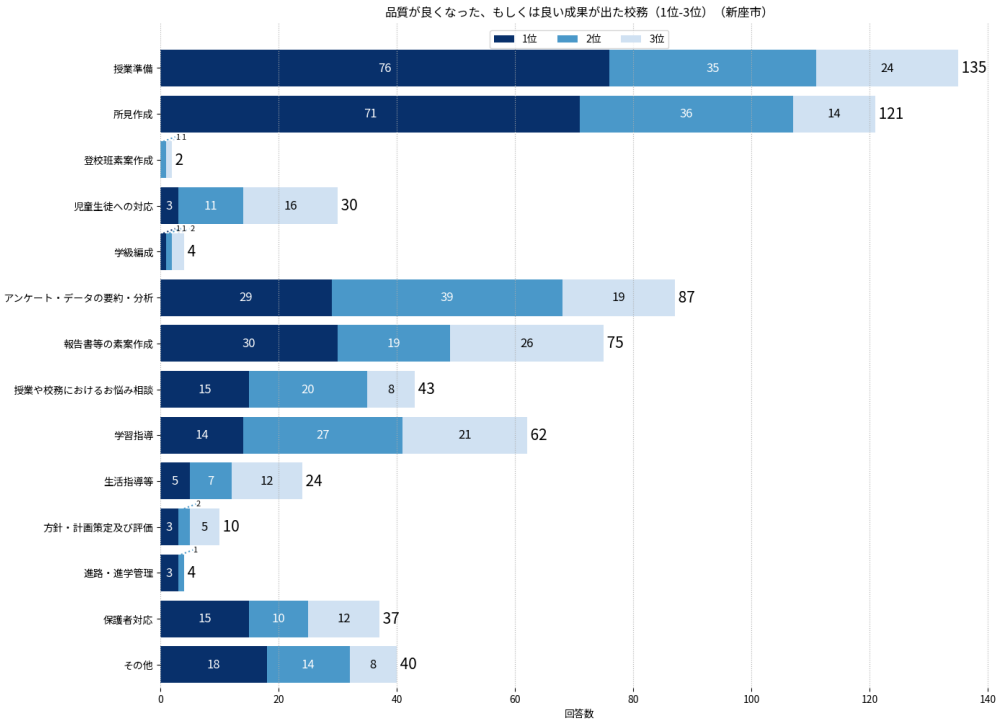


図 85 セキュアな生成 AI を利用したことによって、品質が良くなった、もしくは良い成果が出た校務上位 3 件（新座市）

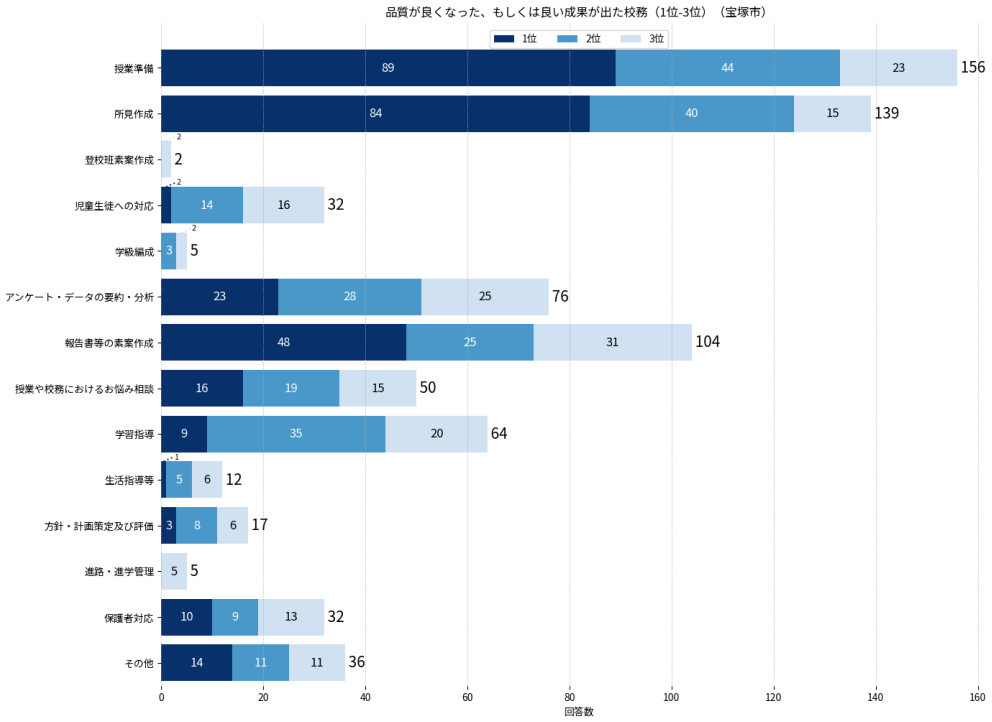


図 86 セキュアな生成 AI を利用したことによって、品質が良くなった、もしくは良い成果が出た校務上位 3 件（宝塚市）

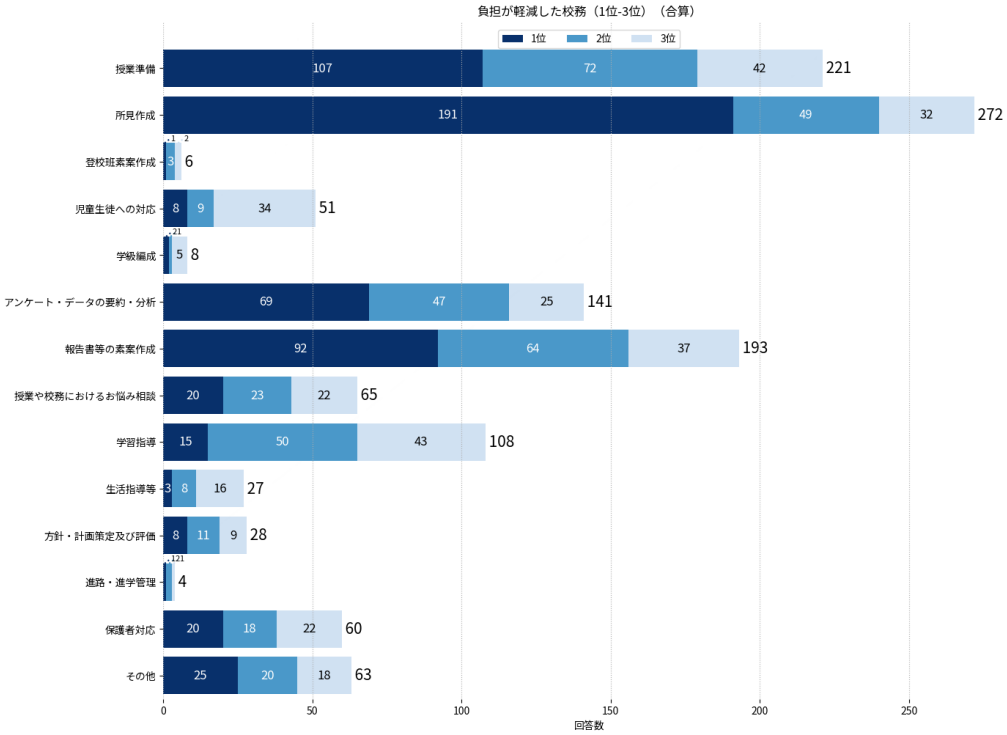


図 87 セキュアな生成 AI を利用したことによって、負担が軽減した校務上位 3 件（合算）

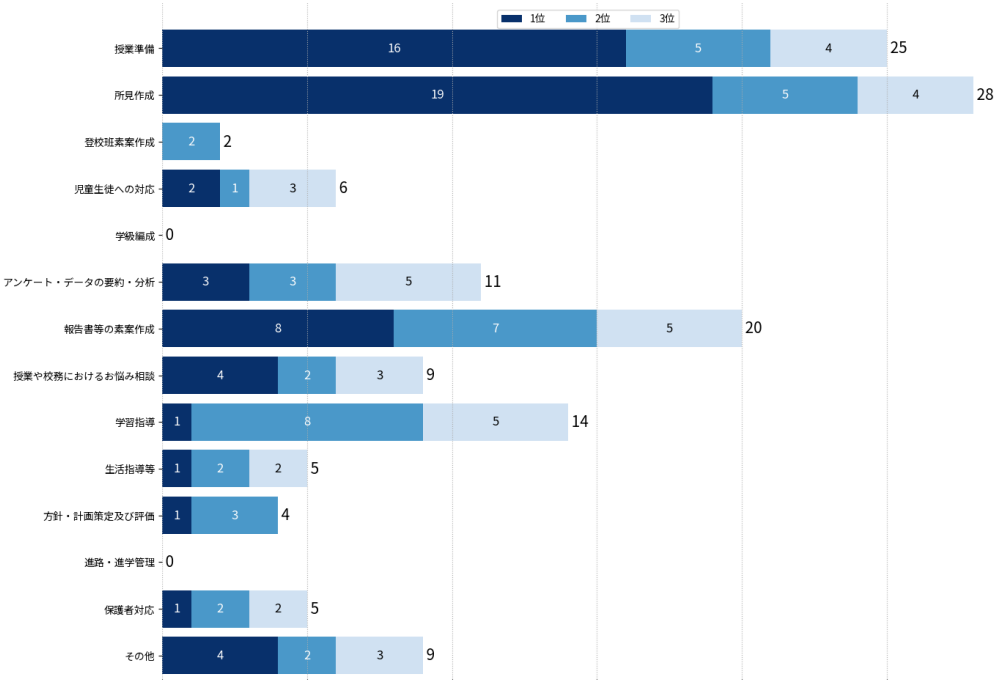


図 88 セキュアな生成 AI を利用したことによって、負担が軽減した校務上位 3 件（嬉野市）

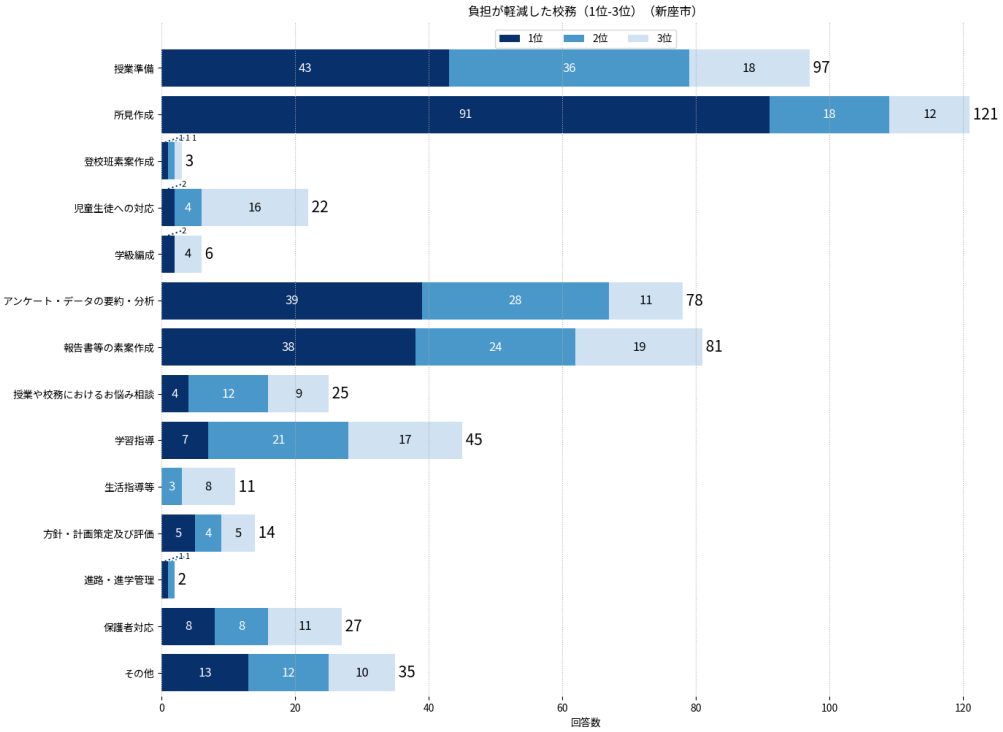


図 89 セキュアな生成 AI を利用したことによって、負担が軽減した校務上位 3 件（新座市）

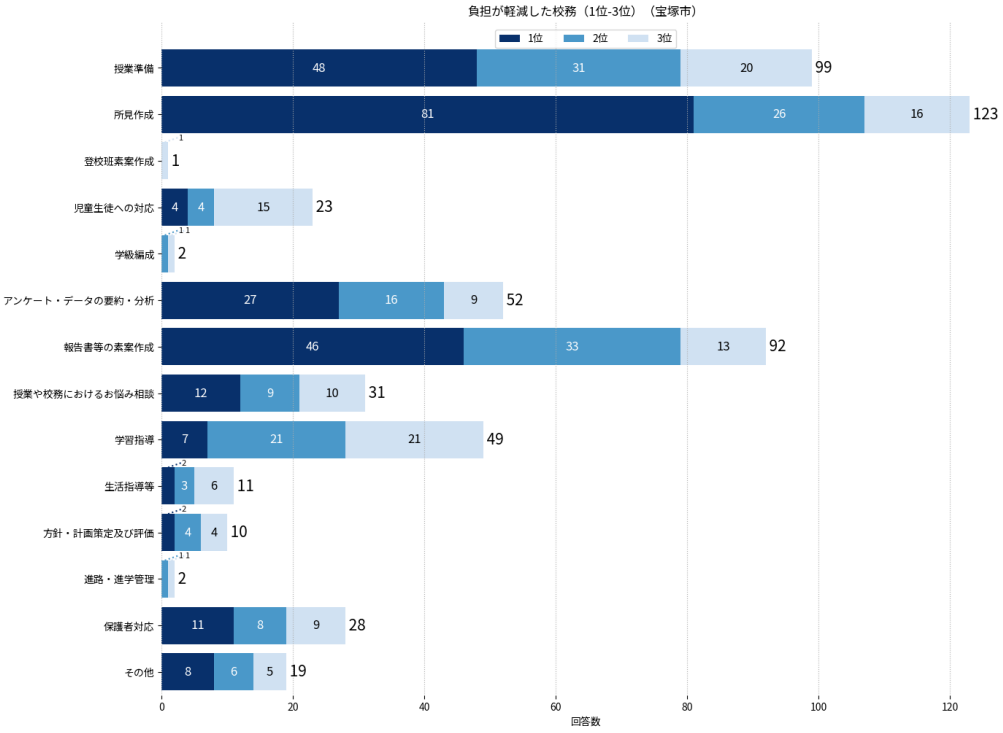


図 90 セキュアな生成 AI を利用したことによって、負担が軽減した校務上位 3 件（宝塚市）

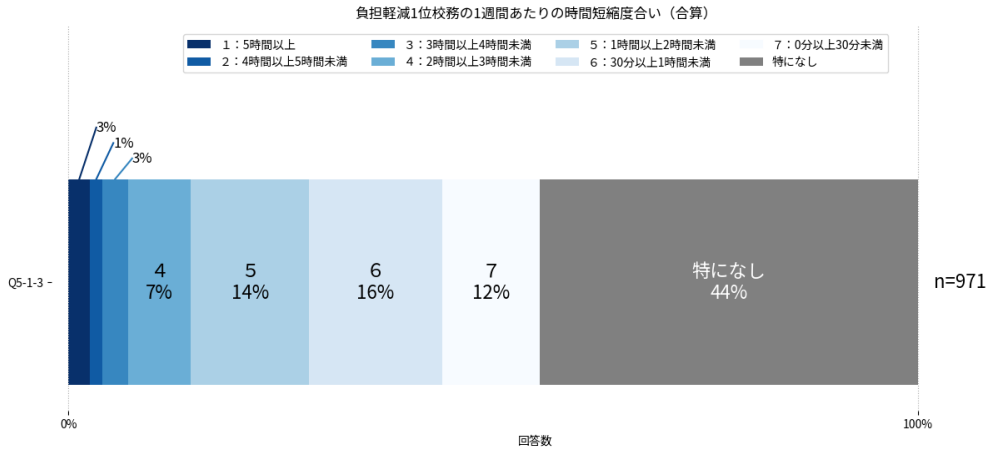


図 91 負担が軽減した 1 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い(合算)

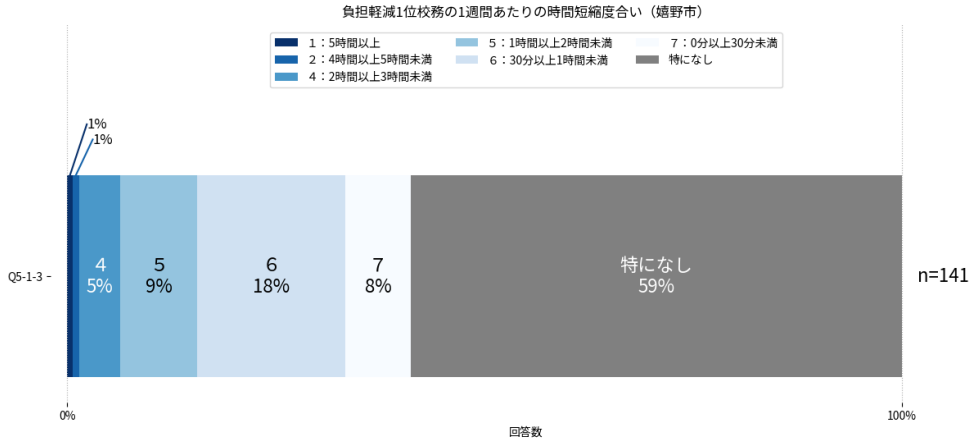


図 92　負担が軽減した 1 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い(嬉野市)

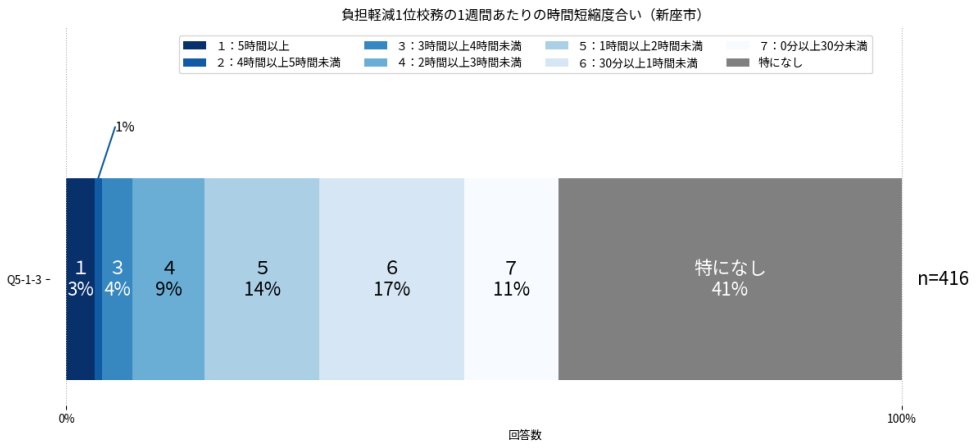


図 93 負担が軽減した 1 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い（新座市）

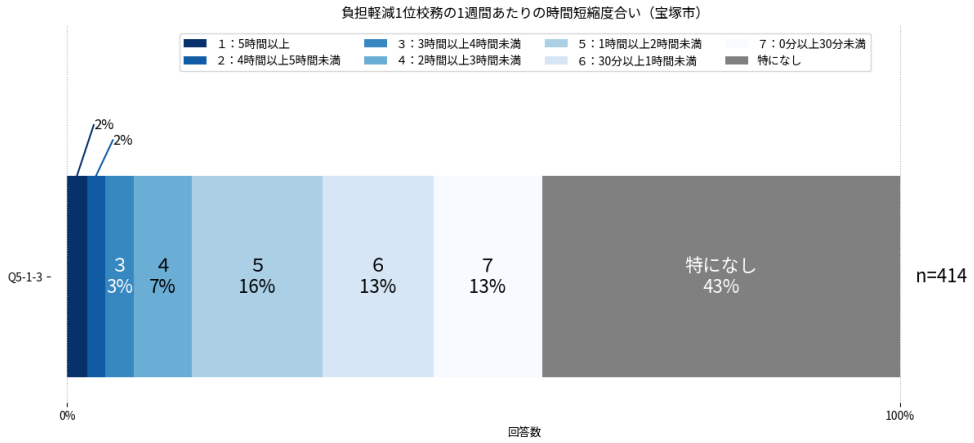


図 94 負担が軽減した 1 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い（宝塚市）

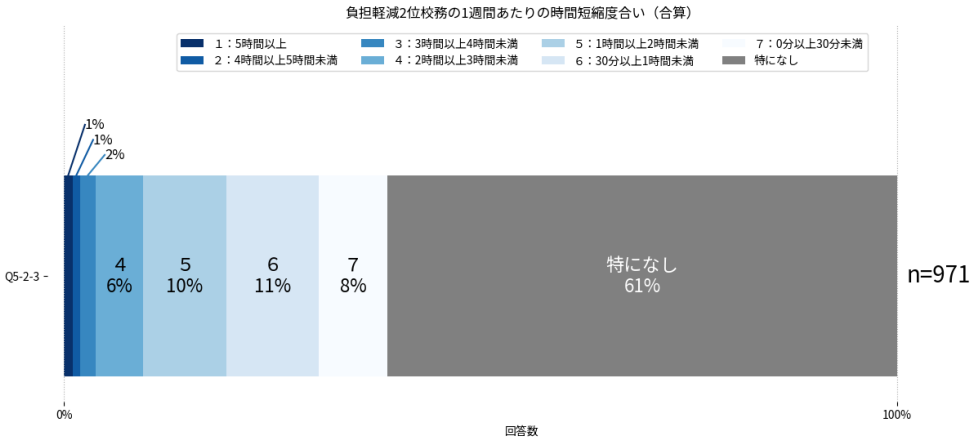


図 95　負担が軽減した 2 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い（合算）

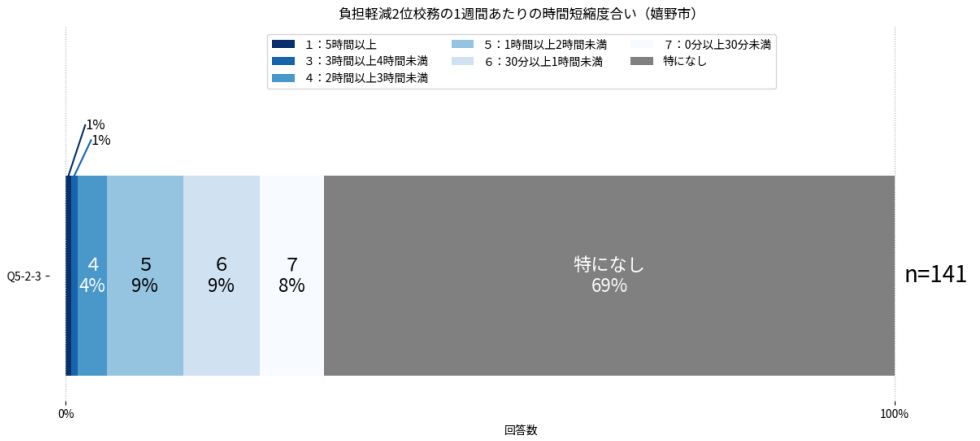


図 96 負担が軽減した 2 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い（嬉野市）

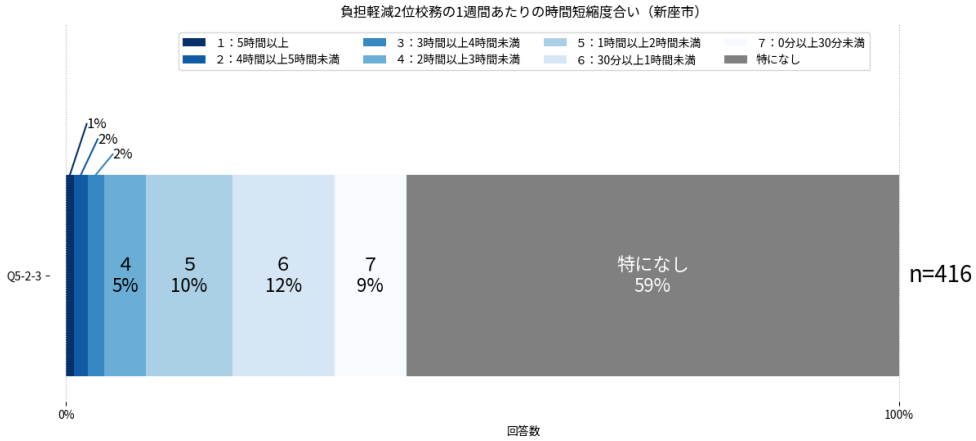


図 97 負担が軽減した 2 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い（新座市）

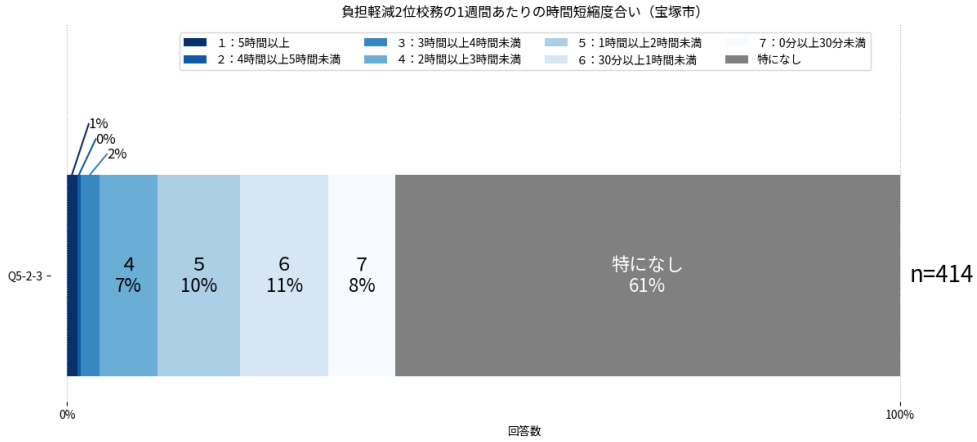


図 98 負担が軽減した 2 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い（宝塚市）

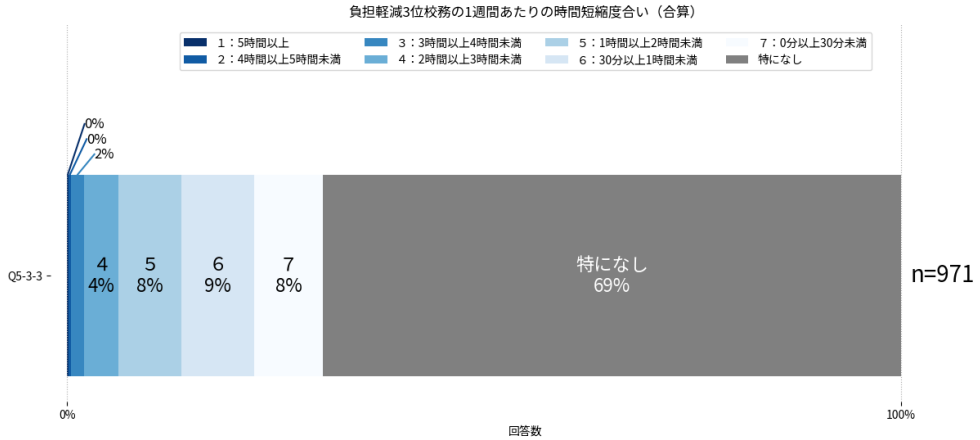


図 99 負担が軽減した 3 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い（合算）



図 100 負担が軽減した 3 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い(嬉野市)

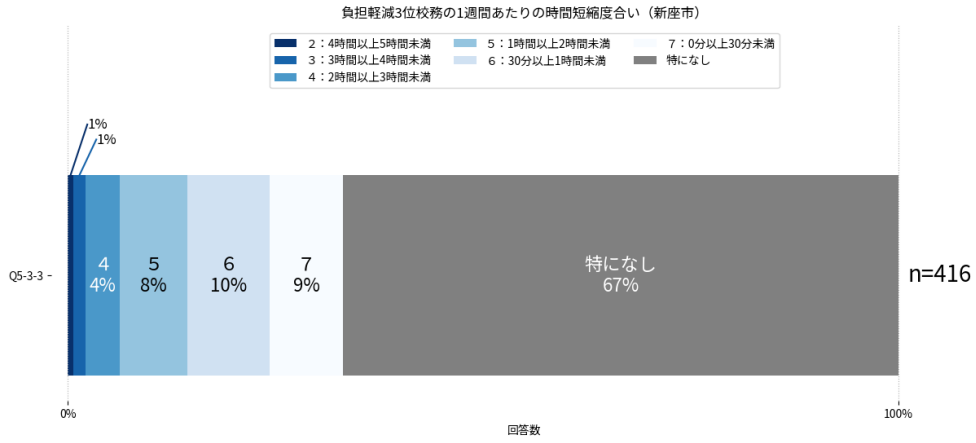


図 101 負担が軽減した 3 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い（新座市）

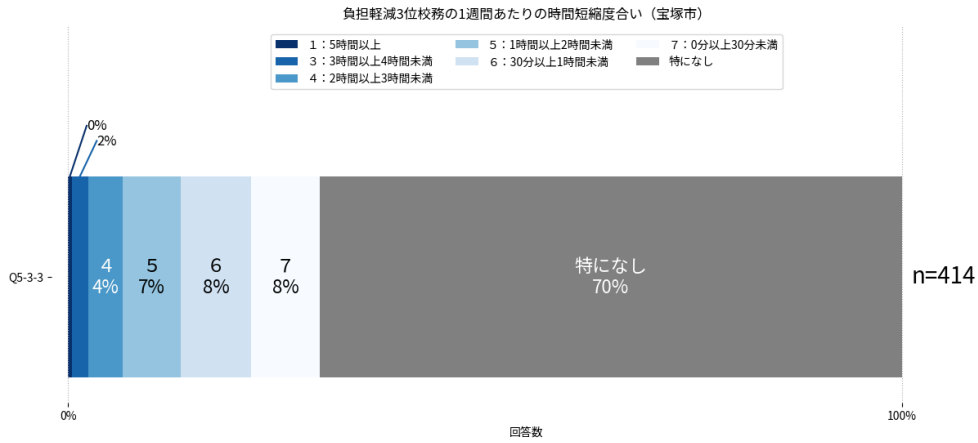


図 102 負担が軽減した 3 位の校務について、1 週間あたりの時間短縮度合い(宝塚市)

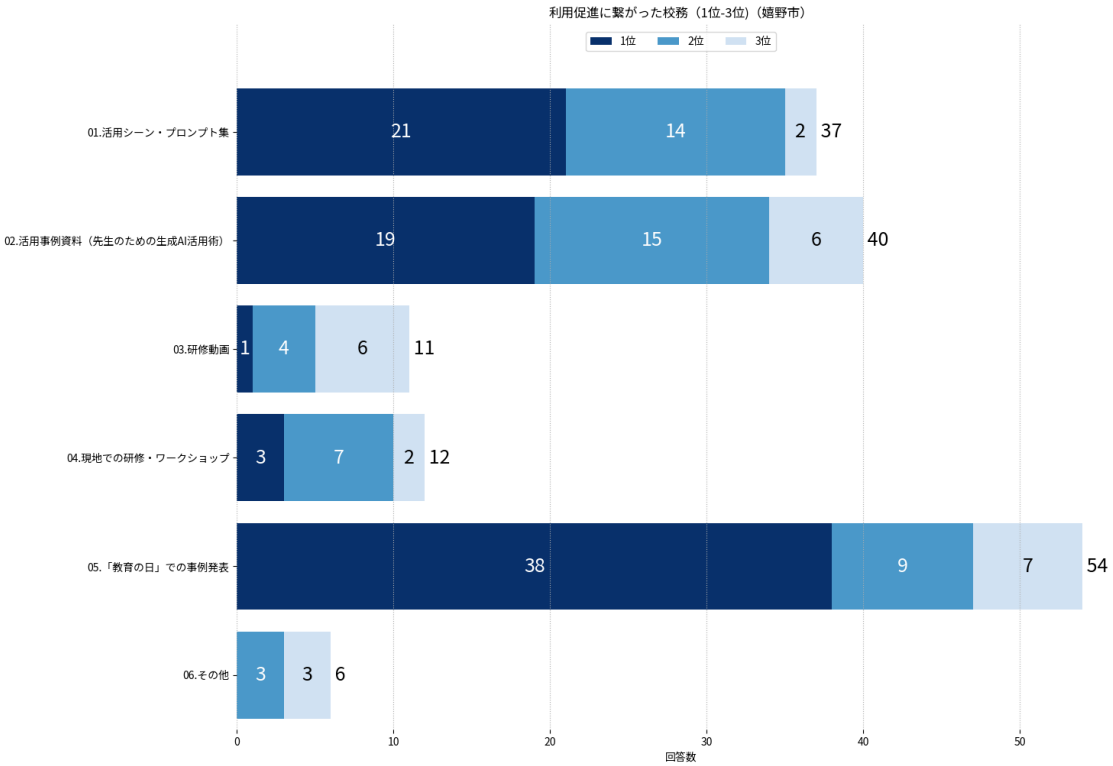


図 103 セキュアな生成 AI によって、利用促進に繋がった校務（嬉野市）

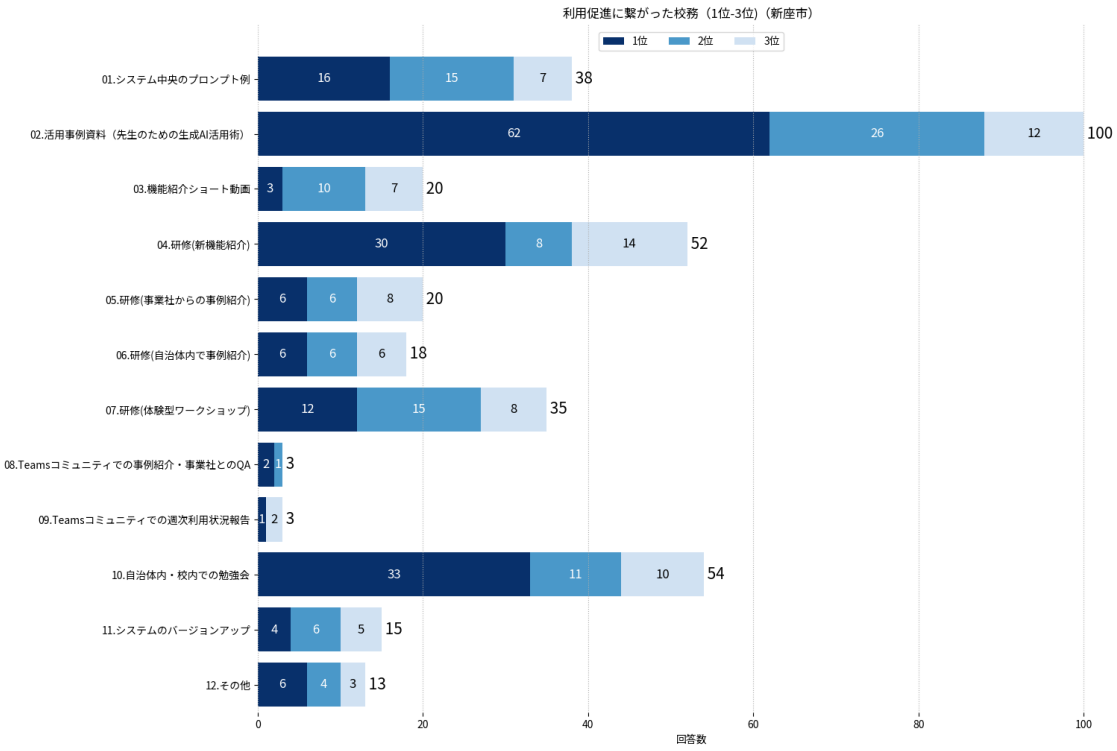


図 104 セキュアな生成 AI によって、利用促進に繋がった校務（新座市）

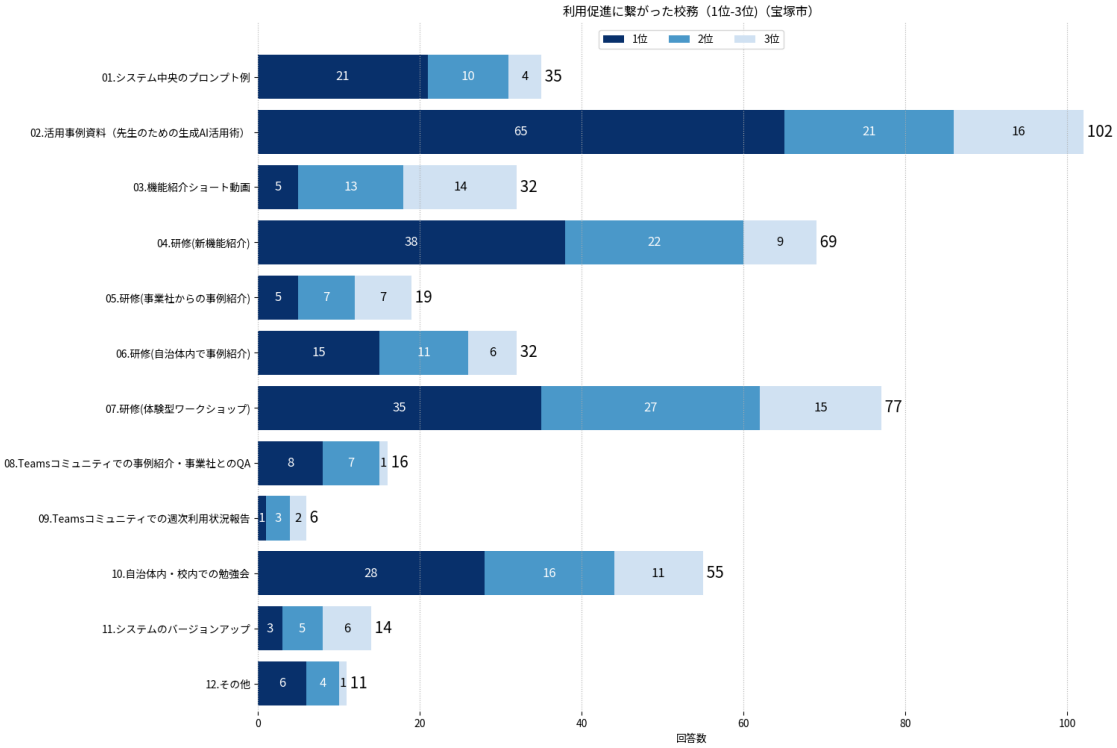


図 105 セキュアな生成 AI によって、利用促進に繋がった校務（宝塚市）

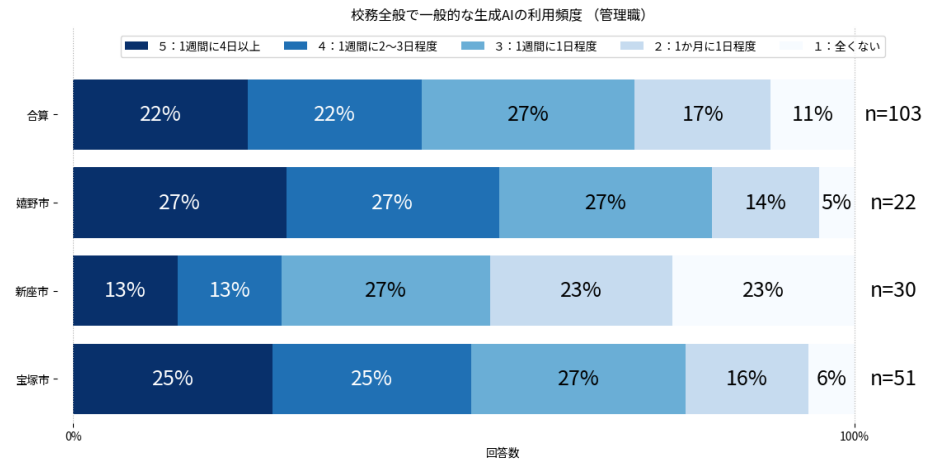


図 106 校務全般で一般的な生成 AI の利用頻度（管理職向け）

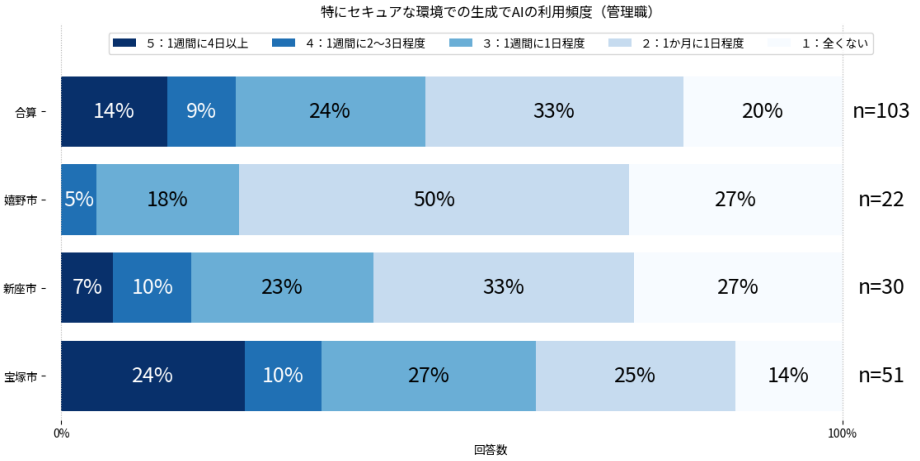


図 107 特にセキュアな環境での生成 AI の利用頻度（管理職向け）

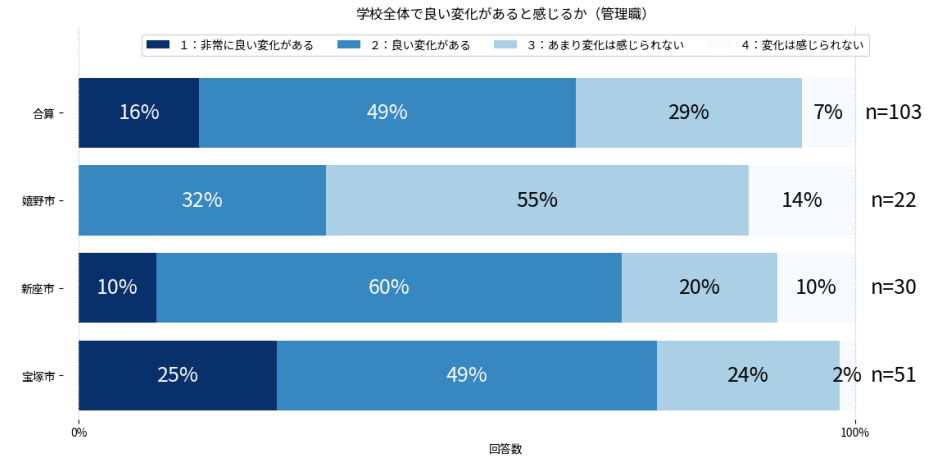


図 108 セキュアな環境下での生成 AI を導入することで、学校全体で良い変化があると感じるか（管理職向け）

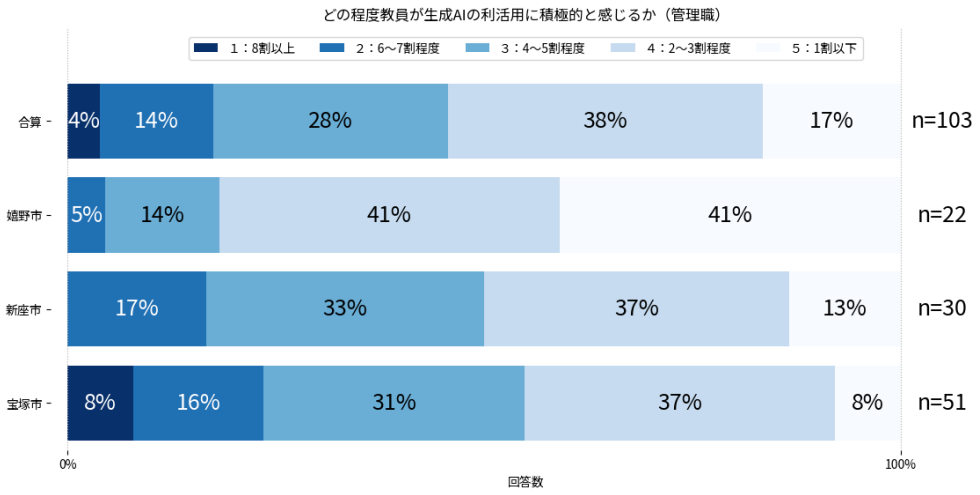


図 109 どの程度教員がセキュアな環境下での生成 AI の利活用に積極的と感じるか（管理職向け）

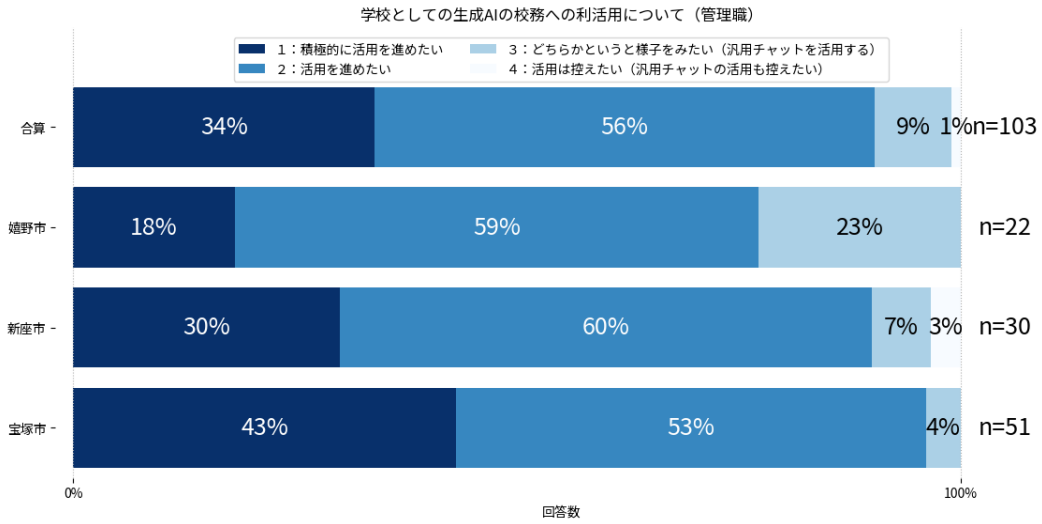


図 110 学校として、セキュアな環境下での生成 AI の校務への利活用についてどう思うか（管理職向け）